ISSN 2189-3268

# 大学連携会議「学輪 IIDA」

# 機関誌「学輔」

第5号 2018

#### 大学連携会議「学輪IIDA」

## 機関誌「学輪」

第5号 2018

機関誌「学輪」(第5号)発刊にあたり

P. 3

飯田市長 牧野 光朗

#### 2 学輪IIDAの取組

(1) 大学連携会議「学輪IIDA」全体会(公開セッション)

P. 5

「ナレッジリンクの一翼を担う田園型学術研究都市に向けて、

イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」

【コーディネーター】 立命館大学政策科学部 教授 平岡和久氏 【議論提起】 法政大学人間環境学部 教授 石神 降氏

(2) 学輪IIDA共通カリキュラム

P. 21

学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト 地域文化論フィールドスタディ 2017

静岡文化芸術大学文化政策学部 准教授 高島知佐子

#### 3 論説

(1) ニューツーリズムによる地域創生

P. 27

~世界人形劇フェスティバルとAVIAMA総会を通じて~

京都外国語大学外国語学部国際教養学科 壹貫田陽香

京都外国語大学外国語学部国際教養学科 恵島 尚子

金沢工業大学 客員教授 竹内 宏彰

京都外国語大学外国語学部 准教授 堀口 朋亨

(2) スーパー・メガリージョンがもたらす暮らし先進都市 飯田の可能性に関する研究

P. 33

神奈川県相模原市役所(東京大学大学院都市工学専攻 修士課程2017年修了) 道祖 英一

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授 瀬田 史彦

#### 4 研究ノート

総合博物館におけるプラネタリウムの活用

P. 45

- 飯田市美術博物館における実写ドーム映像利用の試み -

飯田市美術博物館、和歌山大学国際観光学研究センター 吉住千亜紀

和歌山大学観光学部 教授 尾久土正己

飯田市美術博物館 四方圭一郎

飯田市美術博物館 槇村 洋介

#### 5 報告

人形劇芸術を通した国際文化交流体験とその発信について

P. 53

- 飯田市における2018年人形劇の友・友好都市国際協会総会から -

津田塾大学総合政策研究所 客員研究員 大島

津田塾大学総合政策学部 教授 伊藤由希子

#### 6 書評

牧野光朗編著『円卓の地域主義-共創の場づくりから生まれる善い地域とは-』 (事業構想大学院大学出版部、2016年)

P. 65

大月短期大学経済科 教授 慎平 龍宏

大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

P. 69



#### 大学連携会議「学輪IIDA」

# 機関誌「学輪」(第5号)発刊にあたり



飯田市長 牧 野 光 朗

学輪IIDAは、「飯田」を起点に大学研究者同士が相互につながり、専門的な知見や外部の視点を活かしたモデル的な研究や取組を地域とともに行っていく有機的なネットワークであり、コンセプトは「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」です。平成23年1月の設立以来、メンバーも徐々に増え55の大学等から122名の方にご参加いただけるまでに成長してまいりました。

この機関誌「学輪」は、大学関係者と地域との連携により当市において展開される教育・研究・調査活動等の実績を蓄積・発信することで、学輪IIDAの学術研究機能向上を図ることを目的に発行しております。 機関誌「学輪」第5号の発刊にあたり、編集局を務めていただいた和歌山大学をはじめ、多くの学輪 IIDA関係者の皆様のご協力に対し、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

さて飯田市では、8年後に予定されているリニア開通を見据え、昨年は世界人形劇フェスティバルやアジアで初となる国際会議「AVIAMA(人形劇の友・友好都市国際協会)飯田総会」の開催が実現し、国際面、文化面からの当地域の魅力アップに繋がり、リニア将来ビジョンが掲げる「小さな世界都市」に向けて大きな一歩を踏み出しました。

また、今年から旧飯田工業高校の施設を活用した「産業振興と人材育成の拠点(愛称 エス・バード)」において公益財団法人南信州・飯田産業センターが本格的に運営を開始し、新たな雇用創出に繋がる産業振興と人材育成を進めています。これは、リニア将来ビジョンが掲げる「高付加価値都市圏」=「田園型の学術研究都市」実現への大きな一歩と捉えています。

一方、一旦はこの地を離れた若者が、子育て世代になる頃には帰ってくる「人材サイクル」構築により多世代が住み続けることで、持続可能な地域の創出が期待されます。その基礎となる「地域人教育」と大学との有機的な連携について、昨年の学輪IIDA全体会ではご議論いただき、本年度はそれに基づく具体的な取組が進展し、まさに「高大連携元年」ともいえる年となりました。この取組が、全国の高大連携のモデルになりうる先進的なものとなり、また学輪IIDAが有する知見を飯田へと還元することにつながればと考えており、一層の充実を期待するものです。

学輪IIDAメンバーの皆様におかれましても、それぞれのお立場から知見やネットワークをご提供いただき、飯田が「善い地域」を目指して様々な取り組みをさらに進めていけますよう引き続きのお力添えをよろしくお願い申し上げ、機関誌「学輪」第5号発刊にあたってのあいさつとさせていただきます。



# 大学連携会議「学輪IIDA」全体会(公開セッション)

平成30年1月20日(土)

# 「ナレッジリンクの一翼を担う田園型学術研究都市に向けて、 イノベーションが起こる地域社会創造を目指して!



#### ○司会者

これよりフリーディスカッションを開催いたします。 テーマは「ナレッジリンクの一翼を担う田園型学術研究

テーマは「ナレッジリンクの一翼を担う田園型学術研究 都市に向けて、イノベーションが起こる地域社会創造を目 指して」でございます。

フリーディスカッションを開催するにあたり、ファシリテーターと議論提起いただく先生を紹介いたします。

まずファシリテーターですが、立命館大学政策科学部 平岡和久先生です。

平岡先生のご専門は財政学、地方財政論です。ほかにも地方自治体の経済、福祉、住民自治組織など、農山村の地域づくりに関連する分野に広く関心を有されています。自治体問題研究所副理事長、日本地方自治学会理事などをお務めです。学輪IIDAの共通カリキュラム構築プロジェクトにおいて中心的な役割を担われるとともに、毎年学生たちと共に当地域へ調査・研究等で訪れています。

続きまして、議論提起をいただく先生ですが、法政大学 人間環境学部 石神隆先生です。

石神先生のご専門は、サスティナブルな地域づくり、地域産業経済、都市と水の関係史などです。飯田市においては、第4次基本構想基本計画の策定や「いいだ未来デザイン2028」の策定で未来デザイン会議専門委員を務められるなど、当地域のまちづくりに様々な角度から提言等をいただいています。学輪IIDAのメンバーであり、「南信州・飯

田フィールドスタディ」にも毎年学生たちとともに参加を されています。

それでは、平岡先生より進行をよろしくお願いいたしま す。

#### ○平岡ファシリテーター

本日は学輪IIDA全体会始まって以来、「円卓の地域主義」ではないですが、フラットな関係で自由にディスカッションをしていただきます。

テーマは、「イノベーションが起こる地域社会をどうやって創造するか」、「イノベーションをどうやって創造するか」ですので、自由活発な、フラットな議論を展開するしかないのではないか、と思います。

先ほどの報告は大変すばらしいもので、特に高校生の報告には圧倒されたところですが、ぜひ、市長、それから産業界や国の機関の方々、地元の色々な方々を含め、フラットに議論ができ、その中から良いアイデアが出てくるような進め方にしたいと思います。よろしくお願いします。

最初に石神先生に議論提起をしていただきます。その後、 ディスカッションの時間を大きく2部構成に分けて進めた いと思います。

前半では、「イノベーションが起きる地域とはどういう地域か」、あるいは「それを担う人材について考える」ということを議論していきます。

後半では、この飯田がイノベーション社会を作っていくためにどのような地域人材を育てていくか、またその時に、地域、そして本日発表のありました高校、企業、そして学輪IIDAといったものの役割や新たな連携のあり方、可能性についてディスカッションをしていきます。

最初に、市長から問題提起がありました。高校教育というものが大きく変わってきつつあり、その1つが、本日、非常にすばらしい報告をされた、飯田OIDE長姫高校で行われている地域人教育ですが、そうした地域人教育を大学や飯田の社会にどうつなげていくかということです。そうしたことを自由にディスカッションしていただきます。

それでは早速ですが、議論提起として石神先生から口火 を切っていただきます。よろしくお願いします。

#### ○石神教授(法政大学)

今回のテーマは「ナリッジリンクの一翼を担う田園型学術研究都市に向けて イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」です。「田園型学術研究都市」、「イノベーション」、それから「地域社会」をキーワードに少し考えてみたいと思います。

田園都市の成立過程は皆様も十分ご存じかと思いますが、これ自体が大変なイノベーションでした。19世紀から20世紀に次ぐ頃、ロンドンでは過密、過度集中、そして不衛生が課題となり、それに対して周辺の田舎では、いわゆる過疎、それから若者がどんどん出ていってしまう、という課題がありました。

この両方の課題を何とか解決できないかということで、これに「魅力」という概念を取り入れました。都市に行けば社会的な機会が多い、雇用が多い、楽しい場所が多い等プラスの磁石がある反面、都市に行ったら過密で汚い、空が見えない等のマイナスの磁石もあります。田舎はその逆です。

であるならば、イノベーションとしてその両方の良いと ころを取ったそういう町ができないか、これが当時エベネ ザー・ハワードの考えた田園都市の基本的な発想です。

両方の魅力を取り入れたこの新しい結合自体がイノベーションです。都市と農村の結婚、これがテーマだったのです。

それをコンパクトな形で創り、1つ1つが自立性を持っていると同時に、それぞれがネットワークでつながっている、というのが田園都市の基本的な考え方で、一般的な話です。

#### 田園都市の地域イノベーション的理解(新結合・魅力度・自立性)





Eberseer Howard "Garden Cities of Tomorrow" 1900

これを私なりに、「一体、田園都市とは何なのか」、「田園 型学術研究都市とどのような関係があるのか」を考えてみ たものが、この次であります。

かつて18世紀イギリスの詩人ウィリアム・クーパーという人は、「田舎は神がつくり、都市は人がつくった」と言っています。ハワードの田園都市では、田園と都市の二項対立をベースに考えていたのですが、ここでは、田園と都市

の関係性を有機的かつ積極的に考えてみたいと思います。

環境問題を指摘した有名なレイチェル・カーソンの本に『センス・オブ・ワンダー』があります。人間が生まれながらに持っている「センス・オブ・ワンダー」、つまり神秘さ、不思議さ、これに目を見張る感性が大事で、これをいつまでも持っていてもらいたいということです。虫の動き、空の雲1つ1つにもすばらしいと感じることがまずは大事なのです。女史は「『知ること』は『感じること』の半分も重要ではない」と、感じることの大切さを強く訴えています。

さて、この感じたことは、そのままにしておくとその人限りで終わってしまいますが、都市というのは色々な人が集まり、色々な文化的背景があるので、きちんと人に通じる言葉で相対化する、言語化する必要があります。ですから、感じたことを知るということにしないといけない。図で示す田園から都市へのルートです。

#### 田園型学術研究都市の地域イノベーション的理解: 態性と知性の創発的蓄厚の場 "センス オブ ワンダー" と イノベーション



美しいものを美しいと感じる 高覚、新しいものや未知なも のにふれたときの感激、思い やり、情れみ、 類映や製情な とのさまざまなおの感情た。 なての対象となるものについ はそのとなりないと思う ようになりました知識は、 して扱いと考しているうし していたりたとなった。 していたりたした知識は、 していた身につきます。

> レイチェルカーソン 「センス オブ ワンダー」

そして、知ったことをお互いに議論、連結していくという、「都市の中で」また新しい知識が生れ、そしてそれをまた「田園の中で」自分で体感することで、さらに再び深く感じることができるというルートになります。こういう田園と都市のスパイラルな発展型の関係性が1つのイノベーション装置として、これから大変に有効なものになると思っています。

これらは子供の発達の過程で重要だと考えられる、「感じること」の意味、そして「知ること」との関連性とも類似であろうかと思います。大人にとっても同様で、「感じること」を知識化し、それによってまた一層深く感じとり、それがまたさらに知識の高度化につながっていくというルートでもあろうかと考えられます。

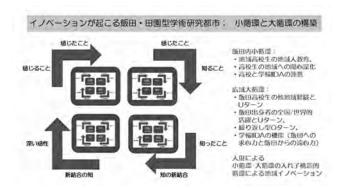
この構造は、イノベーションの研究で有名な野中郁次郎 先生のSECIモデル、暗黙知から形式知への転換モデルで もあります。

#### イノベーションが起こる飯田・田園型学術研究都市に向けて 野中郁次郎「SEC(モデル」の飯田地域イノベーション 構造構築への応用 共同化・ 飯田育ち 飯田滞在 表出化・ 他世界経験 資料交流 結合化: オープンイノベーション 内面化・ 飯田回帰・ UOターン 人財による。 暗黙知・形式知の循環構造構築 形式知 形式知 形式知 形式知 形式知 の飯田地域イノベーション 構造構築への応用 共同化: 飯田育ち 飯田滞在 表出化: 他世界経験 資料交流 結合化: オープンイノベーション 内面化・ 豚田回帰・ UOターン

地域の中で経験を共有していることが暗黙知です。お互いにツーカー、いわゆる「あうんの呼吸」というのが地域にあります。暗黙知というのは実体験からくるもので、これをもっと膨らます、創っていくことが大事です。と同時に、それを形式知にする、みんなで議論して1つの知識化するという、この過程が大事になります。そうすれば、そこでまた他の人や地域の間で知識を連結することができます。

飯田で考えてみると、飯田育ちの人々は非常に地域の共通体験があり、すばらしさを身体で感じています。その人々がさらに他地域の多様な背景のある世界で活躍することで、体現している暗黙知の形式知への変換能力が磨かれる。この形式知に変換された暗黙知、皆でその形式知を集めていき、知の結合を図る。オープンイノベーションです。そして、それを体化、すなわち自分のものとし、また飯田に戻ってきて、実体としての素晴らしさをより深く体感する。それがまた知識化されて発展していく。この構造というのは、都市と農村の関係でより高度なイノベーションのルートができるのではないかと思うわけです。この循環構造です。

このように考えてみますと、さらに小循環と大循環があって、飯田の中に小循環があります。先ほど色々と発表があった地域の高校生や中学生が行っている地域人教育は、地域でわかっていると思っていることを、より知識化して知るということです。このルートがあることによって、また地域をより深く知ることができるという、この小循環です。



この構造があるので、例えば、学輪IIDAが、高校生、あるいは中学生と連携し、さらに地域内の小循環、イノベーションの小循環を発展させることができるのです。

さらに言えば、その小循環構造を皆が理解、体現していくと、今度は大循環構造が理解、色々なことがフラクタル的な相似構造として理解でき、怖くなくなり、挑戦ができるようになるわけです。飯田の外に積極的に出て行って、自信を持って活動しまた様々な議論を進めることができるわけです。

当然ながら、例えば飯田と東京とで考えてみると、もちろん東京にもこの循環構造はあるはずなのですが、飯田自体が、田園都市の性格を体現しているという点において、小循環の構造をベースに、大循環を踏まえての本格的な地域イノベーションが進むのではないかというアドバンテージが考えられるのです。

これを更に大きく考えてみると、日本はこの左上の部分で、全体で見ると何となく暗黙知で形成されており、これは一種のいわゆるガラパゴス的な状態ともいえるかもしれません。多様な背景を持つ世界に出るためには暗黙知から形式知化、知識化することが必要になります。飯田という小循環をベースに考えると、大循環、そして国際的な循環構造につながっていく素地が多いに考えられるわけです。

繰り返せば、以上のような循環、大循環と小循環が常に 入れ子構造のようになっていて、これをよく体現できうる ところが飯田という場の強みなのではないかと思います。

特に学輪IIDAというのは、これを行ったり来たりする、一種のUターン、グルグル回るという意味では Oターン、こういう役割もあるのかと思います。

飯田から出ていった人がまた戻ってくる、そして、また出ていくという、グルグル回るOターンの中にこの飯田という場があることにより、新しくイノベーションが進展する、と考えています。このイノベーションのスパイラル、小循環、大循環、このようなことは飯田だからこそできるもので、飯田のポジションは強い優位性を持っていると思っています。

話は少し変わりますが、かつて、研究所の活動そのものを研究テーマとして調査研究をしたことがあります。

その時、MITに日本人の老先生がいて、その先生に話しを聞いたことありました。MITというのはマサチューセッツ工科大学のことで、非常にイノベーションが盛んなところです。その先生が言うには、日本から技術開発に関心を持つ色々な方が見学に来て構内を案内するのですが、見学の最後に自分の部屋に戻り、ソファに座って印象を聞くと、「よくこれでイノベーションできますね」という感想が多い、とのことでした。

つまり、優れた先端機器がたくさんあるイメージで見学 に来たが、極端に言うと、そのようなものは殆ど無く、机 とソファぐらいしかなかったということです。

その先生は「ベイカンシーだ」と言うのです。ベイカン シー、空っぽの研究所、つまり何が来ても対応できるとい うことなのです。

「研究って一体何だと思いますか?」と先生に逆質問され たことあるのですが、先生は、「同じプロセス、同じ材料、 同じやり方での研究は1回しかやらないよ」と言うのです。 そのため、「仮に大きな専門装置を持ってしまうとその機 械にあうような研究に固定されてしまう」、だから「固定さ れない研究を融通無碍にするためには、何も無い方がよ い」と言うのです。

そこでのやり方としては、研究には、ますシナリオライ ティング、研究のシナリオを書き、研究を分割できるもの は分割し、その部分を、世界の中で最も優れた、最も得意 なところに出す、つまりアウトソーシング、外注するので す。そして、その結果を集めてきて1つの結論を導く、と いうやり方だということです。フレシキブルにあちこちに 出し、その成果を集め、結論に持っていくというやり方で す。研究を分割して外に出せるというのはすごいことです。

常に研究というのは動いている、新しい問題がどんどん 出てくるので、それに対して対応するためにはベイカン シー、それからフレキシビリティが大事だということなの です。大きな重装備型の研究機関ではなくて、ハイファン クション、要するに眼に見える装置ではなく、常に機能、 眼に見えない強い機能を持っていることが大事、というこ とです。これからのイノベーションにおいて非常に重要な 考え方なのだと思います。

ベイカンシー、それからフレキシビリティ、そういう意 味ではナレッジリンクを中心とした立地、それから、人材 のUターン、Iターン、Oターンがあることで、人を介して 常に情報が行き来していること、今後は学輪IIDAの存在、 これらがあるため、田園型の学術研究都市というのは、ま さに飯田にぴったり合っているのかと思います。

アウトソーシング型の研究を考えた時に、3つ大事なこ とがあると考えられます。

1つはシナリオライティング能力、構想力です。構想力 というのは非常に大事で、それをどこで、どのような場で やるか。感覚が研ぎ澄まされるところ、感じるものが沢山 あるところで、非常に鋭い構想を練る、その環境がまず大 事な条件です。

もう1つはアウトソーシングをする時の人材の動態的な 目録が必要です。どこに誰がいる、何をやっている、今は どうか、常にそれを知っていなくてはいけません。それは、 結局行き着くのは人の関係です。これがこれからの大きな 強みになります。

そしてもう1つは、一緒にやろうという気持ちを起こさ せることです。

例えば、MITから頼まれたら是非やりたい、MITと一緒 だったら精一杯やりたいという気持ちになるということで す。飯田と一緒にやりたい、飯田と一緒だったら頑張りた いといった、いわゆる協働への誘因で、これは一種の権威 といっていいものなのかもしれません。協働による実利も もちろん関係していますが、そのためにも、やはり権威、 オーソリティを持つというのが大事な条件かと思います

この3つがないと、このフレキシブルなアウトソーシン グ、ハイファンクショナリーにならないと思うのですが、 飯田は基本的に全てが可能性として備わっているのではな いかと思います。

岸田國士の文書を読んでも、これら全てが飯田にはベー スとして整っているのではないかと思われます。この飯田 の特長をもう1回磨き活かすということが、田園型学術研 究都市として基本的なアドバンテージになるのではないか と思います。

#### イノベーティブな学術研究都市の要素から飯田地域イノベーションを考える "IIDA High Functional System"

- ベイカンシーの確保 : 田園型学術研究都市としての飯田の強み
- フレキシブルな結合 ナレッジリンクの中心的立地的な強み ・求心力と遠心力の脈動 : 人財UIOターン、学輸IIDAの存在
- プンイノベーションに必要な基本要素の飯田的源泉の存在
- シナリオライティング能力(構想力の環境)の源泉: 「飯田美しき町山ちかく水にのぞみ、・・、飯田静かなる町」
- ・アクティブなディレクトリー (人財/技術ファイル) の源泉 「人みな 言葉やわらかに、・・、ひとびと 礼にあ ・オーソリティ保持 (孤高的魅力、協働への誘引) の源泉 :: 「創巻としてお解のごとくだにたつ歌、・・ ・ ままりないませいのまといった。・・ ひとびとれにあつく. ・・」

森原型分: 坪田田土「飯田の町に増す」より条件

老若男女みなそれぞれの詩と哲学とをもつ町 飯田 ゆかしき町)

学輪IIDAとの関係で少し付け足しをします。スタン フォード大学のクラインという先生が、「研究開発、R&D、 こういうイノベーションというのは、研究があって、開発 があって、生産があって、販売がある、という1つの直線 的な流れの中で、大学等いわゆる知識機能というのは、最 初の研究のところと一番関連が深いと、以前はいわれてい たが、実はそうではなく、どの段階においても常にイノ ベーションがある」という趣旨のことを言っています。



それらどの段階でも情報は行き来していて、お互いにフィードフォワードや、フィールドバックしており、もし仮にそれぞれの段階で分からないことがあったら、知識のストックにちょっと聞きに行くという話です。

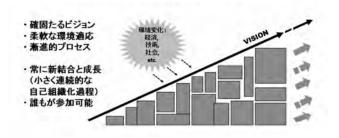
知識のストックはなるべく近くにある方が良いようです。 歩いていけるところ、長くても半日行動圏にあり、分から ない時にパッと聞きに行くと、そこに人がいる、という感 じです。

もし問題に対応する知識がストックされておらず、本当 に分からなければ、研究に値するものになります。知識機 能と共に研究機能としての役割が必要になってきます。

この学輸IIDAは1つのタスクフォース、機能集団、1つの地域のひとつの知識のストック、それから地域知能、非常に柔軟な集団です。これは飯田地域のイノベーションと非常に関係すると思います。学輸IIDAを位置付けるモデルではないでしょうか。

最後に、田園型学術研究都市を目指しての今後の展開プロセスについて一つの考えを述べてみたいと思います。これを進めていくには、常に一種の社会実験のように試行錯誤しながらやっていくことが大事と考えています。

#### 飯田・田園型学術研究都市実現に向けての一戦略 ビジョンの堅持 と 漸進型成長プロセス



ただし、試行錯誤だけで進めると、どのようになるか分からないため、まず確固たるビジョンを持ち、その中で、小さくてもよいから1つ1つ行うことです。そうして1つ行うと次に行うことが見えてきます。もし途中で変になった場合は、バックしてやり直しをします。小さければバックできるわけです。

このように、一種の自己組織化的に成長をしていく形で 進むのが現実的だと思います。環境というのは常に変わる ので、ちょっと先の環境を見て小さくやる、そしてまた次 に進む、というやり方がよいとも考えられます。

そうすると、1つ1つ積み上げ型になりますから、計画に時間、すなわち時々刻々の取り巻く環境情報が入ってきます。最終到達形を先に考えてしまうとその中に時間が入らないのですが、積み上げながら考えていくと、時間が入り、成長していく、ということです。その様なやり方です

と、当然ながら、場の重要な主体者として市民が入りやすくなりますし、言うまでもなくそうでないとうまく行きません。色々なことを知っている人が、この田園型学術研究都市のプロセスに参加するということが鍵になってくるのかと思います。

少し急ぎ足でしたが、議論の口火としてお話させていた だきました。

#### ○平岡ファシリテーター

石神先生、ありがとうございました。

石神先生から、様々なモデルを飯田あるいは学輪IIDA に当てはめ、非常に示唆に富む問題提起をいただいたと思 います。

暗黙知と形式知を田園都市というところで、また、都市 と農村の関係、あるいは小さな循環から大きな循環、色々 なモデルを示されたと思います。

市長の提起と、それから石神先生の口火を切っていただいた提起を受けまして、所属とお名前を言っていただき、 ご自由にご発言ください。

最初のテーマは、「どうやって地域でイノベーションが 起きるのか」、「どういう地域でイノベーションは起きるの か、あるいはその担うべき人材とは何か」です。

それでは堀口先生、お願いします。

#### ○堀口准教授(京都外国語大学)

今、社会は大きな変革期にあると考えています。産業革 命以来、人間は仕事をする中で人生の姿を見つけていく、 ということがありました。

最近良く話題になっているのが、AIが発達すると人類の 仕事が奪われてしまうのではないかという指摘です。

イギリスのケインズが昔、「100年後の人類は余暇をどのように楽しむか、自由時間をどのように過ごすかが大きな課題になる」と言いました。同時期に、ドイツでもニックリッシュという経営学者が「仕事というのは自分のプライベートの人生を充実させるためにするのだ」と言っています。

先ほど話がありましたが、今まで都市と田園、農村の対比では、都市に知識が蓄積され、地域では経験が蓄積される、と言われるように、役割分担のようなものがありました。

ただ、これが新しい時代においては、都市型の知識の蓄積によってイノベーションが起きるのではなく、いままでの人間の生き方を変えたり、余暇を充実させたりするようなところからこそイノベーションが起きてくるのではないかと思うのです。

インバウンドがその典型だと感じるのですが、そういう ものから新しいイノベーションが起きてくるということが 考えられます。

そして、イノベーションの起爆剤としてゆとりなどを考

慮した場合、飯田の持っている力は非常に大きなものとなります。

その力の源泉は何かというと、文化資源であると思います。文化資源を豊富に持っている地域が、このような余暇を中心とした社会において非常に重要になるのではないか、そこでシュンペーターがいう創造的破壊が起きるのではないかと考えております。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。それでは、次に儀間先生、お 願いします。

#### ○儀間教授(東海大学)

私の方からは3点、述べさせてもらいます。

1つが、今のような時代は、前提と結論から導き出される方法論という形で考えた時に、演繹論と帰納論という従来のやり方では答えが出ません。色々な仕掛けを役場に持っていくと、役場の方は「前例がない」とはねるのですが、前提から推論される結論、アブダクションという方法論があります。

「空き屋が多かったら町が衰退するのではないか」や「だから空き屋ビジネスをすべきじゃないか」は、1つの希望論から出てきた推論ですが、こういう方法論があるというのが1つです。

2つ目ですが、大学の先生方で話をすると、どうしても 議論になりがちです。

ですから、沖縄のケースを紹介したいと思います。先ほど高校生たちが発表した内容ですが、沖縄では中学生たちに的を絞って行っています。

沖縄のケースでは、最初から販路を大人たちが確保しており、累計で中学生たちの売り上げが10億円あります。そのお金で子供たちはディズニーランドに行って、おもてなしの勉強をして帰ってきます。

そのときの資金繰りですが、全日空や日本航空等、企業から逆にお金を集めるのです。そういう方法論に関しての意見が1つです。

3つ目は、高校生が中学生とか小学生たちと連携しているのはすばらしいことなので、子供たちが誇りを持つというところを着地点にして取り組んでいただければ、育った子供たちが全部飯田に帰ってくるのではないかというのが1つです。

利益を上げるという目標、それから子供たちに地域に誇りを持ってもらうという目標です。ちなみにこれで沖縄県のある地域は大学に行っても高い学力を示しており、かなりの成果を上げているということです。

実際沖縄県で成功した事例をベースに発言をさせていた だきました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では、伊藤先生、お願いしま

す。

#### ○伊藤教授(津田塾大学)

現在、地域連携協定の締結を飯田市と津田塾大学とで検討中で、この度のテーマについては私自身も勉強中の身ではあるのですが、1つキーワードとして石神先生の発表に付け加えると、「ユニーク」、つまりオンリーワンの価値だと思います。

どんなに良いことをやっていても、他の都市と同じよう な取組だと埋もれてしまうのです。

「飯田にしかないもの」はとにかく大事にしないといけないと思います。それが1つあるだけで、人材の意味でも資金の意味でも求心力になり、新しい市場の開拓につながるのではないかと考えています。

例えば、私の所属する津田塾大学が現在取り組んでいる福井県鯖江市との連携では、眼鏡フレームという鯖江市の名産品をいかに売り込むかという話をしています。鯖江の眼鏡フレームは、眼鏡における中間財に過ぎないので、高い物でも5万円ぐらいしかしないのですが、多くの技術と工夫が詰まっています。 その価値はユニークですから、例えばアラブに持っていって、100万円ぐらいで値を付けても良いのではないか、と思うくらいなのです。

同じように、水引も大変すばらしい工芸品であるにも関わらず、個人的には値段の安さにびっくりしました。せっかくですから300円くらいではなくて、10万円ぐらいで売れる場所や機会を見つけるというのも大事なのではないかと思いました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では、ヴァルデンベルガー先生、お願いします。

#### ○ヴァルデンベルガー所長 (ドイツ日本研究所)

イノベーションはどこで行うべきか、その場所はどこに あるのか。既存組織は限界があると思います。

ですから、そういう既存組織ではなくどこかその外、そして、どういうところから人を引っ張るか、新しい人に参加してもらうための多様性をどうするかなどを考えなくてはいけません。

飯田には色々な知識を持っている方が沢山いますので、 飯田について知識を持っている方とそうでない方の出会い の場を作り、意見交換できるような刺激的な機会を作る必 要があります。

国際交流というのも1つであるのですが、一時的なものではなく、継続的に行われ、ちゃんとフォローアップしているところは、1つのアイデアだと思います。

そういう多様性の機会や場を作る必要があると思います。 ○**平岡ファシリテータ**ー

ありがとうございました。では、小門先生、お願いします。

#### ○小門教授(法政大学)

シリコンバレーは一人当たりGDPでみるとおそらく10 百万円を超えており、日本の数倍ある経済的に極めて豊か な地域です。しかし、忘れてはいけないのは地域の社会と しても豊かな地域であることです。

今日のお話の趣旨に沿うとすると、イノベーションのポイントは市民性です。シリコンバレーの特徴は、人々が自由・闊達に、対等に自主的に、自分の自分たちの問題として、当事者意識をもって、動くところにある。しかも、地域も組織も入口と出口が開かれていて、人々の新陳代謝も日常的に起きる。そのような状況の中で情報が攪拌される。コミュニケーションの量が半端でない。コミュニケーションが交差して攪拌される。

その背景には、飯田という地域コミュニティにもそれがありますが、市場的(経済的、自己利益のために情報交換を行う)人間関係ではなくて、贈与的な(無償で情報交換を行う)人間関係が、言い換えると市民的人間関係性、それが相当分厚い。そのような贈与的会話が夥しく交わされている。そこは大数の法則の世界です。閃きが発せられることがある。そのひらめきが、贈与的世界でなく市場的な世界に価する情報であると認知されたところで、シリコンバレーのエコシステムが駆動し爆発する。そのような爆発が繰り返されるなかで、起業が起き企業がどんどん成長していく。

彼らはイノベーションとは社会的プロセスだと言ってい ます。アイデアがあるだけではダメで、それがどのような 社会課題を解決するのか、日本的な技術の改善、いいかえ ると10を11に、10を20にするようなものではありません。 ゼロを一にするレベルのものである。「無」からあまねく人 類に役立つような「有」を生み出す。みんなが求める社会 的課題であるからこそ爆発する。彼らの言葉で言うとス ケールするのです。表面に現れることはありませんが、潜 在意識的には、神の意志に沿う善をなすことが主眼です。 金儲けではなく、社会課題を解決するために仕事に情熱を 注いでいるということです。だからこそウーバーやエアビ のような会社が、小さな企業から生まれるのです。時価総 額が10億ドル(1100億円程度)以上で未上場の会社が増え ています。ユニコーンと呼ばれます。それが全米で100社 以上誕生している。中国でも80社(中国政府発表)あると 聞きます。日本ではユニコーンは1社です。彼の地でのイ ノベーションは質量とも加速化しています。イノベーショ ンの発想が日本とは違います。

イノベーションの源として彼らが気付いたのが、石神先生が言われた感性の問題です。西洋人的な暗黙知としての感性です。それが極めて大事なのです。感性の豊かな人を集めて感性を鍛える。色々な人を集めてきて、いってみれば感性のマネジメントをしています。それがアクセラレタ

であり、d-shoolであり、デザイン思考です。彼らはイノベーションの波が加速化していることを心得ていて、その感性の世界にビジネス合理性を持ち込んだのです。短時間に大量にアイデアを発する仕組みを考えました。情報の攪拌を通じて感性に発する閃きのプロデュースを行い、プロジェクトを仕上げていきます。それを暗黙知でなく形式知・アルゴリズムに落とし込んで仕上げています。人間の感性をマネジメントして新しい価値を生み出そうとしています。時間を待っているのでなく、時間に働きかけているのです。そこまで来ています。さほどに時代が速く回転しています。

そういう中で、社会の基本にあって極めて重要なのは、市長の言ったOSです。ナレッジマネジメント的に言うとエンベッデド・ナレッジ(embedded knowledge)というのですが、人々に埋め込まれた地域の慣習的行動パタン。それらは知識体系として理解され、ビジネスの基本OSとして機能している。しかもそれを支えるのは神の存在です。自分の人生が最後は神の前で審判をうける、その時の行為が神に付託された人生に対するアカウンタビリティであります。彼らの神は自分たちが生み出した西洋文明であり、偉大なる社会学者ロバート・ベラーがいう市民宗教(public religion)です。行為の基盤に神の存在がある。それが行動のイノベーションの源泉です。善を目指して生きるという倫理観が徹底されているように読み取れます。

市民性が高じて市民宗教になったといってもよいと思います。西洋文明は「大きなものがたり」を完成させ、人間中心の社会を生み出しました。人間至上社会です。アメリカは宗教の自由化を憲法修正第一条で決定しています。いわば、世俗的な宗教に競争原理を持ち込みました。その根幹、その基底には、共通の人間としてのスピリット、倫理をちゃんと持っています。大統領が就任演説の時に聖書に手をおいて宣誓するがごとしです。それはシリコンバレーでも同じです。エネルギーの根幹が社会の基盤に蓄えられていて、共通善に向かっていつでも走り出します。地域のために何かをしようというエネルギーに転換します。

その原点は、個々人の当事者意識、自立/自律意識であり、宗教的に言うと行動しないと天国に行けないというアクティブアシュケーゼであり、最後の審判で言い訳をするアカウンタビリティという習性があるということができます。西洋社会ではその基盤があって一般(贈与的社会)社会と経済的市場的社会がうまく併存している。決して経済原理が優先するわけではない。しかし経済合理性で勝負するときは、きちんと、このようにベクトルが上を向いている、そういう社会になっています。しかも、シリコンバレーは人間的な田園的都市空間です。

時代の加速化、イノベーションの加速化は、とりわけiPhone革命後のベンチャーの大衆化・簡易化により、シリ

コンバレーがサンフランシスコを巻き込む形で新しいフェ イズを迎えました。旧来の田園型ハイテク集積が都市型と コンバージェンスしています。言い換えれば、シリコンバ レーが北上、北に延伸したのです。GAFA、とりわけ googleの社員がサンフランシスコの家賃を挙げており社会 問題化しています。ベンチャーの大衆化、イノベーション の加速化という意味では、アップル主催のWDSという年 1回集会ありますが、そこに9歳の黒人の女の子が招待さ れて話題になりました。成功アプリのインベンタです。 iPhoneに載っているアプリが何百万個、売上も何百億と聞 きます。iPhoneが世界をすさまじいスピードで変えてい ます。グーテンベルグ以来の大発明です。世界を変えまし た。しかも時代はアップルやアマゾンは個人データを取っ ていますが、最近は、どうやってデータをとるかに焦点が 移り、スマートスピーカーでのデータ取得が注目され、 Amazon、googleから安価に販売され始めているのです。 データが価値の源泉となる時代に突入しています。このよ うなすさまじい動きのなかで地域経済を考えないといけな い時代になっています。

新陳代謝を起こす、刺激を与える、そして感性を豊かにする、市民性を持つ、それぞれが自分の人生を大事にして、自由に行動し、そこで社会課題を解決すべく問題提起して、動いています。市長の言う当事者意識です。

それが私の理解したシリコンバレーです。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では、小澤先生、お願いしま す。

#### ○小澤氏(公益財団法人 都市づくりパブリックデザイン センター 顧問)

最初に、飯田OIDE長姫高校の校長先生に伺いたいのですが、本日は商業科の生徒さんのプレゼンテーションがありましたが、高校の中には商業科以外にも様々な専門科があるかと思います。そういう各学科の生徒が商業科と同じように、合同で地域とこういう活動をすることは可能だと思います。高校生の活動を聞かせていただいて非常に感動しましたが、これをさらに進化させていただきたいと思います。

また、それとの関係なのですが、これからイノベーションの話になるにしても、これからはデータベースで色々なことを市民の方、関係者の方に見える化して理解してもらい、それが結果として合意形成につながり具体化していくことになるので、データが非常に重要になると思います。これは既に言われていることで、グーグルやアップルがデータを取っています。

この辺の分野に詳しくはないのですが、デジタルデータ は完全にそういうプラットフォーマーに取られてしまって います。 しかしながら、これから我々が議論する、地域をより良くしていこうということは、地域の人たちが考えて、行動して、合意形成をして初めてできることなので、デジタルデータの世界だけではそこに到達しないのではないかと思っています。

そうなると、いわゆるアナログ的データ、要するに意識や価値観の問題が重要になってきます。例えば、地域のお年寄りがどうしてあのような暖房器具を使っているのか、というのは、それぞれの人生の歩みなどを含めて、アナログ的な意識なり価値観があります。その辺りのデータを、地域データベースとしてきちんとストックをしていくためには、高校生や中学生、小学生の存在が非常に重要になるのではないかと思います。

大人や市役所が地域のお年寄りに質問してもなかなか返ってきませんが、小中学生や高校生が各家庭で質問すると、「それは学校のことだから」ということで、より深いところからの意識のデータが上がってくるのではないかと思います。このようなデータは地域の人でないと発掘できないし、整理できません。

それができたら、ものすごい財産なのではないかと思いますので、そこに向かって、高校生を含めて若い人たちの活動が行くと良いかと思いました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。飯田OIDE長姫高校の三沢校 長先生、いかがでしょうか。

#### ○三沢校長 (飯田OIDE長姫高校)

本校は、平成25年度に飯田工業高校と飯田長姫高校が統合して開校しました。商業科の生徒は地域人教育をやっており、本日発表させていただきました。

商業科のほかに、機械系、電気系、建築土木と大きく分けると3系統、工業は電気機械系と建設系で6学科7学級 方式という、長野県では比較的大きな高校になっています。

その中で、商業科の地域人教育が先行して地域連携や企業との連携を進めているのですが、工業の方でも連携はしております。ただ、先生方と企業が一対一で結びついてしまうという問題点があります。そのため、その先生の異動や、年度が変わって忙しくなってしまうと関係が切れてしまいます。

そういう部分が問題点であって、いま工業の方でも人材 育成委員会という外部者の委員会ができています。

建設系であれば建設業協会というような、長姫高校時代からOBの方たちで結成した組織もありますので、そういう強力な支援団体等と結びつきながら、地域連携や企業界との連携が進められておりますが、やはり先行しているのは商業科の地域人教育だとは思います。

あと、乗り入れの部分等につきましても、今言った学科 が併設していますので、それを生かしてお互いの科目、専 門科目を選択し合うとか、あるいは全部の学科の生徒が乗り入れて行う勉強という科目もできています。

総合技術高校ということで、長野県の中では県内に3校 ある内の1校になります。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。工業という論点もありますので、 、 、 、 な本専務理事からお話をいただきたいと思います。

#### ○萩本氏(公益財団法人 南信州・飯田産業センター 専 務理事)

自己紹介しながら、イノベーションについてお話したい と思います。

先ほどの石神先生のお話を、大変感慨深くお聞きしてお りました。

今日のテーマは「イノベーションが起こる地域社会の創造を目指して」になっておりますが、当地には皆さんご存じのように、いよいよ2027年にリニア中央新幹線が開通します。だからまさに、ここはイノベーションを仕掛けるのにふさわしい地域なのだと思っているところです。

一方、世の中は高齢化時代です。2027年の開通を待つまでもなく、25年頃には、団塊の世代の皆さんがすべて後期高齢者になるのだそうです。私もその一人ですが、この世代の人たちが、これから単に若者世代の人たちの負担になるだけの時代を迎えたら大変なことになる、というのが私が日ごろから思っている問題意識なのです。

実は私は、昨年までの20年間多摩川精機の社長や副会長を務め、会社のトップマネジメントに携わってきました。 そして昨年、その役割を終えて退職し、新たな挑戦をしようとシニア起業家を目指すことにしました。

組織のトップというものは、自由であり何でもできそうに思われがちですが、実はそうでもないものなのです。立場が自らを縛りつけ、自由を自分で奪って、やりたいと思ってもできないものなのです。「これをやるといいな」と思いながら、実はやらなかったことが沢山あります。そこで、退職しその立場を離れたのだから、今度は自由な立場で新たな挑戦をしようと思い立ち、退職してすぐの昨年12月1日に、新しい会社を創業しました。

起業・創業は若者たちの特権のようにもみられていますが、実はシニアでないとできないこと、思いつかないこともあり、シニアだからこそ挑戦できることがあると考え実行に移しました。

今からは、自分の事業を成功させるのはもちろん大事な 目標なのですが、他方で、「私のこうした行動が、シニアの 皆さんに一石を投じ、刺激になったらいいな」とも思って いるのです。

また、こうした行動は大都市でないとできない、のではなく飯田のような地方都市でもできるのだということを、 私は身をもって体験し、示していきたいと思っています。 それは、まさに今日のテーマである「イノベーションが起こる地域社会の創造」につながるのではないかと思い、紹介させていただきました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。

ご承知のように人生100年時代ということを言われています。

シニアの皆さん方は衰える部分はありますが、衰える部分をカバーするだけのものがあり、そうした方々が活躍することによってイノベーションを起こしていくということを、非常に重要な問題として提起されている面もあります。そのようなことを地方都市でも起こしていくということを実証されようということかと思います。

それでは次に、廣江先生、よろしくお願いします。

#### ○廣江学長(東京家政学院大学)

いきなり皆さん議論に入られてしまうのでちょっとついていけないところがあります。

石神先生に議論のフレームを提起していただきましたので、これについて意見ではなくて、1点だけ質問させていただきたいと思います。

先生もご承知のように、イノベーションを起こす前提としてのクリエイティビティは何なのかという時に、それを「人」に求め、それをクリエイティブ・シティという概念でとりまとめているチャールズ・ランドリーの考え(創造的都市論)があります。

実際に、その考えに拠って大阪市立大学大学院には「創造都市研究科」が出来ていますし、またルーツは一緒ですが、横浜市は「創造都市横浜」を、神戸市は「デザイン都市神戸」を謳っています。札幌市も同様に「創造都市さっぱろ」と言っています。

それらは大都市での話ですが、クリエイティブ・シティという議論は、実は何も産業や資本の集積が大きくはなくても、クリエイティブな人(クリエイティブ・クラス)さえいれば「イノベーションを起こせる」という発想だと思います。

例えばそうした主張をしているリチャード・フロリダは「ハリウッドではなくてニュージーランドの片田舎にいても世界的なヒット映画を作れる」という事例を挙げてもいます。

もっとも、フロリダは1900年代末には「トヨティズム」ということで大量生産体制を超える日本的生産方式を称賛していた研究者なので、どこまで本気で「創造的都市論」を主張しているかはちょっと疑問ですが、それはともかく「人である、環境ではない」、あるいは「集積ではない」という議論が一方にはあることを、先生の議論のフレームではどのようにとらえているのか、とらえていないのか。その理由と併せ教えていただくことが、次の議論に発展する

と思っています。

#### 〇石神教授(法政大学)

ありがとうございます。

言うまでもなく、これからの産業社会の大きな生産要素 というのは、機械設備や輸送などのインフラに加え、さら に大事な要素は人です。それは知識社会において顕著です。

人がどこに住むのか。昔は職住接近、つまり職があると 人が集まる、ということだったのが、今は住職接近です。 有能な人が住んでいるところに職業が来るという、そうい う時代にひょっとしたら転換するのかなと思っています。

人がどこに住むか、長く住まなくてもどこに頻繁に行くのか考えてみると、リチャード・フロリダという人が言っている「気持ちの良い場所」をいかに提供するかが大きな産業のインフラになる、そんなフレームで考えています。

大きな設備やインフラでなく、人ということになると、 集積のスピードが非常に早くなる可能性があります。

つまり、人がいるとそこから一種の知識の磁力性が発揮されるので、さらに人が集まり、そうすると、さらにそこから大きな磁力性が出て、また集まる、という、一種の雪だるま式に、プラスのフィードバックのようにどんどん大きくなります。このスピードは非常に早いのかと思います。ですから、これからの学術研究都市のできるスピードというのは、これまでとは全く違ったスピードで拡大していくのかと思っているのです。

なおかつ、今までは都市ということでそういう議論が多かったのですが、これからは田園と都市の関係というのが 非常におもしろく、このイノベーションが将来の日本ある いは産業経済の構造を変えていく、そろそろそういう時代 に入ってきているのかと思っています。

#### ○廣江学長(東京家政学院大学)

その中に飯田を位置付けるとどうなるか、簡単にお願い できますか。

#### 〇石神教授(法政大学)

それは私が申し上げるまでもなく、岸田國士が「飯田って良い場所だ」と言っています。ここは、ある種の位の高い、権威のある場所だと。

それから飯田は、ともかく人が良い。人の中に歴史も体現されていて、人当たりが良い。こういうところに人が集まり、情報が集まり、人のネットワークができます。そういうものが飯田のアドバンテージだと、先ほど申し上げたと思うのです。これはもう皆様の方が、よくご存じかと思います。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では最後に堀尾先生、お願い します。

#### ○堀尾名誉教授(東京農工大学)

先ほど、萩本さんが言われたことに少し追加させていた

だきたいと思います。

私は、地球温暖化対策の立場から未来を考えてきた人間ですが、石神先生が言われた都市と田園、そのつながりの必要性がこれからますます高まっていくと思っています。

温暖化対策から考えますと、従来型の工業の担い手、いわゆる鉄やセメントなどの重化学工業は、CO<sub>2</sub>を半分ぐらい出しているのですが、雇用においてもGDPにおいても占める割合は非常に少ないのです。

これからの時代は重化学工業でない工業、あるいは農ともつながった色々な新しい産業がますます花開く時代になっていくだろうと思います。

そのときに、従来、大産業の下にいた中小企業の皆さんが、多摩川精機のような立派な会社のように、どれだけ自 律的に、自分たちの頭で考えるか次第で、沢山の中小企業が変わっていけるチャンスが来るのではないかと私は思っています。

そういう意味で、飯田の中小企業さんにはこれから大きな課題と可能性があるので、学輪IIDAの企画でも、中小企業さんの課題取り上げていかれたらと思います。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。議論はまとめませんが、私が感じたことは、石神先生の提起で出された田園都市飯田が、「実はシリコンバレーも田園都市なんだ」と言われ、しかも、飯田が持つ市民性を、シリコンバレーでも重要視し共通善というのを大切にしている。そういう点では、サンデルの公民性という理論にもつながるのかと思いながら、改めてお聞きしました。

それから一人ひとりの人生を大事にしていくということ や、入口、出口のオープン性、さらにその余暇や人生を楽 しむ、そういう文化政策の重要性、そして飯田が文化的な 場であるということです。

少し私の方で感じたことを述べさせていただき、次の テーマに移らせていただければと思います。

もう少し具体的なテーマとして、最初に市長が提起され、本日は大学生、高校生の発表もあったところで、イノベーション社会を担う地域人材の育ちに向けて、大学、地域、高校、企業などが、どういう役割を果たしていくか、どのような新たな連携が可能なのか、そういう可能性や、アイデアも含めてお出しいただければ幸いです。

では、儀間先生、お願いします。

#### ○儀間教授(東海大学)

先ほどの話の繰り返しになりますが、沖縄では既に企業がスポンサーとなり資金を出し、シリコンバレーに実際子供たちを派遣しています。

英語でプレゼンもしてもらいますし、海外でICTの経営者を出したいということで企業が音頭を取ってやっているというのが沖縄のイノベーションなのかと思います。

それから、子供たちの販路を大人たちが作った後に、子供たちにその特産品を作ってもらっているのです。ですから、累計の売り上げが10億という数字も上がっています。 ぜひ利益が上がる仕掛けづくりを飯田で取り組んでほしいと思っています。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では、高島先生、お願いします。

#### ○高島准教授(静岡文化芸術大学)

先ほどの議論をお聞きしていて、イノベーションを起こすということは多様性とそこに交流があり、なおかつ境界を横断できる、もしくはボーダーレスなのかと思います。

さらに先ほどのご発言の中から、経験をするアナログの 方がより重視されるということなのかと感じました。

今の高校生は、高校で地域や学力によってだんだんと分断されていき、そして、また大学で色々な地域の人たちに出会う、という状況に置かれています。そのため、ある程度割られた中で大学進学や就職などを考えなければならず、非常に狭い視野になってしまいます。

学輪IIDA等には沢山の大学が来ていますので、むしろ地域に大学があるところより、全国の大学から大学を選べる状況なのではないかと思います。

どこの大学と連携したいなどと考えていくことで、そこに交流や多様性が生まれ、それにより高校生にとっては経験というものを持って次にステップアップしていくことができる、ということが考えられると思います。

その時に、産業なども非常に重要なのですが、生き方の 多様性などということを考えていくと、起業などというこ とも、地域だからこそできることだと思います。

そして、そういうものを受け入れる土壌というのは、やはり私の領域でいくと文化というところにあると思いますので、そこをつなぎ合わせて、高校生に何をどのように経験してもらうかということを考えていく必要があるかと感じました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では、中川先生、お願いします。

#### ○中川准教授(京都外国語大学)

ヴァルデンベルガー先生、高島先生のお話にも出ておりました、多様性と交流の場をどう持たせるかという話にちょっと乗っからせていただきます。

来週、ダボス会議が開催されるわけですが、あれこそ多様性のある、政、財、官、NPO、そして世代を超えて20代から上は本当にいわゆる国家元首まで色々なステークホルダーの方々が集まる場です。私は、その場にヒントがあると思いました。

私は本日この学輪IIDA全体会に初めて参加し、もしか

したら、この場こそが大きな可能性を秘めているのではないかと感じました。

例えばダボスの場合ですと、この廊下の外に、大量に個別のミーティングブースみたいなものがあり、そこで色々な話し合いが行われます。非常にアドホックに行われるのですが、垣根を超えて色々な官と民、政と民、民と民のリーダーの方々が直接話をして、新しい契約がそこで起こるということが沢山起きています。

このことを考えますと、この学輪IIDA全体会を、既に7回やっているということなので、これを繰り返し行い、ここでは何かおもしろい人が集まりおもしろいことが起きているという評判を作っていくというのが、非常に重要なのではないかと思います。

大学関係者以外にも色々なビジネスや、あるいは政官や 文化、異なる方々がさらに交流をし、そこで胸襟を開いて 交流ができる場ができれば、もしかしたら、「この町は何か おもしろいことが起きている」という評判が起こるのでは ないかと思います。

これこそがまた新しくイノベーションが起きる町になるのではないかと感じております。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。次に、槇平先生、お願いしま す。

#### ○植平准教授 (大月短期大学)

実は、飯田高校の出身で、市長が言われた東京に出て帰ってこなかった70%の1人です。縁あってこうやって、飯田のことを研究者として学ばせていただいていることに感謝しています。

我々は普段大学で教育をしており、しかも地域創生と言われて地域と連携しながら現場で学んでいるので、その成果をこの場に持ってこなければいけないのではないかと思っています。

私は昨年のフィールドスタディに前任校であった名古屋 経済大学のゼミ生を20名連れ、市長の話から始まり、3泊 4日で飯田の先進的な取組を学びました。

名古屋経済大学は、地域の自治体と連携し、1年生のうちから20の体験型プロジェクトをやっています。耕作放棄地を解消するためにはどうしたら良いか、地域の観光開発をどうやったら良いのか等、1年生から地域のキーパーソン、あるいは自治体と連携しながら学んでいるのです。

学生はそこで学んだ課題を飯田でどのように解決するのか、という思いを持ちながら来ています。正直言うと、前任校でやっていたプロジェクトの方が進んでいる部分もあります。

各大学等で行っている取組をお土産としてここへ持って きて、できれば学生を連れてきて、先ほどの京都の学生さ んのように報告をしてもらい、飯田で具体化していけるこ とは何なのかということをそこで考えていくような、学輪 もそういう場にしていかなければいけないのではないかと 考えています。

我々が大学で教育として行っていることと飯田の地域人 材教育を、どう有機的に結びつけていくのかが、非常に大 きな課題であると思います。

それに基づいてフィールドワークやあるいはフィールドスタディ、カリキュラム構築をしていかなければいけないのではないかと考えております。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では次に、竹内先生、お願い します。

#### ○竹内客員教授(金沢工業大学)

マーケティングという言葉があるのですが、本日議題に上がっているイノベーション理論の中に、結構その定義が混ざっているように感じられます。もともとイノベーションとは、1911年ぐらいにヨーゼフ・シュンペーターが提唱したときは、工業とか産業の新しいつながりという提案でした。今世の中の、IT等で言われているイノベーションの定義はそれから変わってきています。

「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーのマネジメントを読んだら」のピーター・ドラッカーが提唱したのは、「マーケティングというのは、今まであるものの欲求を調べてそれを解決すること」であり、日本の企業や日本の教育はこの概念が中心になっています。

ところが、イノベーションは何かというと、「全く新しい 行動を生み出して社会を変革させること」です。

先ほどからシリコンバレーのケースが出ていますが、スティーブ・ジョブズがiPhoneを作ったことにより携帯電話という概念がなくなり、生活スタイルを変えてしまった。こういうことがイノベーションと言えます。

学輪IIDAにはイノベーションの可能性があります。

本日行われた大学生の発表ですが、京都外国語大の堀口 先生と、この場で4回ぐらいお会いし、その後一緒にお酒 を飲んで「何かやりましょう」ということから、本日のプ レゼンに至りました。これは人と人の連携が今までにない 価値を生み出したものです。

本日、飯田OIDE長姫高校の生徒さんが「食べる水引でイノベーションを起こせませんでした」と言いましたが、これは起こせなかったのではなく、まだ起こっていないので

オ

イノベーションを起こすためには3つのものが必要です。 1番目が、「今までにないものを考える想像力」です。これは高校生の皆さんにはありました。

2番目が、「それを多様に組み合わせて色々な人を巻き込む」ことです。高校生の皆さんはこれがまだできていません。

3番目が一番大事で、「人と人のネットワークによって 支援者を増やしてお金を集め、応援団を設けて、それを沢 山の人に拡散すること」です。

世の中で成功しているイノベーションはこれらを満たしています。

今日発表することによって、イノベーションの卵が生まれました。皆さん自身が「スタディエッグ」ゆえにです。

本日の会場の中にいる先生方が知識や支援金などを紹介 できるかもしれません。

ジョブズですら数年かけてiPhoneを作ったので、食べられる水引を数年とは言わず、3年ぐらいで日本中に広げること、これが本当のイノベーションになります。

最後に飯田の可能性についてお話します。

「飯田は良いところだ」というのは簡単ですが、日本中に 飯田のような地方都市は沢山あります。ただ、飯田には他 にないものがあります。独自性がないとイノベーションは 生まれません。

飯田の特徴は3つです。

1番目は、日本の真ん中ですが、物凄く遠い。本日、私 は札幌から来ましたが、6時間半かかりました。

2番目は、でもリニアが開通するとすごい注目を浴びる。 そして、最後は、本日のこの場のように、人と人の連携 の意識がすごく高い。

最後に飯田がイノベーションを起こす具体的方法を1つ 提案します。

日本の地方都市の中で真っ先に地方都市再生問題をイノベーションによって解決した世界最先端、最初の都市になってください。そうすると飯田の取組は黙っていても世界中の学術、産業に対して影響力を与えます。

牧野市長はおそらく、それをイメージし、ビジョンを 持っているので、この学輪IIDAという場が本日あると 思っています。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。だんだん具体的な話に入って きたと思います。

では次に、七田先生、お願いします。

#### ○七田研究員(オープンサイエンスギルド)

オープンサイエンスギルドに参加している人間たちを中心に、なぜ飯田に来るようになったかというと、総合研究大学院大学の先生や、高エネルギー加速器研究機構の先生、国立天文台の先生、遺伝学研究所の先生等々、誘われて来てみたら良いところだったということです。

いつも研究所の中に閉じこもっている研究者たちをたまに連れてきたら、「こんなに楽しいところは他にないんじゃないか」とここの魅力にガツンとやられてしまい、それから、繰り返し繰り返しここに来ている、というのが現状です。

今この自然科学の研究分野というのも非常に大きな課題 が突き付けられています。

まず、去年の夏、文科省の方から、オープンイノベーション機構の設立ということで、いわゆるアカデミックキャピタル、学術研究を産業化していくということについて、大きな舵が切られたと聞いています。

そういう中で、全員ではありませんが基礎研究をやって いる研究者たちが、この社会において何ができるかという ことを考え始めています。

そういう状況の中でも何かができるのではないかと思ったときに、牧野市長から「飯田市で何かできるんだったらやっても良いよ」と、たびたびお誘いやお許しをいただき、非常に手厚いサポートを飯田市から受けながら、先端科学を授業化することを行っています。

先ほど槙平先生の話にあったように、本日来でいる、高 エネルギー加速器研究機構の田中先生も地元の飯田高校の 出身の先生で、ほかにも飯田高校出身の研究者の先生が沢 山います。イノベーションになるかどうかは分からないで すが、そういった先生たちが今行っている先端研究を、飯 田の高校生や中学生、小学生たちに伝えることができ、科 学技術、科学コミュニケーションの1つのあり方として、 飯田の町の人たちが誰でも「ああ、ゲノムね。僕はちょっ と反対」、「素粒子、ああ、もう遅いんじゃない」というよ うに、ゲノム編集や素粒子の話をしてくれたら、すごく楽 しいのではないだろうかということを夢想しながら、たび たび自然科学系の研究者たちが集まってここに来ていると いう状況があります。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。最先端の研究を、ぜひ小中高 と結びつけていただければと思います。

色々な提起を受けて、この辺で少し地域人教育の担って いくところの話をいただけますでしょうか。白戸先生、お 願いします。

#### ○白戸教授(松本大学)

地域人教育の補足も含めてお話させていただければと思います。

今日の議論のテーマの「人材をどう育てるか」という観点で行くと、多分地域人教育というのは、教育の改革というよりは、むしろ地域をどうするかということが先行し、それに教育が応えて始まったものだと思っています。

飯田は、牧野市長をはじめとして、行政もかなり明確な 地域の将来のビジョンというものを持っており、模索をさ れています。同時に飯田の市民性で、飯田の人は「公民館 に行く」じゃなくて、「公民館する」という言葉を使うので すが、日々の暮らしの中に地域の中で自分たちがどうやっ て生きていくか、そしてみんなと一緒にどうやって地域を 作っていくかを自ら考えることが、根付いているのです。 そしてそれは、地域の方だけでなく、企業の方も一緒で、 そういうネットワークが飯田中に張り巡らされています。

その中で、飯田の方々は地域の将来について、自分たちできちんと考えたり、システムとして計画を作ったりしています。

それがあるからこそ、どういう人材を育てれば良いかというものが教育の側にも言えるのです。

だから、教育が人を育て、その人が地域を変えるだけでなく、地域の中に明確に「どういうふうに地域を変えたいんだ」というビジョンがあり、なおかつ主体的に動く人がいるので、それが活きてくるのかと思います。

もちろん、飯田OIDE長姫高校の先生たちも、単に商業教育をどうするか、もっと言えば生徒を多く集めようとかではなく、日本の教育を変えるんだ、全国で画一的にやってきた商業教育に対して、長野県の、あるいは飯田の教育があっても良いんじゃないかという意識で取組をされています。

それが結びついて、地域の学校支援でもない、学校の地域貢献でもない、まさに地域の未来を作る取組がされているのかと思います。

現実には、「学問でもスポーツでもトップを目指したい」となります。なので、先ほどから矜持や誇りという言葉もありましたが、「これをやりたい」とともに、「ここでやりたい」という、それを育てられるかどうかにかかっているのかと思います。

では、大学の役割は何かと言うことですが、関わらせていただいて恥ずかしいのですが、ほとんど役割はないのかと思っています。

最初の頃こそ、高校の先生や公民館の主事さんが悩んでいたので、そこにちょっとアドバイスをしたり、お話をしたりしたのですが、3年目ぐらいでほとんどやることがなくなり、今は、ただただ一緒にいるという感じです。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。大変謙虚過ぎるお言葉ですね。 次に高校の立場から大学に期待することということで、飯 田OIDE長姫高校の國松先生、お願いします。

#### ○國松教諭 (飯田OIDE長姫高校)

高校側の視点からということで、地域人教育をやっていて最近一番思っていることは、こういったことを行う時の評価システムが、高校教育にはないということです。

ちなみに、本日ここで発表させてもらった生徒には1年 生が2名含まれています。

大学の先生方にぜひ一度お考えいただきたいのは、こういったことを取り組んでいる高校生を大学に入学させたいか、ということです。

本校は学力で言うと、飯田地区でトップではありません。 ただ、学力を持った子が「私はこの地域に残って積極的に この地域に関わりたい」ということで、本校を選んで入ってくることが増えてきています。でも、そういったところで評価されないところに非常に悶々としています。

地域の方、大学の先生方、大学生は評価してくれますが、 高校の教育が評価しないのです。

テストの点等でしか、なかなか成績に表れません。そう すると、就職や進学でどうしても、「この点だから」という ところが出てきます。そこを変えたいと思っています。

市長の資料にもあるOSとアプリでいうと、高校版でこの我々の教育活動がOSを作っています。そのOSができると学力が伸びるということが、最近良く分かってきています。高校時代に勉強ばかりするというのは過去のモデルケースだと思います。

現実的に、限られた時間の中で地域に出ていくと、少なからず勉強する時間は削られていきます。ただ、高校生たちはその少ない時間でこういう勉強に取り組むことで、文献を読むスピードはとても早くなってきています。

高大接続の部分も含めて、あるべき姿や評価のことについて、私どもも悩んでいますし、全県的に色々な大学にアンケートを取らせてもらっても、やはり評価しづらいということを明確に言われています。アナログ的な部分などあるのですが、少し現状として述べさせていただきました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。それを受けて、代田教育長、 ご発言をお願いできますか。

#### ○代田教育長

OSの話が出たので、これは基礎自治体の教育長としてのお願いなのですが、基礎自治体としての教育活動の中心は、やはり小学校、中学校が基盤になるわけです。

日本全体としても、今は高校時の人材育成が非常に ウィークポイントであり、地域との学びに取り組んでいな いということはありますが、幼児期から高校進学までの15 年間をどう育むかという、ベースの部分はもっともっと大 事なことです。

今、文部科学省では、コミュニティスクールという形で 大きく前進をしていますが、飯田市は全国でも珍しい取組 になろうかと思いますが、コミュニティスクールにおける 学校運営協議会の委員に、公民館長もしくは主事が必ず参 加をし、その核となっています。善い地域が善い学校をつ くり、善い学校が善い地域をつくるという、学校づくりが まちづくりになる、ところに迫っていこうとしています。 飯田市なりの教育のOS、基盤をつくっていきたいと考え ています。

ただ、地域が力をあわせて子供たちを育てることは、飯田だけで考え実行していくのはとても難しいと思っていますので、ぜひ先生方の知見をお借りしたい、というのが私からのお願いです。

さらに、高校とどのように接続していくかは、高校は県 の所管となるため、もう1つ難しいところがあります。

小学校から中学校の部分までを義務教育の中でどうするか、次に、中高の接続部分は県との連携も含めて難しい仕組みになっているのだということをご理解の上で、高校、大学の接続を考えていくことが重要であると実感しております。こんな問題意識を共有していただきながら、本日の実りある議論を今後の飯田市の教育活動に参考にさせていただきたいと思います。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。高大だけでなく、小学校中学校から高校、さらに大学に接続するという課題をどのようにとらえるか、ということですね。

では、大西さん、よろしくお願いします。

#### ○大西氏(一般財団法人 日本経済研究所 常務理事)

私は大学の先生ではなく、もともと日本政策投資銀行という政府系金融機関の出身で、現在は日本経済研究所に勤務しております。銀行時代より通算で17~18年、全国各地での地域振興プロジェクトの調査研究を行ってきております。そのような経験から、飯田の地には何十回もお伺いさせていただいております。

以前に比べると、全国各地での地域づくりや地域振興プロジェクトは、経済的にみると1個1個が小粒になっています。

飯田でもそうだと思います。2000年までであれば、例えば、まちづくりカンパニーが中心市街地で大規模な再開発を行っており、2000年以降は南信州観光公社が設立されるなど、広域的な体験型観光にも取り組まれています。

ただ、プロジェクトは小粒化しているのですが、裏を返せば、誰でも地域づくりに参加できるようになっているという見方もできるかと思います。あえて表現すれば、「地域づくりがオープン化されている」といえるのかもしれません。

特に、この飯田の地域は、先ほどの白戸先生からのご指摘もありましたが、地域の課題に根ざして、地域の皆さんが頭を寄せて色々と知恵を絞りあって結果を出されています。私はこのような取り組みも見方によっては「イノベーション」なのではないかと思っています。もちろん、飯田でもアップルやグーグル等のビジネスモデルを目指してもよいのですが、何もそういうものばかり追わなくても、現在、全国各地、あるいは世界中のさまざまな地域で増殖し細分化している課題を、1個ずつ拾い上げて、是非とも飯田から地に足が着いたイノベーションを起こしていってほしいと思います。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では次に、若生先生、お願い します。

#### ○若生教授(大阪芸術大学)

先ほど教育長のおっしゃった15歳までの教育については、 私は本当に衝撃的な発言だったと思います。飯田でできる ことは、基礎自治体としての小中教育、あるいは幼稚園、 保育園での教育であると。

恐らく、小学校の4年生、10歳位のときに、皆、潜在的には色々な体験が後の人生のための胚胎であると思うのです。

先ほどの牧野市長のプレゼンの中に、ずっと一生懸命受験勉強していたら、あとはスーッと終わってしまう、ベタになってしまうというものがありました。ベタにさせない、ならないということは実は、小学校、幼稚園の時に、心にどういうものを感じているかということがすごく大事で、そしてあとは社会がそれを上手に育てていくということだと思います。

私は、今の教育長のお話で感動しました。小学校や保育園、幼稚園の校庭、園庭を自然な遊び場にすることで、生物や環境のことを学べます。飯田の美しい景観、自然の導入部になるような、泥遊び、水遊び、そして自然に触れ合う、そういう環境を小学校や保育園、幼稚園の校庭、園庭に作るというのは、飯田市の市長と教育長が決断されたらできることなのではないですか。そして、そこに飯田市の動物園と連携するようなことをしていけば、これはまさにイノベーション、全国に発信できると思います。

#### ○代田教育長

ありがとうございます。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。具体的なイノベーション、アイデアが、どんどん出てきています。

次に、廣江先生、お願いします。

#### ○廣江学長(東京家政学院大学)

教育の点に触れられた方が若干おられましたので、その 点についてご発言させていただきます。

どうしても教育に関わっていると、被教育者、教育を受ける側について目が行きやすいですが、私は逆も必要だと思っています。

教育を行う側がどう変わっていくのかが非常に大切で、 そこに先ほどの高校長も言われました、1対1の関係では ない関係をどう構築していくか、ということが相当かか わって来ると思います。

そのヒントは、イタリアのプラートという毛織物産地の産業振興プロセスにあると思っています。日本や中国との競争に産地が負け、地域が衰退してしまった、その要因のひとつに働く親の姿を子どもたちに見せて来なかった、だから地域産業の担い手が子どもたちの中から出てこない、しかも日本で言うキャリア教育は公教育では行えないので、イタリア語の授業の中で行おうということで毛織物産業を

題材に母語教育のテキストを制作し、その教材を使った教育から地域産業の担い手を育てようとしました。その試みには被教育者を教育するだけでなく、地域産業を知らない教育する側、つまり教員を教育するという要素が同時に入っており、非常におもしろいプログラムとなっています。

私も大学で教育をしていました。今は管理者として高大 接続をどう行うかが重要な課題と考えていますし、当然高 校だけではなく中学校、小学校、場合によっては保育園、 幼稚園とどう協力するかが課題と考えています。その時に 重要なのは、どのように働きかけるかではなく、働きかけ る側がどう変わっていくかです。それには当然研究の蓄積 が背景にあってのことですが、「教育する側を教育する」と いうプログラムを取り入れないと、教育改革といっても成 果を出すことは非常に難しいと思います。

しかし、飯田市ではそれができると思いますので、それをどう実現するか。これは日本の大学の教育のあり方のモデル創りとなる大変に大きな課題だと思っています。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。では次に、高島先生、お願い します。

#### ○高島准教授(静岡文化芸術大学)

議論を聞いていてちょっと気になったことがあります。 先ほど私は「イノベーションは境界を横断できるかどうか」 とすごく感じたのですが、教育の問題になるとやはり「教 育委員会の中でどうできるか」みたいな話になってしまう と思うのです。

そうではなく、飯田は大変地域活動や文化活動が盛んなので、教育のことを教育制度の中や教育委員会の中だけではなく、地域も併せてどうやって小中高等学校の連携をしていくかというのを考えた方が良いと思います。飯田はそれができる場所なのではないかと強く思いました。

#### ○平岡ファシリテーター

ありがとうございました。今までの議論をお聞きしての 感想などを、本日ご来賓の久貝商工会常務理事からお願い できればと思います。

#### ○久貝氏(日本商工会議所 常務理事)

最初の3つのプレゼンテーション、どれもレプリケーションが大変多かったです。大変参考になりました。

また、飯田OIDE長姫高校の高校生の方のプレゼンにつきましても、内容も社会人も顔負けのような内容で、また、説明をするときは大変堂々とされていました。

私も歳を取ってだんだん感動がなくなっておりますが、 本日は久しぶりに感動しました。

日本商工会議所は全国515の商工会議所があり、地方と 中小企業の振興のために政府に対して提言をするという機 関です。

アベノミクスも5年経ち、景気は回復基調にあるのです

が、問題が2つあり、2つの指標が出ております。

1つは、東京一極集中是正です。

10万人の東京への転入超過を、2020年に0にするという目標を出していますが、5年経った現在も、全く10万人のまま変わっていません。

もう1つは新しい企業を起こすということで、開業率10%という目標を出していますが、これも5年前と同じ5%のままです。中国は10%以上ですし、欧米でも10%近いところに行っているという、非常に残念な状況にあるということがあります。

そういう中で、この飯田市の取組はそれに対する答えが 出ている、そういう世界、地域ではないかと思いました。

本日は多摩川精機に勤めておられた萩本さんがお越しになっていますが、多摩川精機を中心に飯田市が取り組んできた産業振興、産業基盤をつくるという取組は、日本の中のモデル的な地域の産業集積、クラスターの取組であると思いますし、ご自身がシニアの開業をされたということですので、これもまさにその開業率を引き上げる1つの新たな視点を提供されているのではないかと思います。

後で文科省の方からもお話があるかもしれませんが、何とかしてこの地域に高校生が戻ってきてもらう、という考えで「地域人教育」という取組をされ、地域人を作るという教育をしようということにも大変驚いた次第です。

企業の側からすると、これまでは勉強のできる子を求めていたと思いますが、欧米と競争し、それから今度は中国と競争するようになり、中国はどんどん日本の工業力を上回る力を持ち、ITはもっと先に進んでいるのではないかという中で日本が残っていけるとしたら、地方の魅力やその地域の力を維持し、伸ばしていく人材が日本全体として必要ではないか、と感じました。

#### ○平岡ファシリテーター

では、文部科学省の森課長、感想などよろしくお願いします。

#### ○森氏(文部科学省初等中等教育課企画課長)

本日は様々な発表、プレゼン等聞かせていただき、また、 皆さんの活発な議論を聞かせていただきました。

私ども文科省でも地域人教育に大変注目をさせていただいています。

初等中等教育段階に確かな学力を身につけようと、知識 はもちろんですが、自己と結び付けた主体的な学び、そう したものをしっかりと身につけていくためには、やはり探 求的な学び、深い学びが必要であり、そのためには地域と いうものをフィールドとして学んでいくということが大き な成果を上げる、教育の改革という面でも大変重要である と思います。

一方で、将来の地域を支える、地域に誇りを持ってその 課題を解決していく人々を育てていくという意味でも大変 重要な取組であろうと思います。先ほど学校づくり、社会 づくりが一体となって、という話もありましたが、そうし たすばらしい取組だと改めて感じた次第です。

こうした取組は、現在商業科中心に進められており、これを他の教科あるいは普通科にも広げていくというようなこと、あるいは、高校教育がこれだけ変わっていると、それを大学教育としてどう受け止め、大学の先のどのようなキャリアに結びつけていくのか、といったこともこれから大きな課題になってくるのかと思っています。

私自身こうした優れた取組を参考にさせていただき、ぜ ひ全国の教育の参考になるように広めていきたいと思って います。引き続き様々な観点から勉強させていただきたい と思っています。

#### ○平岡ファシリテーター

久貝様、森様、どうもありがとうございました。

それでは、最後に本日の議論提起をされた石神先生、そして牧野市長からコメントをいただきこの会を閉じたいと思います。

#### 〇石神教授(法政大学)

先ほど中川先生が言われ、市長も常々言われているダボス会議。私は行ったことはないのですが、皆でお互いに、知のコンベンション、あるいはイノベーションのためのコンベンションとして、この場を共有するということはとてもすばらしいことだと思います。

最初に今回の試みを聞いた時に、こんなに大勢で議論できるのかと思ったのですが、皆でこの場を共有するというのは本当にすばらしいことでした。これはダボス会議の飯田版というよりは、まさに飯田会議が既にスタートしているんだな、と感じました。

本日はありがとうございました。

#### ○牧野市長

本日の公開セッションにおきまして、前半はそれぞれの 皆様方から発表をいただき、また、後半のフリーディス カッションにおきましても、大変貴重なご意見をいただき ましたこと、改めて御礼申し上げます。

最後の方に出てまいりました、地域人教育の評価システム、まさに高大連携をどのように結びつけていくかという中で、大きな課題であると認識をしたところですが、こうしたこともきっと、学輪IIDAのこうした会議の積み重ねの中で解決策を見つけていけるのではないかと思います。

また、それが全国にモデルとして示していくことができるのではないかと改めて思いました。

本日は誠にありがとうございました。

#### ○平岡ファシリテーター

本日いただいた意見は、明日の内部討議に持ち込み、さらに議論したいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

# 学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト 地域文化論フィールドスタディ 2017

静岡文化芸術大学文化政策学部 准教授 高島知佐子

#### 1. はじめに

学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト(以下、共通カリキュラム)とは、2011年1月に以下の4つを目的に設置された活動である。①飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルの構築、②飯田が感じている価値と、飯田に関わってきた各大学が持っている飯田の価値を共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認する、③学びの体系の見える化を図ることで、多くの大学が飯田の資源をもとに集い、学ぶ環境がつくられ、大学生や教員を飯田に引き寄せる磁石となる。また、大学と地域住民等がともに学びあう場づくりを行う、④学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」や「飯田工業高校後利用」の展開に繋げる」。

具体的には、複数大学の学生が飯田でともに学ぶことができる科目を複数構築し、多様な学生の飯田での学びを実現するカリキュラムを作り上げてきている。取り組み過程において、共通カリキュラムの目的は「市民・行政・大学が共同して飯田の価値を知り、発信し、新しい地域像を作っていくこと」とも設定され、持続可能性(サステナビリティ、sustainability)を軸にした地域の視点が重視され

ている。

共通カリキュラムは導入科目、展開科目、実践科目の3つ に分かれている。基礎である導入科目は、「南信州・飯田 フィールドスタディ」と冠して、ソーシャルキャピタルの 視点から飯田を理解する内容である。これは2012年度に実 施された展開科目「ソーシャルキャピタルフィールドスタ ディ」をもとに作られた(表1)。導入科目は、主に講義を 中心とした座学で構成されている。展開科目は、より専門 的な視点から南信州・飯田を学ぶ科目であり、座学だけで はなく、現場に行き視察やヒアリング等を行うフィールド ワークを組み合わせている。実践科目は、展開科目の専門 性をより深く追求した特定のテーマについて、フィールド ワークを中心に調査・分析、提言までを行うものである。 本稿では、2017年度に行われた展開科目・地域文化論 フィールドスタディ「地域活性化を生む地域アイデンティ ティ形成のあり方を考える」の活動内容を報告するととも に、その成果と課題を考察する。

#### 2. 展開科目の概要

展開科目は、共通カリキュラムが始まった2011年度の翌

表1 学輪IIDA共通カリキュラム・展開科目一覧

実施年度	科目名	参加大学数	参加学生数
2012	ソーシャルキャピタルフィールドスタディ	3	25
2013	地域環境政策フィールドスタディ 「環境モデル都市の取り組み及び多様な主体の実施体制を学習する」	3	25
2014	ニューツーリズムフィールドスタディ 「農山村再生に資するツーリズムの新たな可能性」	4	31
2015	ソーシャルキャピタルフィールドスタディ 「南信州・飯田におけるソーシャルキャピタル」	4	36
2016	地域経営論フィールドスタディ 「地域経営論- 人材サイクルと検証する-」	5	44
2017	地域文化論フィールドスタディ 「地域活性化を生む地域アイデンティ形成のあり方を考える」	5	40

出典:平岡和久「共通カリキュラムプロジェクトの統括と今後の方向性について」(仮称) 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会 資料、2018年4月14日より筆者作成。

<sup>1</sup> 平岡和久「共通カリキュラムプロジェクトの統括と今後の方向性について」(仮称) 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会資料、2018年4月14日。

年度から開講され、毎年異なる学問領域、テーマで科目が作られてきた。2012年から2017年までに実施された科目名は表1の通りである。いずれも大学の夏休み期間中の8月に3泊4日で開講され、学部学科の異なる3~5大学から最少25名、最多44名の学生が参加した。

2017年度は静岡文化芸術大学、東洋大学、名城大学、立命館大学、和歌山大学の学生が集まり、学生の所属は文化政策学部、社会学部、都市情報学部、政策科学部、観光学部(大学順)であった。

#### 地域文化論フィールドスタディ「地域活性化を生む地域 アイデンティティ形成のあり方を考える」

#### 3-1. テーマ設定

2017年度に地域文化論を構築するにあたり、上述した学生の多様さを考慮する必要があった。地域文化を専門に学んでいる学生は少ないため、文化だけを学ぶのではなく「地域における文化の持つ意味」を学ぶことで、文化を通して地域を見つめ、その先にある地域の経済やまちづくり等に考えを発展させることを狙いとした。その結果、多くの学生の関心にアプローチできるものとして「地域アイデンティティ」に着目し、「文化を通した地域アイデンティティの形成」をテーマにした。

地域アイデンティティは、地域活性化を考える上で重要な概念である。グローバリゼーションが進む現代では、物流や情報通信網が整備され、世界中のどこにいても同じモノや情報を得ることができ、皆が便利な生活を送れる。これは私たちの生活が均質化していくことでもある。グローバリゼーションには利点も多いが、文化的多様性が失われるという側面もある。均質的な生活は、地域固有の生活スタイル、つまり地域文化の消失をもたらす。これは地域の魅力を失うことでもある。魅力を失った地域は人口流出が加速し、流入人口を増やすことも難しくなるという負の循

環に陥る。

文化の画一化が進む現代では、文化的多様性を担保することが地域の魅力となる。グローバリゼーションにより、私たちはかつてよりも自由に生活場所を選ぶことができる。だからこそ、豊かな地域文化が魅力ある地域へと導き、地域文化の継承や創造を担う人材の確保をもたらすという好循環を生む方策を考えることが重要になる。特に、人口流出により人口構成上も多様性が失われやすい地方都市の持続可能性を考える上では、人々が魅力を感じる地域づくりが不可欠である。好循環をもたらすためには、地域住民が自らの文化に誇りや愛着を感じていることが求められる。愛着や誇りは、時に異なる価値観の人々の対立を生むが、地域に人が根付き、地域住民が文化の担い手となる上では、見過ごすことができない視点である。いかに地域文化が継承・創造され、それが地域の人々のアイデンティティになり、まちづくり等の活動への参加を促しているのか。

これまでの展開科目では、専門領域の特定の視点から地域を見ることが特徴であった。しかし、今回は上述のような考えに基づき、地域文化・地域アイデンティティ・地域活性化の3つを繋げて考えるという実験的かつ複雑な取り組みに挑戦することとなった。

#### 3-2. 調査対象

地域文化を取り上げるにあたり、飯田の「地域文化」の 範囲を設定する必要があった。飯田には祭礼や人形芝居の ような民俗芸能、オーケストラと連携した音楽活動、水引、 食文化等、多くの地域文化が継承、創出され根付いている。 このような多様な地域文化は飯田の特徴の一つであり、一 部だけを取り上げることは、上述したテーマを偏って理解 することになる。そこで、地域文化の多様性を理解するこ とと、多様性が担保される背景を調査目的に加え、人形劇、 公民館から派生した活動、地域の祭礼、市民活動、山間地

表2 調査分野と対象一覧

人形劇	地域の祭礼	山間地の暮らし
飯田人形劇フェスタ実行委員会	川路四区祇園祭実行委員会	南信濃まちづくり委員会
黒田人形保存会	時又初午はだか祭り保存会	霜月まつり野郎会
飯田人形劇センター	一色獅子舞保存会	よこね田んぼ保全委員会
スリーデイズマーケットシアター	茶屋町太鼓 鼎	千代地区地域おこし協力隊
伊豆木人形クラブ	本町三丁目大名行列保存会	肉のスズキヤ
※さば寿司	※祭り街道弁当	※ジビエ料理
公民館からの派生	市民活動	産業
Z202470 2 17 // CZ	11,20/1130	/
飯田市上郷公民館	飯田文化会館	水引工芸せきじま
	1 2 4 1 2 2	
飯田市上郷公民館	飯田文化会館	水引工芸せきじま
飯田市上郷公民館 ひさかた和紙保存会	飯田文化会館 オーケストラと友に音楽祭実行委員会	水引工芸せきじま NPO法人国際りんご・シードル振興会
飯田市上郷公民館 ひさかた和紙保存会 人形劇団あかね	飯田文化会館 オーケストラと友に音楽祭実行委員会 IIDAWAVE	水引工芸せきじま NPO法人国際りんご・シードル振興会 千代ネギの会

出典:2017年度共通カリキュラムプロジェクト「地域文化論フィールドスタディ」当日スケジュールより筆者作成。

の暮らし、産業の6分野に分け、表2の活動、全29件を調査 することにした。また、調査には地元の高校生にも参加し てもらい、飯田の若年層への調査ができるよう設計された。

#### 3-3. 開催概要とプログラム

2017年度の共通カリキュラム展開科目は2017年8月17日 (木)から20(日)の3泊4日で開催された。参加大学は上述 した5大学、参加学生は40名(内訳は静岡文化芸術大学6名、 東洋大学5名、名城大学10名、立命館大学15名、和歌山大学 4名)であった。以下に4日間の概要を記す(表3)。

1日目は表2の調査先へのフィールドワークとその分析に必要となる知識を得るため、座学中心に構成された。具体的には①「地域文化概論」、②「飯田の歴史・社会教育概要」、③「社会調査法」の3つの講義(各45分)を設けた。地域文化概論では、筆者が講師を務め、今回のポイントである地域文化・地域アイデンティティ・地域活性化の捉え方、これらの関係性について概説した。飯田の歴史・社会教育概要では、飯田市公民館の氏原恵里子氏(副館長補佐)

が飯田の公民館機能、特に公民館を中心としたまちづくり について説明した。最後に、フィールドワークでの視察や ヒアリングに必要な技法としての社会調査法の講義を、和 歌山大学観光学部・上野山裕士氏が行った。

1日目の講義の後は、表2に記した6つの調査分野から各グループが実際に調査したい分野を2分野選ぶための話し合いが行われた。調査分野を決めるにあたり、各分野の概要を説明する「コンテンツ説明」の時間を30分設け、飯田市企画課の職員が担当した。調査分野を、各グループ2分野とした理由は次の通りである。6分野すべてをグループ全員で回ることはできないが、1分野のみの調査では、先述したように地域文化への理解が1分野の状況に影響を受け、偏ることが懸念された。そこで、各グループはメンバーを二分し、2分野を調査し、その内容から地域文化による地域アイデンティティ形成のあり方と地域活性化活動の関係を分析するというプログラムにした。つまり、各グループが2分野を調査する狙いは、地域文化の多様性、活動分野ごとの違いや共通点を理解することにあった。グルー

表3 スケジュール

日にち	内容			
1日目 8月17日 木曜日	趣旨説明・オリエンテーション			
	講義・地域文化概論			
	講義・飯田の歴史・社会教育概要			
	講義・コンテンツの説明			
	グループワーク①自己紹介、フィールド選択			
	講義・社会調査法			
	調査先調整、決定			
	グループワーク②調査先決定、調査の方向性、役割分担、テーマ決め			
	フィールド調査①	①人形劇	大学生6名、高校生1名	
		②公民館からの派生	大学生6名、高校生1名	
		③地域の祭礼	大学生6名、高校生3名	
2日目8月18日		④市民活動	大学生7名、高校生6名	
金曜日		⑤山間地の暮らし	大学生7名、高校生1名	
		6産業	大学生7名	
	グループワーク③2日目の振返り、民泊・3日目の聞取り調査の打合せ			
	農家民泊対面式			
	農家民泊 お別れの会			
	フィールド調査②	①人形劇	大学生6名、高校生1名	
		②公民館からの派生	大学生6名	
		③地域の祭礼	大学生6名	
3日目 8月19日		④市民活動	大学生7名、高校生2名	
土曜日		⑤山間地の暮らし	大学生7名	
		6産業	大学生7名	
	市長講義			
	報告会準備作業 (各グループ単位)			
	報告会準備作業 (各グループ単位)			
4日目	報告会準備 (各グループ単位)			
8月20日	グループ別報告会			
日曜日	総括・閉会			

出典:2017年度共通カリキュラム構築プロジェクト「地域文化論フィールドスタディ」当日資料より筆者作成。

プによる調査の流れは図1の通りである。

2日目と3日目の午前中は、調査先へのフィールドワークに出かけた。各分野4~6件のヒアリングや現地視察等を行った。2日目と3日目は、昼食時間を飯田の地域文化としての食文化を体験できる場と位置付け、分野ごとに祭り街道弁当、さば寿司、焼肉、ジビエ料理、ひさかた御前、ごんべえ邑での食事を味わった。2日目の宿泊は例年同様に農家民泊を採用し、農家の人々との触れ合いも地域文化を体感する機会とした。

3日目の午後は、飯田市長・牧野光朗氏による講義が行われた。市長講義は、2日間のフィールドワークで得た現場の取り組みをまとめる視点の提供と位置付け、共創や地域主義を特徴とする飯田の経済、文化、まちづくりの考え方が提示された。市長講義の後はグループごとの調査のまとめと発表準備の時間に充てられた。これまでの共通カリキュラムではパワーポイントによる発表が主だったが、今回はポスター1枚による発表を採用した。ポスター発表に変更した理由は次の3つである。①一目で内容がわかるため、掲示するなどの方法により、プログラム終了後でも地域の方に見ていただくことができる、②限られたスペースにまとめるため、情報の整理が進む、③グループ内での完全分業ができないため、全員での議論が促進される。最終日の4日目は、各グループのポスター発表と講評が行われた。

#### 3-4. 学生の評価2

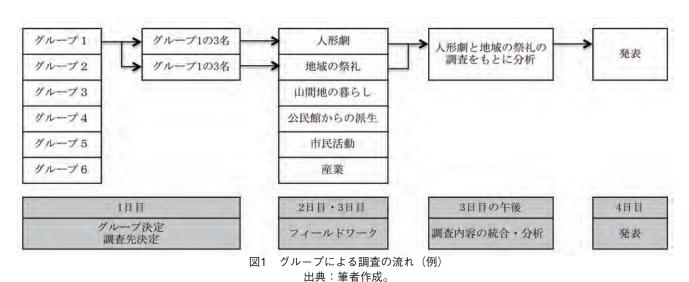
1日目の3つの講義に関しては、平均9割の学生が「大変わかりやすかった」「わかりやかった」のいずれかを回答した。特に、社会調査法は97%の学生が上述の回答をし

ており、「自分の知らない調査方法まで知れ、今後の調査にもためになる」、「フィールドワーク手法の指針になった」など、今後の研究や調査にも役立つ点が評価された。飯田の歴史・社会教育概要では、「飯田市の教育委員会のあり方、社会教育に力を入れている点等が知れた」「自分の出身地の地域の文化や歴史と比べると面白く、画期的な内容だった」といった意見があり、短期間であっても、他地域と相対化することで、飯田の特徴を理解していることが窺えた。

フィールドワークについて、2日目は「大変良かった」「良かった」が100%、3日目は95%という結果だった。コメントには、フィールドワークという調査方法に対するものと、調査先で得た情報に関するものが記されていた。前者は「1時間が短く感じた」「質問に対する明確な回答が得られなかった」「話を聞いて考え込んでしまった」といった内容に見られるように、質問することや話を引き出すことの難しさを実感した様子であった。後者は「独自の文化をどの人も誇りを持って話してくれた」「話をしてくれる人から飯田の風土の良さが伝わった」「同じ南信州地域でも文化が違うことを知れた(飯田以外の南信州出身の学生)」などの意見があり、現地に行くことでしか知り得ない文化の多様性や文化とアイデンティティの関係を肌で感じていたと言える。

グループワークについては「大変良かった」「良かった」と答えた学生は66%と、今回の全プログラムの中で最も低い評価だった。「時間がなかった」「2分野の調査内容をどのように繋げれば良いかがわからなかった」という意見が多く、複雑な構成に対して議論の時間が短かったことが低い評価の要因だったと思われる。

2日目の農家民泊は「大変良かった」が65%、「良かった」



<sup>2</sup> 最終日の終了時に学生へのアンケートを行った。アンケートは5段階評価と記述を用い、講義は「大変わかりやすかった」、「わかりやすかった」、「普通」、「やや分かりづらかった」、「分かりづらかった」、フィールドワークは「大変良かった」「良かった」「普通」「あまり良くなかった」「よくなかった」が回答に設定された。

が32%と好評であった。特に、農業体験、地域ならではの 食事、農家の人々のお話に対する評価が高く、地域住民と の関わりが、飯田の良さを体感する機会になったと考えら れる。

3日午後の市長講義は、94%の学生が「大変わかりやすかった」「わかりやすかった」と答えた。多くの学生が事前学習として牧野氏の著書『円卓の地域主義』(2016年、事業構想大学院大学出版部)を読んでおり、市長から直接話を聞けたことと、飯田の全体像を理解する視点が提示されたことが高評価の理由につながったと考えられる。学生からは「フィールド調査のまとめとして聞くことができた」「著書を読んで取り組みがすごいと思っていたが、お会いすると迫力があった」といった意見が寄せられ、市長の人柄にも親しみを感じていた。

4日目の発表報告会に関しては、グループでの取り組み 内容に対する反省と報告会の形態に関するコメントが多 かった。前者は、時間がなく十分に考えられなかったこと や、質問に対応できなかったことなどが記されていた。ま た、同じ分野の調査をしていても、グループによって発表 内容が違うことへの言及もあった。一方、後者の報告会そ のものに関しては、時間設定の見直しやより意見の言いや すい雰囲気づくりなどをすべきという指摘があった。

#### 4. 共通カリキュラムの目的から見た成果と課題

学生の評価を踏まえ、共通カリキュラムの目的に沿って今回の取り組みを評価したい。共通カリキュラムの目的の一つは、「飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルの構築」であった。この点については、5大学から40名の学生がフィールドワークとグループワークに熱心に取り組み、密な議論をしたと言える。学生からのコメントで散見された「時間がなかった」という言葉がこれを表している。

二つ目の目的は「飯田が感じている価値と、飯田に関わってきた各大学が持っている飯田の価値を共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認する」であった。講義やフィールドワークを通して、学生は飯田の地域文化の多様性を知ることができた。この点は、同じ飯田の人々でも他の活動を知る機会は多くはなく、新たな発見に繋がる点があるのではないかと推察する。しかし、今回の取り組みがわかりやすい形で地域内に発信されなければ、これらを知る機会はない。地域の方に調査協力いただくだけにとどまらず、その成果の見える化、アーカイブ化が課題であろう。

三つ目の目的は、「学びの体系の見える化を図ることで、 多くの大学が飯田の資源をもとに集い、学ぶ環境がつくられ、大学生や教員を飯田に引き寄せる磁石となる。また、 大学と地域住民等がともに学びあう場づくりを行う」ことである。今回のフィールドワークで設定した6つの分野は、祭礼、人形芝居、工芸、音楽活動等、伝統的なものから新しく生まれた活動までジャンル、歴史ともに幅広い地域文化をある程度網羅している。今後、飯田内外の人々による地域文化の学びにおいて、このフィールドワークの調査先リストは役立つであろう。しかし、この点も上述した課題同様に、飯田内外の人々が容易にこの情報にアクセスできるような形で公開される必要がある。

四つ目の目的は「学輪IIDAのコンセプトである『21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり』や『飯田工業高校後利用』の展開に繋げる」ことである。今回の取り組みを含めた共通カリキュラムの蓄積が進んだ後に、共通カリキュラムをどのように発展させるかを検討していく必要があり、この点は今後の議論に委ねられる。

最後は、共通カリキュラムの検討過程で提示された目的「市民・行政・大学が共同して飯田の価値を知り、発信し、新しい地域像を作っていくこと」である。今回は高校生が調査に同行し、大学生とともに過ごす時間が設けられた。フィールドワークに高校生が加わることで、高校生・大学生がともに考える機会になった。高校生と新しい地域像を作る段階までは到達できていないが、協働への第一歩になったと評価したい。また、大学のない飯田では近年盛んに行われている高大連携を行うことが難しい。共通カリキュラムが、高大連携の要素を持つことで、高校生が飯田を客観的に見つめ、自身の進路を考えるきっかけになっていくことが期待される。

#### 5. 「地域文化論フィールドスタディ」としての成果と課題

「地域文化論フィールドスタディ」の視点から評価する。今回の取り組みの特徴は、①これまでよりも座学が少なく、フィールドワークに多くの時間が充てられた、②1グループで2分野を調査し、2分野の内容を分析し発表した、③ポスター発表の3点にまとめられる。これらの特徴の背景には、(1)飯田の中でも地域は多様であり、様々な地域文化があることを知る、(2)グループでの活発な議論を生むことがあった。学生の評価にも記されていたように、この点は達成されたと言えるだろう。一方、今回のテーマであった「地域活性化を生む地域アイデンティティ形成のあり方を考える」に関しては、議論の時間が少なく、十分に分析、検討されたとは言い難い。3泊4日という限られた時間で、いかに質の高い議論を生むかは今後も試行錯誤していく必要がある。

共通カリキュラム・展開科目の構築は、毎年テーマを変え、持続可能な地域づくりに必要な専門領域から見た飯田を蓄積していると言える。毎年丁寧に内容を見直し、新た

な方法を取り入れていく「実験」である。この実験を積み 重ねることができるかどうかが地域の発展を左右するだろ う。共通カリキュラム構築の蓄積が6年を迎えた今、これ からは地域へ還元するための新たな実験へと舵を切ること が求められる時期にきているように思う。

#### 謝辞

飯田市企画課の職員の皆さま、フィールドワークの調査にご協力くださった地域の皆さまに心よりお礼申し上げます。今回の地域文化論では、全29件のインタビュー調査を設定いただきました。これほど多くの団体を一度に調査できる機会はなく、皆さまのご理解、ご尽力に深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 小林正夫 (2016) 「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト会議・飯田で社会的関係 資本の重層的蓄積を学ぶ- 『ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ 2015』報告」 『学輪』第3号、17-24頁。
- 平岡和久 (2014) 「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの到達点と課題」 『学輪』 創刊号、19-26頁。
- 平岡和久(2018)「共通カリキュラムプロジェクトの統括と 今後の方向性について」(仮称)学輪IIDA共通カリキュ ラム実行委員会資料、2018年4月14日。
- 福島茂 (2014)「ソーシャルキャピタルを南信州・飯田で学ぶ」『学輪』創刊号、27-34頁。
- 藤田武弘 (2015)「『南信州・飯田ニューツーリズムフィールドスタディ (共通プログラム構築プロジェクト)』の成果と課題」『学輪』第2号17-24頁。
- 牧野光朗 (2015)『円卓の地域主義』事業構想大学院大学出版部。

## ニューツーリズムによる地域創生

### 一世界人形劇フェスティバルとAVIAMA総会を通じて一

Region Creation led by New Tourism: Case of AVIAMA and World Puppet Theater Festival of IIDA

京都外国語大学外国語学部国際教養学科 壹貫田陽香京都外国語大学外国語学部国際教養学科 恵島 尚子金沢工業大学 客員教授 竹内 宏彰京都外国語大学外国語学部 准教授 堀口 朋亨

Haruka IKKANDA
Kyoto University of Foreign Studies
Naoko EJIMA
Kyoto University of Foreign Studies
Hiroaki TAKEUCHI
Kanazawa Institute of Technology, Prof.
Tomonaga HORIGUCHI
Kyoto University of Foreign Studies, Assoc. Prof.

#### 【論文要旨】

New tourism has possibility to make the local community confused. That is why we must implement policies that let each local citizen think actively and steers local communities. The World Puppet Theater Festival and the AVIAMA General Assembly were held by citizens as the leading role with the administrators, the people outside the area and students. It could be said that they showed the way of unique "OMOTENASHI" to the people from abroad in IIDA city.

キーワード:世界人形劇フェスティバル、人形劇の友・友好都市国際協会、ニューツーリズム、 コンテンツツーリズム、飯田

Key Words: World puppet theater festival, AVIAMA, New tourism, Contents tourism, IIDA

#### 1. はじめに

近年、わが国では地方の人口が大都市に流出し減少していく過疎化が社会的な課題になっている。高度経済成長期における都市部への大量の人口流出により地域社会の一定の生活水準維持が困難になるなど深刻な問題を引き起こしている。総務省によると市町村数では1719地方公共団体中、817団体が過疎地域となっており約半数がこの問題に直面している。過疎地域面積では国土の59.7%も占めており団体の比率よりもさらに大きな割合を占めている。過疎地域における人口割合は依然減少傾向にあり、過疎問題が認識されるようになった昭和35年には21.8%だったものが平成27年度には8.6%と大幅に減少した。さらに詳細に検証すると、年齢階層別人口構成比を全国と比較した場合、平成27年度において64歳以下の年齢階層構成比が全ての階層で低いのに対して65歳以上の年齢階層では全国の構成比26.8%を10.3ポイントも上回る数字を示している。地方の

過疎化が進むことで都市部との生活水準の格差が広がるだけにとどまらず、地域の消滅さえも危ぶまれる状況に追い込まれるのである。インフラの整備度の指標となり得る、水道の普及率や水洗化率を全国と比較すると、水道普及率では全国の97.9に対して5.4ポイント低い92.5%、水洗化率では全国94.3%に対して過疎地域では18.9ポイント低い75.4%となっている。さらには福祉・医療サービス等の施設が少なく、無医地区を有する市町村数は過疎市町村数では増加傾向にある。少子高齢化に伴い日本全体で人口減少が進むなか、過疎地域ではそれを上回る減少率で、国土交通省の2015年度過疎地域現況調査によると過疎化や高齢化が極端に進んだため社会的共同体の維持が困難化しているとされる限界集落の数が1万3,649カ所にもなり、2010年度に行われた前回調査と比較すると174ヶ所の限界集落が消滅したことが分かった。

これらの過疎問題への対策として国は過疎地域自立促進 特別措置法を施行し、過疎地域等自立活性化推進交付金に よる支援などを進めている。そのほかに各都道府県や市町村など過疎問題に直面している各自治体による独自の対策も進められている。地元の特産品の開発や販売によるPRやゆるキャラと呼ばれるマスコットキャラクターを用いることでその自治体をアピールするなどの取り組みを行っている。そういった自治体での取り組みとして近年注目されているのがインバウンド誘致や農家民泊などの新たな観光形態である。

本論考は、地域創生において注目されているインバウンド誘致とそのための新たな観光形態、ニューツーリズムの重要性と、どのようにして地方にインバウンドを誘致していくのかを長野県・飯田市で行われているIIDAブランディングプロジェクトを事例として検証したい。IIDAブランディングプロジェクトには数多くの取り組みがあり、そのすべてを紹介することは本論考に与えられた紙幅を大きく超えてしまうので、今回は具体的な事例として、2018年8月3日~12日にかけて開催された「世界人形劇フェスティバル」と「AVIAMA総会」を取り上げ、それを中心に論じていく。

#### 2. インバウンドの重要性

2015年度に観光庁が発表した「魅力ある観光地域づくり」 によると定住人口1人あたりの年間消費額125万円は外国 人旅行者8人分に相当し、宿泊国内旅行者25人分、日帰り 国内旅行者80人分にあたることが分かった。こうしたデー タから地方の人口減少を防ぐために「観光」特に訪日外国 人旅行者を誘致し地域の活性化をはかるという手段は有効 であると考える。2016年度の訪日外国人旅行消費額は前年 度の3兆7476億円に比べ7.8%増加し、2011年度から年々増 加している。同様に訪日外国人旅行者数も増加傾向にあり、 2016年度では3億7476万人にも達した。しかし地方にイン バウンドを誘致することは容易ではない。同じく観光庁が 発表した「魅力のある観光地域づくり」に記載されている 「三大都市圏と地方部における外国人延べ宿泊数」や「都 道府県別日本人・外国人延べ宿泊者数(2015年)」では地方 部での観光客誘致が困難であることが見て取れる。平成27 年度の三大都市圏(東京、神奈川、千葉、埼玉、愛知、大 阪、京都、兵庫)と地方部(三大都市圏以外の道県)の宿 泊者数は前年度と比べどちらも増加している。増加率は三 大都市圏が41.6%増なのに対して地方部では59.9%と三大 都市圏よりも増加している事が分かるが、宿泊者数で比べ ると三大都市圏が4118万人である一方、地方部では2519万 人のみとなっている。三大都市圏の宿泊者数は平成27年度 の外国人延べ宿泊者数のうち約6割も占めており、地方へ の観光客の誘致は外国人のみならず日本人旅行者でも都市 部と比べ大きな格差が生じている。それに対応して消費額

も都市部と地方との格差が広がり、東京都における消費単価が6万4951円、大阪府で3万6719円であるのに対し、地方部では、観光資源に恵まれた石川県でも1万6823円に過ぎず、山梨県で8442円、長野県で2万8054円、岐阜県で1万4643円となってしまう。そのため地方では他の地域との差別化を図る必要や新たな観光形態を模索していく必要がある。

#### 3. ニューツーリズム

観光庁は今後さらに増加する見込みにある訪日外国人観 光客を地方に取り込むためにインバウンドを見据えた着地 型観光調査を進めている。ニューツーリズムについての定 義として観光庁によると「従来の物見遊山的な観光旅行に 対して、テーマ性が強く、体験型・交流型の要素を取り入 れた新しい形態の旅行」と位置付けられている。学輪4号に 掲載された「市民と学生が共創するインバウンド観光」(掛 川、山口、竹内、堀口 2018) でも取り上げたが、尾家は、 ニューツーリズムの本質として、「観光産業のイノベー ションだけでなく、観光の拡大した機能と連動して地域コ ミュニティの活性化、地場産業の復活、農林水産業の維持、 住民参加のまちづくり、市民の生きがいと誇りなど、地域 再生を語ることでもある。」(尾家 2010)と指摘した。そう した流れを受けて近年、着地型観光という地域活性化やコ ミュニティ活性化の施策を伴った地域発信の観光事業が盛 んになりつつある。尾家によるとそれは3タイプあり、そ れぞれ、農業・漁業資源を活かした「体験交流型」、観光 交流による地域資源の開発と商品化を通じた地域活性化を 目指す「観光まちづくり開発型」、集客に苦しむ観光地の再 生を目指した「観光地再生型」に分類されるのである(尾 家 2010)。飯田が現在行っているブランディング事業は、 「体験交流型」と「観光まちづくり開発型」に当て嵌まる であろう。

また、地域に関わるコンテンツ(映画、テレビドラマ、小説、まんが、ゲームなど)を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズムをコンテンツツーリズム(国土交通省)として活用しようとする動きがあるが、飯田のブランディング事業をこの類型と見做すことも出来よう。コンテンツツーリズムを推進することで、(1)地域の経済振興・住民の愛着心の向上がもたらされ、地域の経済振興や住民の地域への愛着心向上に寄与することができるとし、さらには(2)観光資源の創出や魅力が向上するため、地域独自の物語性を創出し、時間消費型の余暇の過ごし方を提供することができるとしている。コンテンツツーリズムには既に多くの事例が存在しているが、一例を示すと、原は、アニメに対する聖地巡礼とまちおこしの事例を取り上げその意義を検証している(原 2016)。ブラン

ディング事業の成果物であるWebサイトであるVisit Iidaでは、聖地巡礼の項目を置いており、コミック漫画「咲-Saki-」の舞台になっている飯田風越高校近辺や吉永小百合さんが出演した映画「母べえ」の撮影舞台である「杵原学校」を紹介している。このように飯田には現代メディアで生み出された少なくない数のコンテンツが存在し、それを活用したコンテンツツーリズムを楽しむ観光客が訪れているのである。

飯田の芸能文化で最も奥行きを持ったコンテンツの一つは、古くから町の人々に伝承されてきた人形浄瑠璃であり、それを基盤として大きな発展を遂げている「人形劇フェスティバル」であると言える。本論考では、飯田人形劇フェスティバルや2018年8月に行われたAVIAMA(Association des villes amies de la marionnette、人形劇の友・友好都市国際協会)総会を地域が持つ有力なコンテンツを活用した地域住民参加型のニューツーリズムとして捉え、本論考で紹介するとともに検証していきたい。この考察を通じて、市民や自治体が新たな旅行スタイルを提案できる可能性を示すであろう。そして、自ら実行していくことでほかの自治体と差別化を図ることができ、インバウンドを含めた新たな顧客層を取り入れることが期待される。

#### 4. 飯田とAVIAMA

#### 4. 1 AVIAMA総会開催にあたって

平成30年は、いいだ人形劇フェスタ 20年、人形劇カーニバル飯田から通算で40年の年ということもあり、これを記念して「世界人形劇フェスティバル」が開催された。このフェスティバルには、チェコ、ポーランド、イタリア、ドイツ、フランス、スペイン、ロシア、台湾、韓国、香港、ラオス、ベトナム、イラン、ケニア、カナダ、チリ、ニュージーランド、アメリカ(ハワイ)、六大州すべての18の国と地域から29劇団が参加すると表明しており、非常に国際色豊かなものとなった。全体では、約300劇団による約600ステージが上演されるなど、規模としても過去最大の賑わいを見せたと言える。

このフェスティバルに併せて、AVIAMA総会が誘致され、飯田市で開催されることとなった。これはヨーロッパ以外で初めての開催であり飯田市民が長年続けてきた人形劇フェスタが国際的に評価された結果ともいえる。飯田市では、「おもてなし」の精神を示すために、「世界人形劇フェスティバル」と「AVIAMA総会」の参加者に対し、①海外参加都市の方が安心安全に飯田で滞在できるように通訳ガイド(津田塾大学、京都外国語大学、市民等と連携)・市職員が随行、②災害、事故など危機発生時には随行する通訳ガイド・市職員による対応、③訪問先、場所の分かる案内図、食事メニューの多言語表示を作成、④AVIAMA、

参加都市を紹介するパネル制作、総会会場等へ展示、⑤総会会場等に AVIAMA 総会に参加する都市の国(都市) 旗を掲揚、⑥世界人形劇フェスティバルを楽しんでいただけるように人形劇公演を鑑賞、⑦「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」を体感していただけるように「セントラルパーク」を視察、などの主に7つの施策を実行した。

AVIAMAとは、世界各地の芸能文化の多岐にわたる発展を遂げている人形劇に関係する国際協会の1つであり、人形劇を通して様々な国との繋がりを深めることを目的としている。AVIAMAには、飯田市と友好都市提携を結んでいるフランスのシャルルヴィル・メジエール市を始めとする10ヶ国15都市以上が加盟している。AVIAMA総会は過去に以下のようなスケジュールで開催されてきた。飯田市で開催される総会は第7回目にあたり、先ほども述べたようにアジアでは初めての開催されたものである。

2011年:第1回 シャルルヴィル・メジエール市(フランス)

2012年:第2回 ビアウィストック市(ポーランド)

2013年:第3回 シャルルヴィル・メジエール市(フランス)

2014年: 未開催

2015年:第4回 シャルルヴィル・メジエール市(フランス)

2016年:第5回 トローサ市(スペイン)

2017年:第6回 シャルルヴィル・メジエール市(フランス)

2018年: 第7回 飯田市(日本)

今回の第7回AVIAMA総会には、8ヶ国16都市から約50人が参加し、それぞれの都市にアテンドのスタッフがつき、京都外国語大学をはじめ、津田塾大学、名古屋大学、東京農工大学の学生たちや市民通訳がそれに協力した。総会では、Claudine Ledoux氏(シャルルヴィル・メジエール市元市長)が会長に選出され、牧野光朗飯田市長も役員として加わることになった。

#### 4. 2 AVIAMA総会の流れと取り組み

ここでは総会を支えたスタッフの視線からAVIAMA総会を紹介したい。

AVIAMA総会の開催にあたって、参加都市それぞれにアテンドのスタッフが同行した。総会参加都市やオブザーバー都市の代表者が飯田に到着すると一都市につき5人または6人のアテンドスタッフが彼らを出迎える体制で臨んだ。まずAVIAMAの理事会が開催されたが、理事会が終了すると、レセプション会場である飯田市美術博物館に向かった。



提供:IIDAブランディングプロジェクト

飯田市美術博物館では、このレセプションのために多種 多様なブースが用意されており、AVIAMAの参加者たち の興味を引いていた。その中の1つに、端末のモニターの 中でAIのキャラクターが案内をするというものがあった。 貸し出される専用端末をカメラのようにして目の前にかざ すと、AIのキャラクターである「レナ」がそれぞれの言語 で案内・説明をしてくれるという、AR、いわゆる拡張現実 の技術を体験することができる。これは、「キャラクター とまちの共生」というKDDI株式会社と飯田市の協働に よって生み出されたものである。将来的には、このAR技 術を使って市内の案内もし、様々な言語の人々に飯田市を 知ってもらおうという戦略である。海外の人々に人気であ る日本のアニメキャラクターを最先端技術で用い、新たな 価値を創造しようとするものである。飯田には、サブカル チャーと言われている文化を受け入れる土壌があり、その 一つに「痛タク」がある。これは、車体にアニメキャラク ターのイラストが描かれているタクシーのことである。日 本中の街中でたまに見かける「痛車」のタクシー版である。 総会のアテンド中にも市内を快走する「痛タク」と何度か すれ違うことがあり、飯田市の文化的な包摂性の高さを世 界にアピールすることとなった。



提供:IIDAブランディングプロジェクト

会場には、先に挙げたAR技術だけでなく、VR、仮想現実を体験できるブースもあった。それが「VR足湯」というブースで、ここでは、専用のゴーグルをして足湯に入ることで温泉に入っているかのように感じることができる。これも飯田市とKDDIとの協働によって展開されたのである。これは最先端技術と足湯という古来からの風習の融合を体験できるものであり、良質な多くの温泉を抱える飯田の新たな可能性を示すことになった。

このような最先端技術だけでなく、飯田市を代表する伝統文化から生まれた産品を紹介するブースもあった。外国からの招待客に最も注目されていたのは、飯田が全国で非常に高いシェアを持つ水引の体験のブースである。飯田市の水引は、他の水引と区別するために飯田水引と呼ばれており、水引製品の国内シェア7割を占めているとされる。このブースでは、様々な水引細工を作ることができ、AVIAMAの参加者たちは飯田市の伝統文化を体験することができた。

レセプションが開催されると、津田塾大学の学生たちが 自らアテンドする都市の紹介発表を行った。これは学生た ちが事前に都市についてリサーチして準備したものであり、



提供:IIDAブランディングプロジェクト



提供:IIDAブランディングプロジェクト



提供:IIDAブランディングプロジェクト

これを見た代表者たちは感心していた。

2日目は、AVIAMA総会が市民に公開され、記者会見 を終えた後にAVIAMA参加者は飯田市内を散策した。こ の散策では飯田市の中学生が同行し、主にりんご並木とセ ントラルパークの案内をした。地元の中学生たちがりんご 並木の歴史や意味について熱意を込めて説明し、 AVIAMAの参加者たちはそれを熱心に聞いていた。りん ご並木は、飯田東中学校の生徒が提案し、維持管理してき ている並木で、多くの市民が住民主体のまちづくりの象徴 として大切にかかわり続けてきた場所であるため、 AVIAMAの参加者たちに飯田の人の強いつながり、市民 の公共意識が高いという長所、街並みと子供たちとの歴史 を感じてもらうことができた。夜には、今田人形の館で今 田人形芝居の蝋燭公演を鑑賞した。ステージで行われる浄 瑠璃を見て、その後、人形を自分自身で実際に動かす体験 もし、AVIAMAの参加者たちに飯田市の伝統芸を感じて もらうことができた。

#### 4. 3 AVIAMAとニューツーリズム

今回のAVIAMA総会ではAR、VR、AIなどの最先端技術と、水引や人形浄瑠璃、アニメキャラクターなどの日本または飯田市の伝統技術や芸能を融合させて体験してもらうといった催しが多数あった。これは先に述べたように体験型の観光と言われているニューツーリズムであると言える。飯田市に来ることで、豊かな自然や市民社会の中に入り込むことでしか体験できない経験をすることができるが、古くからの文化や風習を最先端の技術と組み合わせる新たな可能性さえも体験でき得るところに他の地域との差異がある。AVIAMA総会では、国際的な多様性も経験することができたので、奥深いニューツーリズムの形を提示したことになろう。実際に、AVIAMA総会の参加者達は、日本の伝統と最先端技術の融合を体験できるのと同時に、飯田で営まれてきた生活や祭りを体験し、それはAVIAMAのネットワークを通じて世界に伝播されていくであろう。

飯田市という、南信州の中核都市ではあるが、リニア新幹線の開通とそれに伴うストロー現象のリスクを抱えた地域が、このような画期的な方法でニューツーリズムを推し進めていることは、地方創生の一つの処方箋を示すものであろう。

#### 5. まとめ

近年インバウンド需要が非常に大きくなってきている。 訪日外国人旅行者統計によると、2005年には約673万人であった訪日外国人が、2016年には約2404万人へと急増している。それによって需要を国内の観光・サービス・小売業界に生み出し、例えば、JTB総合研究所の推計によると、2010年から2016年までの旅行市場の金額ベースの成長率は、国内旅行が2.0%、海外旅行が、1.9%、インバウンドが10.3%となっており、インバウンドの成長が突出している(JTB総合研究所 2017)。人口縮減、地方・都市周縁の過疎化は急速に進行してきており、インバウンドの持つ購買力を地域の活性化に役立てるのは意味があるであろう。その時、飯田市民が長い時間をかけて蓄積してきた文化の価値が、飯田の提供するニューツーリズムの価値を押し上げるであろう。

しかしながら、「その価値を理解できる人に提供することで、新たな仕組みで経済が循環していくことが可能となる」(掛川、山口、竹内、堀口 2018)といえるので、「地域社会を支えるツールとしてインバウンド消費を活用するのなら、単発的なものではなく持続的なものにしなくてはならない。インバウンド消費が持続的になされるためには、老舗の生き残り戦略と同じく、コミュニケーションを通じて、供給側と消費側が強固な信頼関係を築いていくことが大事であり、そして何よりも供給側が提供する品・サービスの価値を正当に認める消費者を見出さなくてはならない。そういう意味では、全ての訪日外国人客を地域に受け入れる必要はなく、選別的に自分たちのコミュニティに資する顧客層を定め、その層にアプローチしていくことが重要であろう。」(掛川、山口、竹内、堀口 2018)という点を念頭に置く必要があろう。

観光客が積極的に関わることで成立するニューツーリズムはともすれば地域社会に混乱をもたらす可能性がある。だからこそ地域の市民一人一人が自律的に考え、地域社会自身が舵を取るような政策を実施しなくてはならない。今回実施された「世界人形劇フェスティバル」と「AVIAMA総会」は市民が主役となり行政や域外の人々や学生と手を携えることで自らが主導する形で、世界や国内から訪れた観光客に飯田ならではの「おもてなし」の方法を示したと言えよう。

#### 参考文献

尾家建生 (2010) 「ニューツーリズムの概要と現状分析及び 展望」 『SRI』 No.101, pp.1-9.

掛川大樹、山口舞華、竹内宏彰、堀口朋亨 (2018)「市民と 学生が共創するインバウンド観光~LBSジャパントレッ ク飯田訪問を例に~」『学輪』(4), pp.25-31.

原一樹(2016)「見えない宝を探し、創り出すコンテンツ ツーリズム」『地域創造のための観光マネジメント講座』 学芸出版社.

牧野光朗編著 (2016)『円卓の地域主義』事業構想大学院大 学出版会。

#### Web資料

AVIAMA (Association des villes amies de la marionnette、 人形劇の友・友好都市国際協会)

(https://www.aviama.org/)

飯田水引協同組合(http://iidamizuhiki.jp/index.html)

いいだ人形劇フェスタ(http://iida-puppet.com/)

#### 飯田市

(https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/3443 0.pdf)

#### 国土交通省

(http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudokeikaku\_tk3\_000010.html)、

(http://www.mlit.go.jp/common/001172873.pdf),

(http://www.mlit.go.jp/common/000116863.pdf)、

(http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatu/h16se-ika/12eizou/12\_2.pdf)

#### **KDDI**

(http://news.kddi.com/kddi/corporate/newsrelease/2018/07/19/3273.html)

#### 総務省

 $(http://www.soumu.go.jp/main\_content/000302843.pdf) \verb|,|$ 

(http://www.soumu.go.jp/main\_content/000513096.pdf)

#### JTB総合研究所

(http://www.soumu.go.jp/main\_content/000341078.pdf)

#### 農林水産省

(http://www.maff.go.jp/primaff/kanko/project/attach/pdf/171113\_28kozo1\_08.pdf)

Visit Iida (https://visitiida.com)

## スーパー・メガリージョンがもたらす暮らし先進都市 飯田の可能性に関する研究

Study on the potential of living advanced city Iida brought by Super-Mega-Region

神奈川県相模原市役所(東京大学大学院 都市工学専攻修士課程2017年修了) 道祖 英一東京大学大学院 工学系研究科都市工学専攻 准教授 瀬田 史彦

Eiichi Doso

Sagamihara city office

(Graduate school urban engineering major, University of Tokyo graduate master course 2017)

Fumihiko Seta

University of Tokyo Graduate School of Engineering, Department of Urban Engineering

#### 【論文要旨】

本論説では、リニア駅の発展によるリニア中央新幹線の開業効果を引き出すため、まずその中間駅である飯田の現状とスーパー・メガリージョンの概要及び検討状況について整理を行い、その上で、飯田の特徴を暮らしの観点からリニア駅間で比較分析し、飯田に住み続けられるためのテレワークの推進、就職・進学支援という観点から、飯田における暮らし先進都市としての可能性を研究した。その研究を通じ、飯田においては、他のリニア駅と比べて、暮らしやすい環境が整っている面を有することについて一義的に顕在化し、この特徴を生かして、更なる暮らしやすさの選択肢を増やすため、テレワークの導入、通勤・通学補助の施策に焦点を当て、飯田に住み続けながら三大都市圏等とつながりを深めることの可能性を検討した。

キーワード:スーパー・メガリージョン、リニア中央新幹線、新幹線通勤、テレワーク

Key Words: Super-Mega-Region, Linear-chuo-shinkansen, Commuting by the Shinkansen, Telework

#### 1. はじめに

#### 1. 1 研究の背景と目的

2027年、リニア中央新幹線の品川・名古屋間開業が見込まれている。そのリニア中央新幹線の開業効果を活かすため、飯田では、伊那谷の目指す将来像を描いたリニアバレー構想 やリニア長野県駅周辺整備に向けたリニア駅周辺整備基本計画 等により、開業を見据えたハード・ソフト両面からのまちづくりが進められている。また、飯田市では、リニア駅周辺整備デザイン会議等を設置し、これらの深度化に向けた更なる検討が進められている。

一方、第二次国土形成計画<sup>3</sup>において、「リニア中央新幹線の開業を見据え、三大都市圏がそれぞれの持つ個性をさらに際立たせ、一体化することによりイノベーションを起こす世界最大のメガリージョン(スーパー・メガリージョン)の形成等に向けた対流を促進する。」ことが述べられており、「効果を全国に拡大し最大化するため、広範に叡智を集め、広域的かつ分野横断的にスーパー・メガリージョンの形成に向けた構想の検討を行う」ため、国土交通省は、平成29年8月にスーパー・メガリージョン構想検討会(顧問:奥野信宏国土審議会会長、座長:家田仁政策研究大学院大学教授)(以後、「SMR構想検討会」という。)を

設置し、平成31年夏ごろの構想策定を目途に検討を進めている。

これらの検討において述べられている事項を踏まえ、リニア中央新幹線による都市圏との時間短縮メリットが最も大きい飯田に着目し、リニア長野県 (仮称) 駅が整備される飯田の可能性について、特に暮らしの観点から研究を行うものとする。

第1章では、研究の背景と目的、スーパー・メガリージョン(以後、「SMR」という。)の概要、SMR構想検討会における中間駅の機能や暮らしに関する意見について整理を行う。第2章では、飯田の特徴を暮らしの観点からリニア中央新幹線駅(以後、「リニア駅」という。)間で比較分析し、これらの内容を踏まえ、第3章では、飯田に住み続けられるためのテレワークの推進、進学・就職支援という観点から、飯田における暮らし先進都市としての可能性を研究することとする。なお、当研究においては、働き方、住まい方、社会活動を暮らしと捉え、先進的に将来の暮らし方や国土構造、社会構造の変化を見据えて、施策に取り組む都市を暮らし先進都市と定義づけることとする。

既往研究においては、中間駅のまちづくりにおいてリニア中央新幹線の中間駅整備と沿線地域開発4等が存在するが、SMRとリニア駅との関係、リニア駅間における暮らし

の観点からの比較、SMRとテレワーク等の関係について十分考察されていない現状である。

#### 1. 2 スーパー・メガリージョンの概要

SMRについて、未来投資戦略2018°では、「リニア中央新幹線の開業を見据え、三大都市圏がそれぞれの持つ個性をさらに際立たせ、一体化することによりイノベーションを起こす世界最大の圏域」と定義しており、SMR構想検討会中間とりまとめ°においては、SMR形成のイメージが図1のとおり示されている。

現在整備中のリニア中央新幹線については、その開業によって、三大都市圏が約1時間で結ばれ、世界からヒト、モノ、カネ、情報を引きつけ、世界を先導する圏域の形成が期待されている。また、リニア中央新幹線の全線開業に向けては20年以上の歳月を要することから、その将来を見据え、「経済・産業構造や人々の暮らし、価値観等が今後大きく変わっていく中で、リニア中央新幹線やその他の高

速交通ネットワーク(新幹線、高速道路、航空等)の整備によって、交流・対流に要する時間の劇的な短縮が、ビジネススタイルやライフスタイルにどのような影響を及ぼす可能性があるのか」、これらの整備効果をどのように「引き出す」のか等の議論を行う必要がある<sup>7</sup>。また、石井国土交

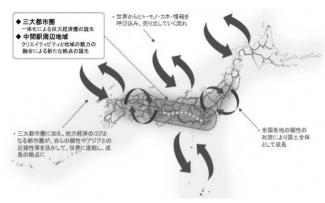


図1 スーパー・メガリージョン形成のイメージ 出典:SMR構想検討会中間とりまとめ

#### 表1 SMR構想検討会における中間駅の機能や暮らしに係る意見

#### 中間駅の機能

- ▶ リニアによって中間駅は大都市圏に隣接するようになり、そのライフスタイルの影響を受けるようになる。(第2回)
- ▶ 飯田市には航空宇宙分野の部品メーカーが集積しつつあるが、リニア駅の開業により大きな変化が生じるのではないか。田舎は、都市に対してハンデを負っており、航空、バイオ産業のような夢を与える産業を興こさなければ、人が通り過ぎるだけの街になってしまう。(第3回 多摩川精機萩本副会長(当時))
- ▶ 中間駅について、緑豊かな環境を生かした定住型住宅が広がるイメージのほか都市居住者の一時滞在場所として農や食を提供する拠点となっていくような二つの方向性があると思う。(第3回)
- ➤ 三遠南信には産業面で特徴的な都市が所在しており重要な地域として注目したい。注目されるのはバイオを含めた農業分野の取組であり、<u>多く</u>都市住民の関心を繋ぎ、フェイス・トゥ・フェイスを含めた多様な交流が期待される。(第3回)
- ▶ 国際社会に向かう際の日本の知恵として、温存すべき価値が何かを自覚しないといけないのではないか。 異質なものをどう受け入れるのか、森をどうするのか、都市と村をどう結び付けるのかという思想をもって社会資本投資を行うべき。(第4回)
- ▶ 災害時への備えとして、中間駅のある都市に第二の拠点を設けることで、人やモノの動きが早くなることも期待できる。(第6回)
- 単純に中間駅にリニアが停まるから観光客が増えるとは言えず、移動手段に関係なく、その地域が<u>観光の地域としてブランドがあるか、実績が</u>あるのか、プロモーションされているかということが大事。(第9回)

#### Ⅱ 中間駅の暮らし

- ▶ 地方の方が居住空間に余裕があり、同居家族のサポートにより女性も働きやすく、出生率も高い等、生活環境は良い。働く場所があれば地方に住みたい若者も多いと考えており、その中でリニアがもたらすものとしてフェイス・トゥ・フェイスコミュニケーションにより何が実現できるかを考えるべき。(第3回 日立製作所中西会長)
- ▶ 都市圏からの人材獲得について、若者が集まる最大の理由は、夢を実現できる場所かどうかということ。田舎は来れば間違いなく住みやすい場所であり、将来、東京・名古屋への移動の利便性が高まり、変化が起きることが期待される。(第3回 多摩川精機萩本副会長(当時))
- シニアの挑戦が日本を変える(第3回 多摩川精機萩本副会長(当時))
- > スーパー・メガリージョン構想を日本の成長コアにするため、リニア中間駅に居住し、都市に通勤しやすくなることができれば、愛知県の調査では、単身赴任者のうち、4書弱がリニアで名古屋から通うという意向も見られた。(第6回)
- > SMR を豊かな国土に資するように活用するならば、多様性、地方の個性や地方の QOL を重視する価値観の醸成が必要である。(第8回)
- ▶ いずれは住まいそのものが移動するという考え方になるが、中間駅はその移動先の一つになる。郊外に住むこと自体は良いことだと思っている。 (第9回)
- > リニア開通後においては、地方の豊かさの中で暮らしながら、都市の豊かさを手に入れることが、豊かなライフスタイルとなるのではないか。 地方は生活コストが安く、地縁・血縁の助け合いができる。東京に人が集まると少子化が進むが、地方部では少子化の歯止めにもなる。<u>都市の</u>豊かさは、多様な職業の選択肢、学びや成長の機会、文化・レジャー・消費の多様さ。リモートワークと高速効率的移動による出勤を組み合わせて柔軟に働くことで実現できる。(第10回 加藤委員)
- ▶ 生活基盤は地方に置いたまま、好奇心を持つものや仕事などは東京等で得ることもできる。リニア開業により、一度地方から外に出た人が持つ 視点を、地方に住まいながら持つことができるようになるのでは。(第10回 加藤委員)
- ▶ 多様な選択肢の一つとして地元に残ることで、地方部でいろいろな文化が育ち、Iターン・Jターンが起これば、新しい故郷という意味で、地方 在住を選択できる。それが職縁などだけでない新たなコミュニティやネットワークをつくっていければ、とても魅力的な国の姿になるのではないか。(第10回 加藤委員)
- 異次元の高齢化が進む中で、参画型のプラットフォームを中間駅につくり、移動と交流をしながら食や農などへの参画を図るようなライフスタイルを産み出すという視点は、国土交通省としても重要なのではないか。(第11回)
- ※( )は回次・発言者。無記の場合は、公表されている SMR 構想検討会議事概要に発言者不明記によるもの

通大臣\*はリニアをはじめとする高速交通ネットワークの整備により、従来にはないライフスタイルやビジネススタイルが生まれ、人々の暮らしや働き方に多様性と豊かさを与えるような国土の形成も期待できる旨述べている。

これらを踏まえ、国・地方公共団体・経済団体の共通のビジョンの構築を図るための構想を策定するべく、SMR構想検討会が設置されている。これまで13回検討会が開催され、検討会の委員及び計17名のビジネスパーソン等のゲストスピーカーによる意見交換が重ねられた中、平成30年7月、SMR構想検討会中間とりまとめが「人口減少社会にうちかつスーパー・メガリージョンの形成に向けて〜時間と場所からの解放による新たな価値創造〜」としてまとめられているところである。

# 1. 3 スーパー・メガリージョン構想検討会における リニア中間駅の機能や暮らしに関する意見について

これまで開催されてきたSMR構想検討会では、概ね20年後のリニア品川・大阪間開業 (2045年から最大8年前倒し)を見据えた視点を中心に中間駅の都市機能や暮らしについての意見が述べられている。これらの意見について、表1のとおりSMR構想検討会における中間駅の機能や暮らしに分類することとする。

これらの意見を踏まえ、SMR構想検討会中間とりまとめにおいて、中間駅周辺地域は、「多様な人材が活発に行き交いクリエイティブな交流が生まれる、新しい知的対流拠点となる可能性を秘めている」ことに加え、「リニア中央新幹線による劇的な時間短縮により、テレワークやジョブ型雇用等の普及とあいまって、大都市で働きながら自然豊かな地域で暮らしたり、ライフステージに応じた住み替え先となる等、新たな居住の選択肢を提供する地域に発展していく可能性を持っていること」等が述べられている。

このように、中間駅におけるライフスタイル、ビジネススタイルといった広義のヒトの「暮らし」について、SMR構想では着目していることから、次章、リニア駅間における暮らしの比較により飯田の暮らしやすさを整理することとする。

#### 2. リニア駅間の比較から見た飯田の特徴

第2章では、リニア中央新幹線の駅が設置される品川駅 (東京都特別区)、神奈川県(仮称)駅(神奈川県相模原市)、 山梨県(仮称)駅(山梨県甲府市)、長野県(仮称)駅(長 野県飯田市)、岐阜県(仮称)駅(岐阜県中津川市)、名古 屋駅(愛知県名古屋市)、大阪市駅(大阪府大阪市(全国 新幹線鉄道整備法上、駅位置未確定))の所在自治体間の比 較を生活コスト等の観点から行い、他のリニア駅と比べた 長野県駅周辺(飯田)の暮らしやすさについて研究を行う。 なお、研究に際して、市間のデータ比較が困難な場合は、 都府県間の比較を行うこととする。

#### 2. 1 生活コストについて

まず、地域格差が大きい主たる小売物価指数の面から比較を行った場合、図2のとおり住居費については、東京都、神奈川県が他府県より相対的に高く、また、食料費その他の費目については、東京都、神奈川県、愛知県、大阪府が概ね高い傾向である中、長野県は、いずれも指数が100以下となっている。

また、子育てファミリー等の規模を想定した 2 LDKマンションの賃料で比較を行った場合、図 3 のとおり名古屋駅・大阪市北区周辺のマンション等賃料(2 LDK)は、品川駅周辺に比べて半額未満となっている。特に飯田市(長野県)は品川区の約 1 / 6 の賃料で借りることが可能な傾向である。

次に、都道府県別等住宅延べ面積で比較を行った場合、図4のとおり三大都市圏区市のリニア駅においては、全国平均より約20㎡以上低く、一方、長野県、岐阜県、山梨県においては、110㎡以上の面積で、三大都市圏より広く、特にリニア長野県(仮称)駅においては、リニア駅間で最も住宅延べ面積が広い傾向である。

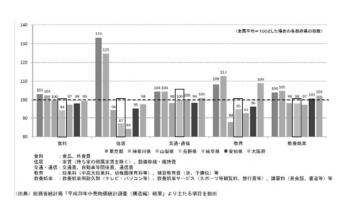


図2 都道府県別小売物価の地域差指数 出典:SMR構想検討会中間とりまとめに一部加筆

リニア予定駅 (予定地)	調査対象	賃料 (2LDKの場合) (※1)
品川駅	品川駅	34.94万円/月
神奈川県駅	橋本駅	9.31万円/月
山梨県駅	甲府駅	9.30万円/月
長野県駅	飯田駅	5.96万円/月
岐阜県駅	瑞浪駅 (※2)	6.24万円/月
名古屋駅	名古屋駅	13.64万円/月
大阪市	大阪市北区 (※3)	16.62万円/月

(出典) LIFULL HOME 'S HP (平成30年2月14日時点)

- ※1:駅徒歩10分以内の賃貸物件の平均賃料(管理費・駐車場代などを除く)を軸としてLIFULL HOME'Sの
- 適去アータを基に昇出 ※2:中津川市内に調査対象駅の相場が存在しないため、中央本線沿い近接の瑞浪駅を対象
- ※3:駅位置が特定されていないため、大阪市北区(大阪駅所在)を仮定 ※4:甲府駅、飯田駅、瑞浪駅については2LDKのデータにはマンションの情報がないため、物件種別指定無し

図3 リニア予定駅別マンション等賃料 出典:第7回SMR構想検討会資料に一部加筆

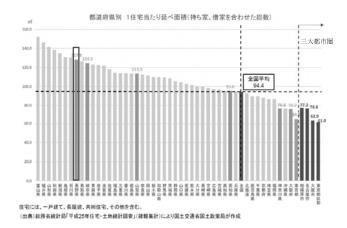


図 4 都道府県別等 住宅延べ面積(総数) 出典:SMR構想検討会中間とりまとめに一部加筆

#### 2. 2 通勤時間、平均帰宅時間について

都市別で通勤時間の比較を行った場合、図5のとおり、 1時間を超える割合は、東京都区部で飯田市の約5倍、相 模原市では飯田市の約11倍となっている。甲府市、飯田市、 中津川市の約8割が通勤時間30分未満となっており、特に 飯田市では相対的に通勤時間が短い傾向である。

次に、都道府県別に平均帰宅時間で比較を行った場合、表2都道府県別平均帰宅時間のとおり、長野県はリニア駅間で相対的に早い帰宅時間であるとともに、全国平均より20分以上早い時間に帰宅できる傾向がある。

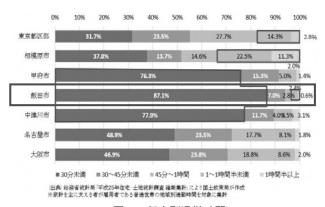


図5 都市別通勤時間 出典:SMR構想検討会中間とりまとめに一部加筆

表 2 都道府県別平均帰宅時間

順位	都道府県名	平均時刻
1	高知県	18:09
2	島根県	18:16
2	宮崎県	18:16
6	山梨県	18:21
17	長野県	18:31
30	岐阜県	18:43
35	愛知県	18:52
40	大阪府	19:05
46	東京都	19:13
47	神奈川県	19:16
Ave.	全国平均	18:53

出典:総務省統計局 平成28年社会生活基本調査

#### 2. 3 高齢者割合、市民活動について

都道府県別で高齢者割合(65歳以上)の比較を行った場合、表3のとおり、長野県(飯田市)はリニア駅間の県において最も高齢者割合が高く、全国平均より約4ポイント高い現状である。

一方、表4のとおり、地域における市民の社会活動力を図る指標の1つとして内閣府が調査を行っている都道府県別認証NPO法人数を人口1万人あたりで比較を行った場合、長野県駅は人口比全国7位で相対的に認証NPO法人が多く、市民活動が盛んである傾向が読み取れる。

また、図6のとおり表3及び表4を散布図により分析し

表 3 都道府県別高齢者(65歳以上)割合

都市	2015 年時点	2040 年見込み
東京都	22.7%	33.5%
神奈川県	23.9%	35.0%
山梨県	28.4%	38.8%
長野県	30.1%	38.4%
岐阜県	28.1%	36. 2%
愛知県	23.8%	32.4%
大阪府	26.1%	36.0%
Ave.	26.6%	36.1%
飯田市	31.3%	38.4%

出典:2015年時点:総務省統計局平成27年国勢調査。2040年: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)の出生中位・死亡中位仮定による推計結果

表 4 都道府県別人口 1 万人あたり認証NPO法人数

順位	都道府県名	人口1万人あたり 認証 NPO 法人数
1	東京都	6. 98
2	山梨県	5. 65
3	鹿児島県	5. 33
7	長野県	4. 80
22	岐阜県	3.84
40	大阪府	2. 02
45	神奈川県	1.65
47	愛知県	1. 53
Ave.	全国平均	3. 18
_	飯田市	6. 47

出典:NPO法人数:平成30年5月31日時点認証申請受理数・認 証数(所轄庁別)(内閣府NPOホームページ)、人口:総務 省統計局平成27年国勢調査

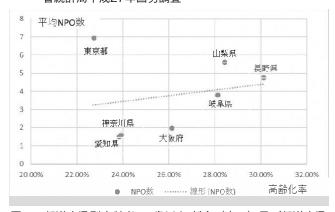


図6 都道府県別高齢者(65歳以上)割合(表3)及び都道府県 別人口1万人あたり認証NPO法人数(表4)の散布図

たところ、大都市圏では比較的高齢化率の低い東京都に法人数が偏っており、地方では、東京を除く三大都市圏と比べて相対的に人口当たり法人数が多い。このようなことから、長野県は高齢者割合が高い傾向の中で、人口比認証NPO法人数が多く、特に飯田市は、長野県より更に高齢者割合が高いものの、人口比認証NPO法人数が人口当たり全国平均の2倍近くに及んでおり、高齢化率21%を超える超高齢社会においても、相対的に充実した社会活動が行われている傾向を有するという特徴が挙げられる。

#### 2. 4 飯田の特徴

生活コストとして、小売物価の地域差指数、駅別マンション等賃料、住宅延べ面積といった観点から見た場合、リニア駅間の相対として住宅を中心として生活コストがかかりにくい傾向であることが分かった(当研究では詳述していないが、収入の観点から都道府県の職員給与比較。を行ったところ、長野県は33位(約42万円/月。50人以上の民間企業給与を基準)で中位25位の奈良県とは差6,222円/月であり、中位県において収入に大きな乖離なし)。

次に、通勤時間、平均帰宅時間といった働き方の観点から見た場合、相対的に短い通勤時間で勤務地まで通うことができていること等により、早く帰宅できる傾向であることを把握することが出来た。

また、高齢者割合、市民活動といった多様な活躍という 観点から見た場合、長野県、特に飯田市は、相対的に高齢 者割合が高いものの、更に人口比で認証NPO法人数が多く、 市民活動が充実している傾向を有することが分かった。な お、働き口としての都道府県の有効求人倍率<sup>10</sup>で比較した ところ、長野県は全国22位(1.06)であり、一定の働き先 確保の環境が整っていることが分かった。

一方、暮らしやすさを個人の価値観から整理した場合、図7のとおり、人々は物の豊かさから心の豊かさを求める傾向で推移していること、その心の豊かさの一要因に資する充実感を感じるときについては、図8のとおり、主に家族団らんの時、ゆったりと休養しているときが挙げられている。このようなことから、他のリニア駅と比べた飯田(長野県)における通勤時間の短さ、平均帰宅時間の早さは、個人の時間をより有効に活かすことにつながり、ひいては、心の豊かさを求める個人の価値観につながる可能性が高いものと考えられる。

また、女性の活躍という観点からみた場合、図9のとおり、通勤時間の短さは女性の労働力率の向上につながる正の相関が示されており、また、図10のとおり、通勤時間が都心に比べて短い地方部が出生率、女性の有業率ともに高い傾向にあることが判別でき、相対的に地方の方が女性の活躍の環境につながっている傾向を把握することが出来た。生活コスト、働き方、多様な主体といった当研究の項目





図7 人々の価値観の変化 出典:SMR構想検討会中間とりまとめ

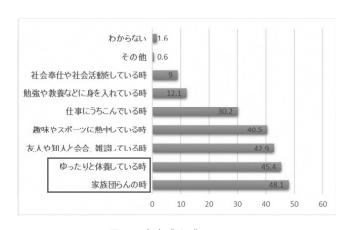


図8 充実感を感じるとき 出典:総務省統計局 平成28年国民生活に関する世論調査に一部 加筆

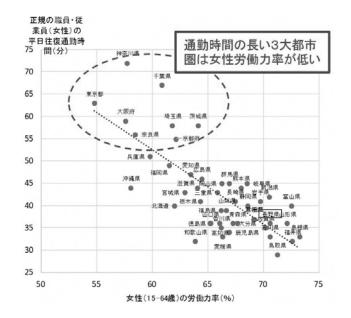
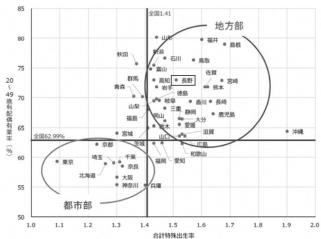


図9 女性の労働力率と往復通勤時間 出典:総務省統計局「平成27年国勢調査」及び「平成28年社会 生活基本調査」(正規の職員・従業員女性=会社・団体・ 官公庁・個人商店等に正規の職員又は正規の従業員とし て雇われている人。会社等の役員は除く。)



(出典)厚生労働省「平成24年人口動態統計」総務省「平成24年就業構造基本調査」より国土交 通省国土政策局作成

図10 都道府県別の出生率と女性の有業率 出典:SMR構想検討会中間とりまとめに一部加筆

から考察した場合、飯田 (一部統計により長野県) は、他のリニア駅と比べて、暮らしやすい環境が整っていることを把握できた。これらの特徴を生かし、テレワーク等の施策を絡めてリニア中央新幹線をはじめとする高速交通ネットワークを更に活用することで、飯田に住み続けながら、将来の社会構造等を見据えた暮らしやすい都市を形成することが可能になると考えられる。

#### 3. 飯田市の暮らし先進都市形成に向けた取組

筒井ら<sup>11</sup>によれば、全国的な傾向として、地方への移住、 定住を促進するため、ふるさと回帰支援センター等が田園 回帰意向等の理由によりUIJターンといった地方で暮らし 生活することを希望する都市生活者や定年退職者への働き かけを活発に行っている。

また、多様な働き方については、未来投資戦略をはじめ として、女性・障害者・外国人・高齢者等の豊かな暮らし や活躍の方策について多方面から検討、詳述されており、 これらの方策に呼応する取組が全国で進められている。

このように様々な観点から「暮らし」の充実に向けた取組があるが、当章では、SMR構想検討会中間とりまとめで述べられている「リニア中央新幹線の開通がもたらす移動時間の劇的な短縮は、AI、IoT化等の進展とあいまって、これまでの働き方や暮らし方を制約する要因であった「時間」と「場所」から人々を解放し、多様な選択肢をもたらすことで、各世代のビジネススタイルやライフスタイルに変化をもたらすことが期待される」ことに着目し、第2章までの内容を踏まえ、飯田に住み続けられるためのテレワークの推進、進学・就職支援の施策に絞り、暮らしやすい都市の形成に向けた更なる選択肢を研究することとする。

#### 3. 1 飯田市におけるテレワークの可能性について

テレワーク(ICTを活用し、時間や場所を有効に活用できる柔軟な働き方)については、平成30年度情報通信白書にも述べられているとおり、雇用関係のあるテレワーク、自営型のテレワーク(クラウドソーシング)がある。前者では女性、高齢者、障害者の労働参加を制限する要因の一つである長時間通勤、定時勤務に対する負担軽減に結び付く可能性があり、後者では、個人事業主(フリーランサー)が仕事を受注する手段として認識されており<sup>12</sup>、SMR形成に向けた多様な働き方の一つとしての可能性を有している。

その雇用関係のあるテレワークについて、企業におけるテレワークの導入率は現在13.9%であるが、導入企業のうち、在宅勤務の導入率29.9%に対して、自宅外の導入率が69.1%(モバイルワーク(外出先テレワーク:56.4%)、サテライトオフィス勤務:12.1%))13であり、自宅以外における活動の場も選択肢として提供することに優位性が考えられる

また、図11のとおり、テレワークの導入目的について、企業側の認識としては、「勤務者の移動時間の短縮を目的」として54.1%、「労働生産性の向上」として50.1%、「勤務者にゆとりと健康的な生活の実現」として23.7%を理由に挙げており、テレワークは、SMRの形成により時間と場所からの解放が期待できる新たなライフスタイル、ビジネススタイルの在り方と親和性が高いものと推察される。

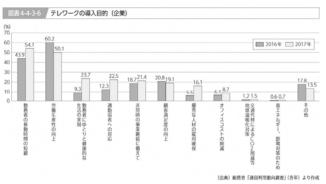


図11 民間企業におけるテレワークの導入目的 出典:平成30年度情報通信白書

テレワークの更なる導入促進に向けては、総務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、内閣官房、内閣府が、東京都及び関係団体と連携し、働き方改革の国民運動を展開しており、平成30年7月23日(月)~27日(金)をテレワーク・デイズと定めて、全国1682団体がテレワークに参加した<sup>14</sup>。平成29年のテレワーク・デイ(平成29年7月24日開催)参加総数約950団体に比べて、1.77倍の参加団体増となっており、図12のとおり平成30年の参加団体内訳では、東京都を除く全国の中では、長野県が8位であり、三大都市圏を除けば北海道、石川県、宮城県、沖縄県に次ぐ参加数となっている。

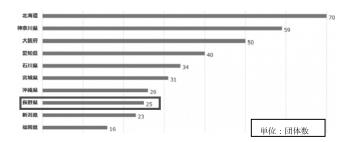


図12 テレワーク・デイズ参加団体 本社所在地上位10件 (※東京都除く)

出典:テレワーク・デイズ参加団体集計データ 最終確認日: 2018年9月6日

また、地方のサテライトオフィス等においてテレワークにより都市部の仕事を行う働き方を促進するため、総務省がふるさとテレワーク推進事業を展開しており、平成27年度から実施しているふるさとテレワーク地域実証事業から平成30年度ふるさとテレワーク推進事業(平成30年7月採択候補先決定)に至るまで長野県の自治体は例年採択されている状況である。

このような状況から、第2章で述べた飯田の相対的な暮らしやすい環境及びこれらの状況を鑑みて、テレワークの 将来性が飯田において高く見込まれることが考えられる。

当節では、SMRの一翼を担う飯田におけるテレワークの可能性について、図20で後述する新幹線定期利用率が高い首都圏から50~150kmに位置し、総務省のふるさとテレワーク推進事業を活用している長野県富士見町、群馬県みなかみ町を取り上げ、研究を行うこととする。

富士見町は、八ヶ岳の麓にある自然豊かな高原の町、地盤の強固さ、子育で・教育環境の充実、車30分圏内の生活・レジャー施設の充実を柱として、「富士見森のオフィス」を整備し、3部屋の会議室、コワーキング・交流スペース、8室の個別オフィススペース(平成30年7月1日時点満室)を有している。

図13のとおり、平成26年度に当実証実験が行われ、その成果として、事業費(1.0億円)、市町村支出額(2.3億円)、テレワーカーによる支出額(0.03億円)からの一次・二次生産誘発額を加味し、波及効果倍率1.36倍という効果<sup>15</sup>を導くことができた。

その後、富士見町は図14のとおりテレワークタウンホームオフィス計画(既存物件を活用し、高速ネット回線やビデオ会議システム等を備えた住居兼オフィスとして、企業やフリーランスに提供する、テレワーキング・プロジェクト)を定め推進するとともに、富士見森のオフィスを整備している。

また、みなかみ町は図15のとおり、山岳自然環境、温泉といった豊かな特徴を生かし、旧幼稚園の跡地利用として整備を行い、テレワークセンター MINAKAMI (一般社団

法人コトハバが運営)として200㎡弱のイベントスペースや 8室のサテライトオフィスを有している。(平成30年7月 1日時点常時4室入室済)

両事例に共通していることとしては、居住(滞在)を意識していること、「都心から程よく遠く、程よく近いこと」を長所に挙げていること、自然環境、農業による豊かな食環境<sup>16</sup>が挙げられている。

クラウドソーシングのマッチングサイトを運営する株式会社クラウドワークス (会員登録数152万人 (平成29年9月末))が平成29年4月にサテライト拠点を長野県駒ケ根市に開設、長野県伊那市では平成30年3月に「パノラマオフィ



図13 平成26年度総務省ふるさとテレワーク ポータルサイト (長野県塩尻市・富士見町・王滝村) 出典:総務省HP

図14 富士見町テレワークタウンホームオフィス計画 出典:富士見町HP

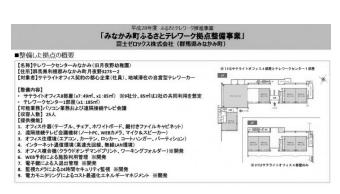


図15 平成28年度 総務省 ふるさとテレワーク推進事業 (みなかみ町ふるさとテレワーク拠点整備事業) 出典:総務省HP

ス伊那」を竣工する等飯田周辺にサテライトオフィス

環境整備・充実に向けた萌芽が生まれている。これらの 国の動向、周辺都市におけるテレワークの導入状況を考慮 する中で、SMRの一翼を担う飯田においても、今から検討 することは意義があるものと考えられる。

具体的には、先述の事例を含むふるさとテレワーク推進事業の平成27年度15地域、平成28年度22地域、平成29年度11地域の事例を調べる中で、情報通信網の整備、廃校等公共施設の活用、人材育成等がテレワークの環境充実にむけて必要になってくることが示されていることから、これらの事例を踏まえた検討を行うことが有用であると推察される。

# 3. 2 リニアを手段とした他都市圏への通勤・通学支援の可能性について

当節では、リニア中央新幹線の活用により品川まで45分、 名古屋まで25分の移動時間を生かし、飯田に住み続けなが ら他都市圏への通勤・通学が行える行政施策の在り方につ いて研究を行うこととする。

長野県"によれば、図16のとおり、性別・年代如何に関わらず15~19歳から20~24歳になるときの大幅な県外への転出超過が生じている現状であり、第2章で述べた暮らしやすさと居住に対するミスマッチが生じている。また、20~24歳から25~29歳になる時に転入超過となっている傾向が経年で続いているものの、2000年以前と比べて転入超過数が減少傾向となっており、概して他地方への就職、進学からの社会移動による転出超過に歯止めがかからず、その年代が長野に戻らなくなっている傾向が続いていることが読み取れる。

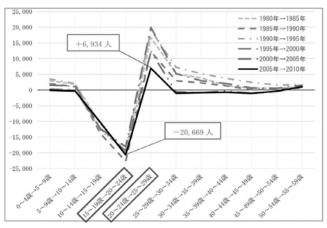


図16 長野県における性別・年齢階級別社会移動の長期的動向 出典:長野県平成28年度「政策研究」

その要因として、図17、図18のとおり、大学進学希望者が長野県内大学を選択する余地が少ないこと、県出身学生のUターン就職率が4割程度にとどまっていることが、若

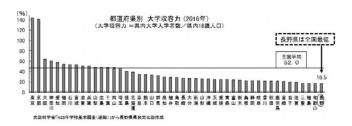


図17 都道府県別 大学収容力 (2016年) 出典:長野県総合計画審議会

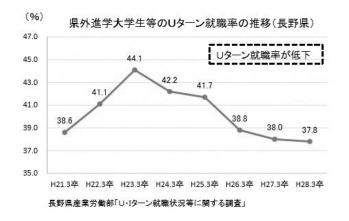


図18 県外進学大学生等のUターン就職率の推移(長野県) 出典:長野県総合計画審議会

者の転出超過の要因の1つとなっている18。

これらに対応するため、二地域居住、UIJターンへの促進策等について国、地方公共団体が推進しているところであり、飯田においても、いいだ未来デザイン2028<sup>19</sup>において「高校卒業後約7割が飯田を離れる現状」があり、「学卒者の地域内 回帰・定着率」を「現状の43.9%から50.0%まで高めること」を目標としている。

例えば、SMR構想検討会において加藤委員が図19に基づき「リニア開業後のライフスタイルについて、学生はリニアを利用して通学するというイメージを持っている。若いうちに外に出るのは仕方ない。各自治体がどういう体制でUIJターンを受け入れる用意をつくるのか」また、「人材流動性は大切なポイント。若者が残っている地域には文化が育っていく。全員が地元に縛られる必要はないが、地元に残るという選択肢を持てることで、文化が育ち、それに憧れる都市生活者も出現し、Iターン・Jターンにつながっていくのではないか。」と述べている。このことも踏まえ、リニア中央新幹線をはじめとする高速交通ネットワークにより、新しいライフスタイルとして、地方部で豊かな暮らしを継続しながら都心部で学ぶ・働くという選択が可能か、他都市圏への通勤・通学に対する行政施策という観点で考察を行うこととする。

既に、新幹線の定期券購入に係る主な自治体補助として



図19 加藤委員提出資料 出典:第10回SMR構想検討会資料

は表5のような事例がある(事例については、図20のとおり定期利用の見込まれる都心から一定距離で実施している自治体を対象)。

首都圏、中京圏から同心円状の距離で検討を行う場合、都心から約150kmの飯田についても同様の距離圏に含まれることから、表5の事例を図21のとおり対象者、居住・転入ごとに分類整理し、飯田における対象者、居住・転入分類の検討資料とする。

これらの図表の体系化と合わせ、各市町における実効性 の高い補助とするための施策が行われている主な例を以下 に示す。

糸魚川市では、「糸魚川市地元で頑張る大学生等新幹線通学応援事業補助金」と称して、通学支援を行う代わりに、申請時に「市内地区公民館事業への参画・参加」、「自治会等が行う市内地域づくりプラン策定事業及び実現事業への参画・参加」、「市体育協会加盟団体の小中学生団体の指導」、「地元消防団活動への参加」、「糸魚川ジオパーク協議会の活動ボランティアや除雪サポーターへの参加」を要件として、学生時から地域とのつながり意識を醸成している。また、「地元就職等につながる情報提供のためにメールアドレス等を糸魚川市の行政機関で共有し、利用することに同意」の旨を申請書に添えており、市外大学通学によりデメリットとなる市内の企業情報収集への提供を補完することに努めている<sup>20</sup>。

一方、当補助を自治体が行う場合、費用対効果という都 市経営の角度からも有意性を検証する必要がある。 例えば、飯山市のように飯田居住の就職1年目の者に対する補助を行う場合、単身社会人1年目の平均年収約300万円<sup>21</sup>とすれば、住民税が約7万円でうち60%が市民税であることから概ね4万円が市税収入と見込まれる<sup>22</sup>。この場合、例えば通勤費補助として月3,000円をベースラインとして補助額を定める方法が考えられる。

また、熊谷市のように転入者に対する補助を行う場合、一定の収入を有する子育て世帯(扶養配偶者あり、2名児童、賃貸)が飯田に転入した場合、年収600万円では住民税が約30万円となり、概ね18万円が市税収入として見込まれることから、その住民税に呼応した施策を通勤補助または子育て・住まい等他の制度で補完する総合的な政策を検討することも可能となる。

なお、当通勤・通学支援の補助については、リニア開業を迎える9年後頃の実施となるが、現段階から、他事例における特徴・課題の研究、リニア長野県(仮称)駅へのアクセスの在り方、リニア中央新幹線中間駅の1時間1本発着ベースに見合った通勤・通学モデルの検証等を行うことが可能である。これらの研究・検証を踏まえ、市議会、地域、学生への理解促進、リニア中央新幹線の運行事業者に

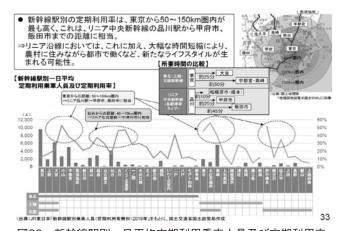


図20 新幹線駅別一日平均定期利用乗車人員及び定期利用率 出典:SMR構想検討会中間とりまとめ



図21 対象者、居住・転入分類

表5 新幹線の定期券購入に係る主な自治体補助

		[/A  中
自治体	補助対象 (主たる補助要件)	最高補助額 最長補助期間
新潟県湯沢町	・上越新幹線の通勤定期購入者で越後湯沢駅から通勤する者。 ・「湯沢町への移住促進のための住宅取得補助金」の交付申請(予定) 者または湯沢町に通算15年以上居住する(した)30歳以下の者	50,000円/月(定期購入費から通勤手当等控除後の1/2)10年
長野県佐久市	・平成29年4月以降転入(予定)者 ・新築または購入した住宅に5年以上居住しようとする者	300,000 円/年 (定期購入費から通勤手当等控除後の1/2)  3年
長野県飯山市	・北陸新幹線またはJR飯山線を利用して通勤する者 ・市内に住所を有し、かつ直近年度の卒業者	5,000円/月 2年
富山県黒部市	<ul><li>・(通勤) 新幹線通勤定期購入者で黒部宇奈月温泉駅から県外に通勤する者。</li><li>・(通学) 市在住者の大学生等で、新幹線通勤定期を購入し、黒部宇奈月温泉駅から県外に通学する者。</li></ul>	(通勤) 15,000円/月 (通学) 300,000円/年 (共に定期購入費から通勤手当等搭除後の1/2) (年数制限なし)
埼玉県熊谷市	・新築または購入した住宅に5年以上居住しようとする者 ・市内転入者であり、転入日に40歳未満であること ・熊谷駅を新幹線通勤の起点とすること	20,000円/月(定期購入費から通勤手当等招除後の1/2) 2年
栃木県那須塩原市	・市内転入者(平成26年4月1日の転入者) ・市内の自治会に加入している、または加入する見込みである者 ・新幹線通勤定期券を購入し、那須塩原駅から東北新幹線を利用して、 大宮駅、上野駅または東京駅を経由して通勤している者	10,000円/月(定期購入費から通勤手当、自己負担1万円 を控除) 平成32年3月31日まで
栃木県小山市	・平成29年4月以後に就職し、同年に学校等を卒業・修了し、かつ同年に新幹線定期券の利用を開始した者 ・平成29年4月以後に転入し、40歳以下の者または同一世帯に15歳以下の子がいる者 ・小山〜上野または東京の新幹線定期券を利用し通勤しており、かつ小山市に3年以上住むことを誓約した者	10,000円/月(定期購入費から通勤手当を控除)3年
静岡県静岡市	・市内に住みながら県外の大学等に通う30歳未満の学生 ※卒業後市内に居住し、市民税を一定期間(学校の修学年限)支払え ば返済免除	30,000円貸与(新幹線通学定期代の3分の1) 学校の修学年限
新潟県糸魚川市	・地域活動に理解のある糸魚川市在住者で、JR糸魚川駅から新幹線で大学等に通学する学生	500,000 円/年(定期券購入費の2分の1) 学校の修学年限

出典:各自治体HP(平成30年7月1日時点)

対する定期通学割引率の拡大要望等の準備を現段階から行うことには、一定の意義があるものと考えられる。

#### 4. まとめ

SMR構想中間とりまとめにおいては、「働く場や空間の多様化とあいまって、人は時間と空間をマルチに活用できるようになり、仕事のほかに、学び・憩い・地域活動といった余暇を楽しむ時間を持ち、そこで得られた経験が仕事に還元されるなど、仕事と余暇のボーダレス化が進む可能性がある。」ことが述べられている。

リニア中央新幹線やその他の高速交通ネットワーク (新幹線、高速道路、航空等)の整備によって、交流・対流に要する時間の劇的な短縮がもたらす効果を、整備時点の時間軸と合わせたビジネススタイルやライフスタイルも見据えて現段階から検討を重ねていく必要がある。

第2章で述べた通り、飯田については、他のリニア駅と 比べて、暮らしやすい環境が整っており、この特徴を生か して、更なる暮らしやすさの選択肢を増やすため、第3章 においてテレワークの導入、通勤・通学補助の施策に焦点 を当て、飯田に住み続けながら三大都市圏等とつながりを 深めることの可能性を検討した。 将来の社会経済の有り様を正確に見定めることは容易ではないが、SMRの形成によって期待される様々な可能性を 実現していくためには、中長期的な視点に立ち、今から積 極的な行動を起こす必要がある。

当研究では十分触れることができなかった、飯田の市民力を源泉とする地域コミュニティ、Society5.0が目指す革新的技術、ナレッジリンクの形成(国、大学、研究機関等の連携が強化される知的対流)、高齢者の活躍等の視点も含めて更に検討を重ねることにより、暮らし先進都市飯田の可能性は更に広がることが考えられる。

#### 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた国土交通省国 土政策局 岸弘之計画官、総合計画課 新見健吾課長補佐、 荒井勇紀係長、加納崇壮研修員、また、飯田市職員並びに 長期に渡りスーパー・メガリージョンの考え方についてご 教示いただいた国土交通省四国地方整備局 池田直太次長、 豊田市職員 清水和臣主査に深謝申し上げる。

#### 注釈 (参考文献等)

1 リニア中央新幹線整備を地域振興に活かす伊那谷自治 体会議(長野県)(平成28年2月):リニアバレー構想~信

- 州 日本の伊那谷から世界のINA Valleyへ~
- 2 飯田市 (平成29年6月): リニア駅周辺整備基本計画
- 3 国土交通省(平成27年8月14日閣議決定):第二次国土 形成計画
- 4 竹内伝史(平成29年6月): リニア中央新幹線の中間駅 整備と沿線地域開発,中部圏研究 = Chubu research quarterly:調査季報
- 5 日本経済再生本部(平成30年6月15日閣議決定):未来 投資戦略2018
- 6 国土交通省(平成30年7月26日):人口減少社会にうちかつスーパー・メガリージョンの形成に向けて〜時間と場所からの解放による新たな価値創造〜(スーパー・メガリージョン構想検討会 中間とりまとめ)
- 7 国土交通省(平成29年8月25日): スーパー・メガリー ジョン構想検討会の設置~リニア中央新幹線等の高速交 通ネットワークによる国土構造大変革の効果を如何にし て引き出すか~(報道発表)
- 8 国土交通省(平成29年8月25日):石井国土交通大臣会 見
- 9 総務省(平成25年):「平成25年 地方公務員給与の実 態 |
- 10 厚生労働省(平成29年4月~平成30年3月):正社員有効 求 人 倍率
- 11 筒井一伸・佐久間康富・嵩和雄(平成27年6月): 農村 計画学会誌 Vol. 34, No.1
- 12 総務省(平成30年7月):平成30年版情報通信白書第1部
- 13 総務省(平成30年5月):平成29年通信利用動向調査
- 14 テレワーク・デイズ事務局、総務省 情報流通行政局 情報流通高度化推進室(平成30年8月): テレワーク・ デイズ ポータルサイト
- 15 総務省(平成26年7月): ふるさとテレワーク ポータルサイト 平成26年度補正予算地域実証事業
- 16 富士見町特設サイト (富士見町役場):富士見町の魅力
- 17 長野県企画振興部総合政策課(平成27年3月): 長野県 の人口の現状分析
- 18 長野県企画振興部総合政策課(平成28年11月):第1回 総合計画審議会
- 19 飯田市 (平成28年12月): いいだ未来デザイン2028
- 20 糸魚川市 (平成28年4月): 市地元で頑張る大学生等新 幹線通学応援事業補助金交付要綱等
- 21 マイナビ (平成30年4月): マイナビ学生の窓口
- 22 国税庁:平成30年分 所得税の改正のあらまし、長野 県:個人県民税について、飯田市:市県民税(個人住民 税)のご案内



# 総合博物館におけるプラネタリウムの活用

## 一飯田市美術博物館における実写ドーム映像利用の試み一

Application of planetarium at museum: Experiment on utilization of real fulldome video at lida city museum

飯田市美術博物館、和歌山大学国際観光学研究センター 吉住千亜紀 和歌山大学観光学部 教授 尾久土正己 飯田市美術博物館 四方圭一郎 飯田市美術博物館 槇村 洋介

Chiaki Yoshizumi

Iida City Museum, Center for Tourism Research Wakayama University
Masami Okyudo

Faculty of Tourism Wakayama University, Prof.

Kei-ichiro Shikata
Iida City Museum

Yousuke Makimura
Iida City Museum

#### 【論文要旨】

飯田市美術博物館及び和歌山大学は、これまでに実写ドーム映像を利用した様々な分野のプラネタリウム用オリジナル番組を制作している。これらの番組を含め、実写ドーム映像を博物館内でより効果的に活用するために、自然及び美術分野の企画展示や常設展示に関連して、移動組立が可能なミニドームを使用した投影実験を行った。その結果、実写ドーム映像が博物館の効果的な展示として応用可能であることが確認できたが、同時に分野によってはいくつかの課題が見えてきた。

キーワード:実写ドーム映像、プラネタリウム、ドームシアター、博物館

Key Words: Real Fulldome Video, Planetarium, Dome Theater, Museum

#### 1. はじめに

筆者の尾久土と吉住は、2008年度より和歌山大学観光学部にデジタルドームシアターを導入し、実写ドーム映像(全天周映像)の研究に取り組んでいる¹。実写ドーム映像は魚眼レンズ等を使用したカメラで周囲360°(半球)の風景を撮影した映像で、その映像をプラネタリウム等のドームスクリーンに投影するものである(図1)。そのため、通常の撮影者によって意図的に切り取られた映像を平面スクリーンで見るのと異なり、視聴者自らが周囲を見渡すという能動的な行動をとることで興味や臨場感が高まり、自らの体験として記憶に残る²。研究開始当時、ドームへの投影に耐えうる4K解像度のビデオカメラは開発途上にあったが、2009年7月に奄美大島で起こった皆既日食では、奄美大島から本州4か所のドームスクリーンへ、世界初となる4Kドーム映像のライブ中継に成功した³⁴。

本稿では、これまでの実写ドーム映像に関する研究概要

と、飯田市美術博物館における映像利用の試みについて報告する。

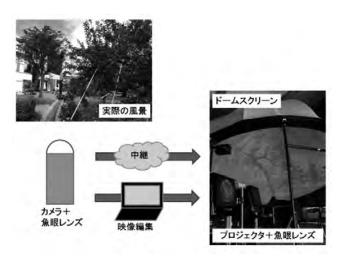


図1 実写ドーム映像の投影イメージ

### 2. 国内のプラネタリウムにおける実写ドーム映像利用の現状

現在、国内には300館を越えるプラネタリウムが稼働しており、その約40%がデジタル化している<sup>5</sup>。デジタル化により、性能の違いはあるが、全国のドームスクリーンで様々な映像を投影できるようになっているにも関わらず、実写ドーム映像による番組が制作されている例は少ない。

ここでプラネタリウムの設置目的を見ると、「科学・天文学の普及」「学校教育の補助」がやはり大きな目的であるが、続いて「青少年の健全育成」「生涯学習」「豊かな文化環境の育成」の項目もかなりの割合を占めており、さらにその半数程度ではあるが、「観光・娯楽」の項目も増えている。これに沿うのであれば天文・宇宙以外の内容の投影も可能であろう。近年、新しく開館したプラネタリウム等施設では実写ドーム映像による地域の資源をとりあげた番組を制作している例はあるが注1、残念ながら継続して制作されていない。これは内容に対する要望だけでなく、高解像度の実写番組の制作費が高額なことも一つの理由と考えられる。

#### 3. ドーム映像に関するこれまでの研究

これまでに、ドーム映像に適した(あるいは適さない)シーンの分類や、撮影手法、映像編集について様々な検討を行ってきた。研究当初の撮影機材は、カメラ、コントローラ、モニタ、録画サーバなど、総重量は100kgを越え、電源や光ファイバ配線に起因する撮影地の制限もあった(図2)が、近年、ドーム(半球)又は全球撮影用のカメラの開発、小型化、高解像度化が進み(図3)、撮影の幅が格段に広がってきた。

#### ①天文・科学教育

日食のように周囲360° すべての風景が変化するようなダイナミックな自然現象は、四角く切り取られた映像ではその原理を十分に理解できないことから、ドーム映像の利用が最適であると考え、2009年の奄美大島皆既日食でドーム映像撮影・中継・投影システムを構築した。以降、皆既日食や美しい星空、ロケットの打ち上げ(図4)など、一般的に見る(行く)ことが困難な天文・科学イベントについて撮影し、中継や録画映像として全国のプラネタリウム等施設に提供・公開している。

#### ②観光・地域再生

和歌山県及び飯田市を中心に、自然や民俗芸能(祭り(図5)や人形芝居他)、その他の地域資源の撮影を行い、番組制作等に利用し、公開している。対象は身近な町の風景や自然の他、時期が限定されているもの、今後なくなる恐れがあるもの、一般的に見る(行く)ことが困難な場所(海中等)と幅広く、映像自体が観光資源となる他、現場へ誘う観光ツールや町づくりを考えるツールとしても利用されている。



図2 初期の4K撮影システム(2009年~)



図3 小型化した4Kビデオカメラ(2012年~) (バッテリーや記録メディアも一体化し、1人で持ち運びできる サイズになった。)

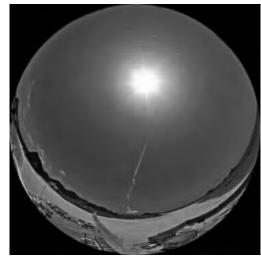


図4 H- II A24号機打ち上げ風景 (種子島) (通常のカメラでは発射されたロケットはすぐに視野から消え てしまうためロケットを追いかけることになるが、ドーム映像 では打上げから上昇まで、その場にいるのと同様にすべてをそ のまま見ることができる。)

#### ③防災教育

2011年3月11日に、東北地方太平洋沖地震の津波に伴う 東日本大震災が発生した。和歌山大学防災研究教育セン ター(当時)の要請により、車載可能な6連全方位カメラで 岩手県南部沿岸地域の被災地の状況を、発生の約50日後か



図5 霜月祭(飯田市下栗 拾五社大明神) (遠山郷の10か所の神社に伝わる霜月祭。下栗の拾五社大明神 では12月13日/14日に行われる。)



図6 東日本大震災の被災地(岩手県釜石市釜石港)



図7 全方位カメラ (車載可能な6連の全方位カメラを、屋根に固定して走行しながら撮影した。)

ら半年ごとに撮影した(図 6,7)。それらの映像から被災と復興の様子をまとめ、防災教育教材として全国のプラネタリウム等施設に提供・公開しており、飯田市美術博物館でも2017年から3月に防災教育を目的とした特別投影を行っている。



図8 スポーツの撮影例 (バスケットボール)



図9 スポーツの撮影例(体操)

#### ④スポーツ・エンターテインメント

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、スポーツ関係団体の協力のもと、バスケットボールや野球、クライミング、体操他、様々なスポーツの撮影及び投影実験を行っている。バスケットボールの例(図8)では観客席から撮影しているため、選手たちのプレイはもちろんだが、応援席の様子も同時に見ることができ、競技会場にいるかのように応援できる。体操の例(図9)では、小型カメラを使用することで、通常は見ることができない位置から撮影でき、視聴者のみならず競技関係者からも高い評価を得ている。近年スポーツバーなどでのパブリックビューイングが見られるが、全国のプラネタリウム等施設でのパ

ブリックビューイングが実現すれば誰もが気軽に様々なスポーツを観覧・体験することができ、スポーツ教育普及に関する地域格差解消の一助にもなるだろう。

#### 4. 飯田市美術博物館での試み

飯田市美術博物館のプラネタリウムは、ドーム直径12m、90席の小規模プラネタリウムで、開館当初から光学式プラネタリウムが設置されていた。老朽化に伴い2011年3月にデジタルプラネタリウム(SUPER MEDIA GLOBE-II、コニカミノルタプラネタリウム株式会社製)にリニューアルされ、現在にいたっている。

#### 4. 1 プラネタリウムでの利用―オリジナル番組の制作―

デジタル化で期待された項目の一つに、「地域の自然や文化を体感できる映像施設としてのプラネタリウム」があげられる。そこで和歌山大学と飯田市美術博物館が共同で、全国に先駆けて地域を紹介する実写ドーム映像を中心としたオリジナル番組の制作に取り組み、2017年度末までに19本の番組を制作している(表1)。番組の内容は、自然、人文、美術、その他(地域・観光)と幅広く取り扱い、各分野の学芸員の研究成果を盛り込んでおり、このような取り組みは他に類を見ない。さらに、自然・人文分野の企画展や菱田春草記念室の展示内容に合わせたオリジナル番組

表1 飯田市美術博物館オリジナル番組一覧

	1 飯田市美術博物館オリジナル番組一覧 オリジナル番組一覧		
	Chorus(コーラス) 〜遠山の森に響く歌声〜	遠山谷に暮らす鳥を紹介した番組	
	Zephyrus(ゼフィルス) ~遠山の森で見つけた宝石~	初夏の森で見られるシジミチョウの仲間ゼフィルスの生態と、夜空を 彩る星座を紹介した番組	
	御池山隕石クレーター 〜地上で見つけた宇宙の足跡〜	日本で唯一存在が確認されている御池山隕石クレーターを紹介した番 組	
自然	遠山川の埋没林 ~古代の地変を未来の警鐘に~	大地震の痕跡を残す遠山川の埋没林を紹介した番組	
	生きている大地 ~赤石山脈の中央構造線~	赤石山脈の麓をはしる中央構造線を紹介した番組	
	動物園へ行こう!	低年齢層向けに、動物たちの暮らしや動物園の役割を紹介した番組(協力:飯田市立動物園)	
	飯田さくらものがたり 〜時代を越えて、今に咲く〜	飯田・下伊那の「一本桜」と、地域の人々との関わりを紹介した番組	
	人形劇のまち飯田 ~人形芝居にみる伝統文化~	伊那谷の人形芝居から現在のいいだ人形劇フェスタまで、300年を超える伝統を紹介した番組	
	遠山霜月祭 ~太陽と命のよみがえり~	遠山郷に伝わる霜月祭を紹介した番組 ※実験的に英語版も制作した	
l <del>*</del>	山とともに 〜山林資源の宝庫遠山と森林鉄道〜	豊かな森林資源に支えられた遠山谷と、森林鉄道の歴史を紹介した番 組	
人文	飯田のりんご並木 ~子どもたちの夢と希望~	昭和22年の飯田大火からの復興とりんご並木が生まれた経緯について 紹介した番組	
	日本の博物館の父田中芳男	飯田出身の博物学者・田中芳男の生涯と業績を紹介した番組	
	風越山	平成30年に開山1300年を迎えた風越山の歴史や季節の行事など、飯田 のシンボルとしての魅力を紹介した番組	
	(2018年度制作中)南信州の煙火(仮題)	全国でも珍しい南信州の煙火の歴史と文化について紹介した番組	
<b>羊</b> 华	菱田春草 ~永遠のときを越えて~	飯田出身の日本画家・菱田春草の代表作「菊慈童」を中心に、春草の生 涯と作品の魅力を紹介した番組	
美術	菱田春草の青春 ~日本画誕生への道~	新しい日本画の創造に人生をかけた菱田春草の生涯と、盟友たちとの 関わりを紹介した番組	
その他	しらびそ高原の四季	南アルプスの山並みや美しい星空など、しらびそ高原の四季折々の魅 力を紹介した番組	
	※しらびそ高原の四季 ~秋冬編~	四季編の完成により現在は投影していない	
	天龍峡 水の旅路 〜時をこえて〜	水と大地の躍動が作り上げた景勝の地・天龍峡の魅力を紹介した番組	
	山都いいだ 〜自然と文化、そして未来へ〜	飯田の四季折々の風景や人々の暮らし、産業などを広く紹介した番組	

を投影することで、プラネタリウムを "展示を支援する ツール" あるいは "展示の一部" として活用でき、来館者 の博物館内での回遊を促している。

現在オリジナル番組は、予約投影及び一般投影の一部として投影する他、全国のプラネタリウム施設への貸し出しも行っているが、今後、より効果的な活用について学校教育や社会教育、観光などの面からも検討していく予定である。

#### 4. 2 展示での利用―ミニドームでの投影実験―

開館から30年を迎えた現在、自然及び人文分野の常設展示の更新が進んでいる中、展示スペースでもドーム映像を活用できないかと考え投影実験を行った。

①自然分野

2017年7月15日から12月24日まで開催されていた企画展「世界最南端のライチョウがすむ南アルプス」に関連したイベントとして、ミニドームでの投影実験を行った。実験で使用する番組は、筆者の四方(自然分野担当学芸員)らが調査等で南アルプスを訪れた際に小型360°カメラで撮影した映像を、吉住が編集し、南アルプスの山頂の風景を紹介する「体感!南アルプス」(約5分)を制作した。本実験では企画展入口に市販の段ボール製のミニドーム(最大幅2.6m)を設置し(図10)、誰でも無料で視聴できるようにした。また投影システムは和歌山大学の移動用小型デジタルプラネタリウム投影システム(解像度1K)を使用した。

日時:2018年11月25日、26日

観覧者数:313名

アンケート回収:206枚











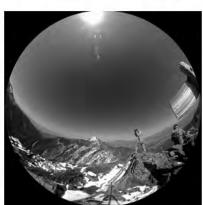


図10 (上段) ミニドームの組み立て、(下段) 投影実験の様子と番組映像の一コマ

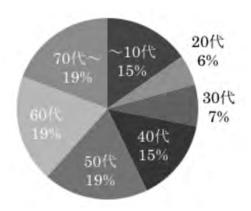


図11 投影実験参加者の年齢

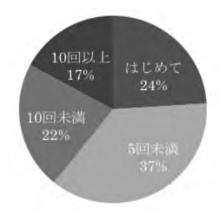


図12 プラネタリウム観覧経験回数

参加者の年代は子どもから70代以上までと幅広く、プラネタリウム観覧経験は"はじめて"と"5回未満"をあわせて61%で、ドーム映像には馴染みがないと考えられる。ミニドームによる360°映像体験が企画展にふさわしい。思うかの質問には、"ふさわしい""まあふさわしい"をあわせて95%を占め、さらに企画展の魅力を高めていると思うかの質問でも、"高めている""まあ高めている"をあわせて91%を占めていた(図11,12,13,14)。自由記述では、「すばらしい映像」「登った気分になる」「自分で登れないので見ることができてよかった」「自分でも登りたくなった」などの意見が多く見られた。また実際に登山経験のある参加者にも好評だったのが印象的だった。他にも、企画展を観覧する予定がなかったがミニドームの外観から何だろう?と思い参加した人や、映像体験後に企画展を観覧するケースも見られ、企画展の誘客にもつながっていた。

なお、撮影地は十分な登山経験が必要な山域であり、登山経験のない吉住が撮影に同行することは困難だったため、ドーム映像の撮影経験がない四方らが撮影した。撮影現場は、山頂という通常景色がある上部に空しかない特殊な状況での撮影であったが、登山に支障のないサイズ・重量で、

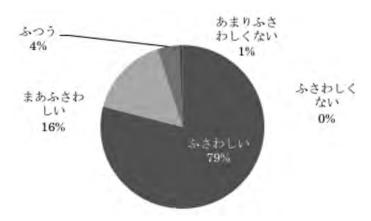


図13 ミニドームによる360°山頂映像体験は企画展にふさわしいと思うか?

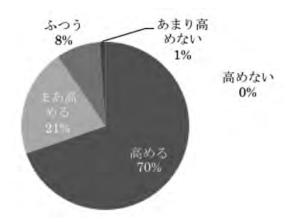


図14 ミニドームによる360°山頂映像体験は企画展の魅力を高めると思うか?

設定がほとんど不要で撮影が簡単である小型360°カメラ (図15)を使用することで、数度の撮影の中で適切な角度や対象物との距離などをつかむことができた。

#### ②美術分野

菱田春草記念室常設化に関連して、①と同様のドームスクリーン及び投影システムで投影実験を行った。本実験ではオリジナル番組「菱田春草の青春」(13分)をそのまま投影することとし、菱田春草記念室入口にミニドームを設置し(図16)、誰でも無料で視聴できるようにした。

日時:2018年1月27日、28日

観覧者数:95名

アンケート回収:42枚

参加者は菱田春草記念室及び市民ギャラリー(子ども美術学校作品展)目的の来館者が多くみられた。年代は子どもから70代以上までと幅広く、プラネタリウム観覧経験は"はじめて"と"5回未満"をあわせて54%で、約半数はドーム映像には馴染みがないと考えられる。アンケートの自由記述及び観覧の様子からは、次のようなことが読み取れた。

ミニドームは定員を最大5名としており、「家族や友人 のみで観覧出来る点がよかった」という感想が複数あった。

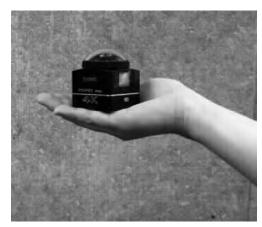


図15 南アルプス山頂の撮影に使用した小型360°カメラ (Kodak PIXPRO SP360 4K)

また、「ミニドームの外観は、特に子どもたちにとっては 入ってみたいと思わせる。まずミニドームに興味を持ち、 知らず知らずに春草を知り興味を持つことができるように なる」「プラネタリウムと違って気軽に出られるのがよい」 という意見もあった。プラネタリウムや美術展示室では静 かに見るという雰囲気があるため、子どもが騒ぐことが気 になる保護者にとっては他人を気にせずにゆっくり見られ るのがよかったようだ。

また本実験を春草記念室の前でおこなったことで、記念室の観覧がより深まったと思われるケースや、番組の観覧後に記念室の観覧券を購入されたケースもあった。

以上のようなことから、ミニドームによる番組投影は、 普段プラネタリウムを利用することのない観覧者にもオリジナル番組の存在を知ってもらい、プラネタリウム及び春草記念室を観覧する動機づけや展示の理解を支援するツールとして有効なツールになりうることが明らかになった。しかし美術部門からは、ドーム映像の最大の欠点である「中心で見ないと映像がゆがむ」点がミニドームではさらに顕著になるため、ミニドームで春草の絵を紹介することがよいかどうかについては疑問があがった。

#### 5. おわりに

これまでの実写ドーム映像に関する研究や取り組みから、 実写ドーム映像はプラネタリウムを天文教育普及施設に限 定せず、様々な映像体感施設(ドームシアター)として博 物館の中で幅広く活用できることがわかる。そのためには 地域独自のコンテンツが重要であり、分野を横断しての理 解と協力が必要だろう。また、ミニドームやさらに小さな 径のドームスクリーンは、観覧者の興味を引き、新たな客 層の開拓や博物館内での回遊行動を誘発できるだろう。

しかし、課題も残っている。観覧者の動線や非常時の誘導を考えると、本実験で使用したサイズのドームスクリー



図16 ミニドーム設置の状況(上)と番組投影の一コマ(下)

ンを常設の展示に使用することは物理的、人的に困難である。イベント等臨時的な使用、またはひとまわり小さい直径1.5m程度のドームスクリーンや、さらに小さいドームスクリーンを外から見るようなコンテンツも考えられる。また、本実験の投影には和歌山大学所有の移動用小型デジタルプラネタリウム投影システムを使用したが、小型ドームスクリーンであれば安価な市販のプロジェクタとレンズ、パソコン(ドーム映像投影用ソフトウェア)の組合せで対応できると考えられる。今後、機材の調査を行う予定である。

美術作品のようにドーム映像のゆがみが気になる分野では、特にミニドームでは映像の見せ方が重要になってくることがわかった。今後は、この点に注目した映像編集の手法を探る。

さらに、ドーム映像はVR(Virtual Reality)との互換性が高い。一部のオリジナル番組をHMD(ヘッドマウントディスプレイ)用の映像に変換し(図17)、試験的に公開する他、VR関連会社やテレビ局と協力してドーム映像とVR映像の同一コンテンツの制作も行っている。実写ドーム映像の展示での活用は、引き続き様々な可能性を探りたい。

美術博物館全体の予算削減の中、プラネタリウムでもオリジナル番組の制作は今後継続することが困難となっている。他部局との連携や外部予算の獲得を検討するともに、これまでに制作した番組の活用や、市民参加による番組制

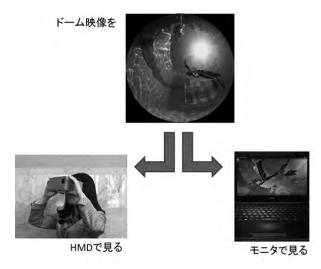


図17 ドーム映像のVR活用イメージ

作、ドーム映像コンテストなど、様々な方向性で実写ドーム映像の魅力を発信し、関心を高める取り組みを考えている。

世界的に見てもプラネタリウム密集国といえる日本において、しかし地方の小規模なプラネタリウム等施設の多くが予算や人的な課題を抱えている。飯田市美術博物館の試みに見られるように、プラネタリウム本来の天文教育普及にとどまらず様々な活用を検討することが、課題の解決への糸口になれば幸いである。

#### 注

1. 実写ドーム映像を主としたプラネタリウム番組の例としては、2016年4月にオープンしたセーレンプラネット(福井市自然史博物館分館)制作の、地元で産出する笏谷石をテーマにしたオープニング特別番組「ふくいブルーは語る」や、2016年4月にリニューアルオープンした黒部市吉田科学館制作の、地元の立山黒部ジオパークをテーマにした「剣の山」(2017年11月公開)などがある。

#### 参考文献

- 1 吉住千亜紀、尾久土正己:「観光デジタルドームシア ターシステムの構築とその実践」『観光学』第3号, pp.31-36. 和歌山大学観光学会 (2010.7)
- 2 尾久土正己、硲間晴香、中串孝志、吉住千亜紀:「観 光ドーム映像の視線分析」第10回観光情報学会全国大会 , pp.50-51 (2013.6)
- 3 尾久土正己:「デジタルドームシアターと2009年皆既日 食中継」SCAT LINE (財団法人テレコム先端技術研究 支援センター広報誌) No.79, pp.8-9 (2009.7)
- 4 尾久土正己:「4K映像システムを使った皆既日食の全 天投影」映像情報メディア学会誌 Vol.63 No.10, pp.1385-1389 (2009.10)
- 5 「プラネタリウムデータブック2015」日本プラネタリウム協議会(2016.10)

# 人形劇芸術を通した国際文化交流体験とその発信について

## 一飯田市における2018年人形劇の友・友好都市国際協会総会から一

Intercultural Exchange through Puppet Theaters: From the AVIAMA General Assembly, 2018 in IIDA

津田塾大学総合政策研究所 客員研究員 大島 幸 津田塾大学総合政策学部 教授 伊藤由希子

Sachi Oshima

Research Fellow, Research Institute for Policy Studies, Tsuda University Yukiko Ito

Professor, College for Policy Studies, Tsuda University

キーワード: いいだ人形劇フェスタ、国際交流、英語プレゼンテーション Key Words: lida Puppet Festa, Intercultural Exchange, English Presentation

#### 1. はじめに

2018年4月12日、長野県飯田市と津田塾大学は、「文化、教育、学術、産業等の分野で相互が持つ資源を有効活用し、連携することにより、地域の一層の活性化及び人材の育成に寄与すること(津田塾大学, 2018, p. 4)」を目的とし、包括連携に関する協定を締結した。

飯田市は人形浄瑠璃の歴史が古く、1979年に「人形劇カーニバル」を発足して以来、毎年夏に国内外の劇団を招へいし、日本最大の人形劇フェスタ「いいだ人形劇フェスタ」を開催していることで知られている。2018年は同フェスタ40周年を記念し、期間・招へい劇団数など、通常に比して規模を拡大した「世界人形劇フェスティバル」が開催された。

津田塾大学は、協定に基づく最初の取り組みとして、「世界人形劇フェスティバル」と同時開催された「人形劇の友・友好都市国際協会(Association Internationale des Villes Amies de la Marionnette、以下AVIAMAと記載)第7回総会」の機会を捉え、歓迎レセプションにて総会参加都市を

紹介する英語プレゼンテーション(資料参照)を行うと共に、総会参加者の通訳アテンドを担った。本稿では、これらAVIAMA総会に関連した津田塾大学の取組とその経緯について報告する。

#### 2. AVIAMA総会に向けた取組の経緯

包括連携に関する協定締結以降、8月10日~12日の AVIAMA総会に向けた取組の経緯は表1のとおりである。

#### 2. 1 牧野市長、原田実行委員長講演会(4月20日)

牧野光朗飯田市長から、地元の中学生や高校生が街づくりの課題に取り組む「地域人教育」プログラムを紹介頂いた。原田雅弘いいだ人形劇フェスタ実行委員長からは、飯田では、小学生から当然のように、人形劇を「観る・演じる・支える」活動に参画することを紹介頂いた。お二人のご講演を通じ、若い年代からの当事者意識の醸成や、地域文化との接点が飯田の魅力であることが強く印象付けられた。

#### 表 1 取組の経緯(2018年4月~8月)

4月12日	飯田市と津田塾大学との包括連携に関する協定締結	
4月20日	包括連携に関する協定締結記念講演会	
6月2日~3日	津田塾大学「千駄ヶ谷キャンパス祭」人形劇招へい(ましゅ&Kei、劇団ふたご座)	
6月17日~19日	飯田市スタディ・ツアー	
6月29日	江戸糸あやつり人形「一糸座」訪問	
7月5日	公益財団法人現代人形劇センター訪問	
7月10日	AVIAMA通訳アテンド説明会	
8月10日~12日	AVIAMA総会本番(英語プレゼンテーション・通訳アテンド)	

#### 2. 2 プロジェクトメンバー決定

飯田市との協定締結および2.1に記した講演会を経て、津田塾大学全学を対象に公募した結果、12名(総合政策学部9名、学芸学部3名)のプロジェクトメンバーが決定した。人形劇芸術を専攻している者や、人形劇に関する知識がある者はおらず、学生の参加理由は「地方の活性化に興味があった」が約80%を占め、次に「英語を実践的に使ってみたかった」が続いた。これは、社会学・経済学・法学・データサイエンスといった分野を学ぶ総合政策学部に所属している学生の参加が多かったという、学部の特性に起因するところが大きいと考えられる。

総合政策学部は千駄ヶ谷キャンパス(東京都渋谷区)、学芸学部は小平キャンパス(東京都小平市)に位置しており、物理的に離れていたが、キャンパス間のテレビ会議システムを活用し、全体ミーティングを重ねた。

#### 2. 3 飯田スタディ・ツアー(6月17日~19日)

スタディ・ツアーは通訳アテンドの下見としての市街訪問と、飯田の魅力を幅広く知る機会を兼ねて実施された。

津田塾大学教員2名・津田塾大学学生12名・名古屋大学学生3名が参加した。市長講演、棚田(よこね田んぼ)保存などの地区活動の紹介・農家民泊体験・いいだ人形劇センター訪問・黒田人形浄瑠璃伝承館訪問・水引体験等を経て、地元の方々の熱意と思いやりに感化された滞在となった。最終日には、これからの飯田の街づくりにむけ、短期・中期・長期にできることを、それぞれ二人一組のグループで発表を行った。

#### 2. 4 AVIAMAプレゼンテーション準備

飯田市と津田塾大学との協議の結果、AVIAMA総会出席者が参集するレセプションという性格から、AVIAMA総会の参加都市(オブザーバー都市を含む8カ国16都市)の人形劇文化を学生の視点から調査・紹介してはどうか、という基本コンセプトが決定した。他方、上記2.2のとおり、学生に人形劇を専攻している者はおらず、プロジェクト開始段階では「人形劇は幼少期に観て以来、触れていない」と言う者が大半を占めた。そこで、学生が専攻外のトピックについても主体的に外国の資料から調査をし、英語プレゼンテーションを完成することを可能にするため、教員側で以下のステップを設定した。

#### |ステップ 1|: Background knowledgeの醸成

Background knowledgeとは、学習者が「文章を解釈・理解する際に活用する一般的、文化的、または特定のトピックに関する事前知識」(Grabe & Stoller, 2011, p. 284)を意味する。英語のReadingまたはListeningにおいて、学習者にその事前知識が全く無い場合、文章理解は非常に困

難または不可能と考えられており、指導過程においても Reading/Listening活動を行う前に、学習者のbackground knowledgeを醸成することが有効とされている(Grabe & Stoller, 2011; Richards & Burns, 2012など)。

学生が各国・都市の人形劇について調査するにあたり、日本語・英語の資料やウェブサイトを見たり、専門家や関係機関から話を聞いたりすることが想定された。しかし、学生が人形劇について全く知識の無い状態で調査を始め、英語プレゼンテーションに耐えうる内容にまで理解を深める困難さは想像に難くない。そこで、background knowledge醸成の観点から、以下2箇所への訪問機会を設けた。

はじめに、「江戸糸あやつり人形一糸座(以下、一糸座と記載)」稽古場を訪問した。江戸時代から現存する唯一の糸操り人形劇団「結城座」の流れをくむ劇団であること、AVIAMA参加国であるチェコほか欧州各国との共同制作の実績を有していること、そして2018年「世界人形劇フェスティバル」での公演が決まっていたことが、訪問理由となった。

一糸座では、古典から現代作品に至るまで、様々な作品で使用される糸操り人形を見学し、代表の結城一糸氏から、日本の糸操り人形の歴史、結城座および一糸座の歩み、これまで実施した国際共同制作や海外公演、今後取り組んで行きたいこと等の説明を受けた。結城氏が人形を操る手板を手に取った途端、人形に突然命が吹き込まれるさまを間近で見た学生は、感嘆の声をあげた。また実際に学生が人形を手にとり、手板の操作を経験することで、人形劇・人形遣いの専門性を体感することとなった。

次に、現代人形劇センターを訪問した。日本を代表する人形劇団「ひとみ座」内に事務所を構えており、古典から現代に至る日本の人形劇の普及活動や、海外の人形劇の招へい・調査研究を行っている。国内外の人形劇について網羅的に情報を有する機関であり、2018年の「世界人形劇フェスティバル」では、ラオスの現代人形劇アーティストを飯田市に招へいしてワークショップを実施するなど、飯田市との関わりも深いことから訪問先とした。

現代人形劇センターでは、日本の人形劇の歩み、海外の人形劇の特徴、同センターの方々がこれまでに携わった国際共同制作や海外公演の様子等の説明を受けた。学生からは人形劇に対する基礎的・全般的な質問から、2018年AVIAMA総会に参加する各国の人形劇文化に特化した質問に至るまで、細かな質問をし、その一つ一つに詳細な説明や情報提供、アドバイスを受けた。

#### ステップ2:調査についての指導

学生一人あたり2~3都市の担当を割り振り、学生による 調査を開始した。 今の学生にとって最も身近な「調査」手段はインターネット検索であり、事後アンケートでは100%の学生が「インターネットから情報(英語表記)を得た」と回答している。特に海外の人形劇情報については、現地語と英語のバイリンガル表記になっているウェブサイトが多く、学生は情報を得るというタスクのため、自ずと英語Readingをせざるを得ない環境に身を置いたことになる。

他方、上記ステップ1に記した訪問経験から、実際に足を運んでこそ得られる情報があることに気づいた学生もおり、各自で関係機関を訪問してみたいとの希望も寄せられた。そこで教員より、希望のある学生に対しては各国文化機関など候補となる訪問先情報の提供も行った。その結果、学生独自でアポイントメントを取り、チェコセンター(在京チェコ大使館内)や喜之助人形劇フェスタ実行委員会(岡山県瀬戸内市)への訪問も実現している。

#### ステップ3:英語プレゼンテーション原稿作成指導

ステップ2の調査と並行して、英語プレゼンテーション 原稿の作成を開始した。調査担当都市ごとに原稿を仕上げ た後、7月下旬には全都市の原稿を一つに繋げ、全体の流れ を把握した上で、プレゼンテーション冒頭と締めくくり部 分も学生により考案し追加するよう指導した。

英語プレゼンテーションという性質上、この段階では英 作文 (Writing) が主な活動と言えよう。都市別の原稿作成 段階では、都市ごとに個別指導 (individual conference) の時間を設け、「調査できた内容は何か、不足している情報 は無いか、調査内容をどのように構成するか」といった content (内容) 及びorganization (構成) に関する指導を 主に行った。その後、学生が作成した各都市の原稿案に対 してはgrammar (文法)の観点を含めた指導を行った。全 都市の原稿を一つのプレゼンテーションとして統合した後 は、「Googleドキュメント (google docs)」ファイル共有機 能を活用した。これはウェブサイト上、特定のメンバー間 でファイルを共有し、同時編集・共同作業が可能となる機 能であり、教員・参加学生全員で原稿を共有し、全員が同 じファイルを随時確認し、編集・改善を加えていった。教 員からのフィードバックは「コメント」の形で複数の学生 に対して同時に行い、学生が随時Reviseする形を取った。

また、観客の視覚に訴えるため、原稿に即したスライド 作成を同時に進めていたことも特記しておきたい。観客を 引き込む工夫・観客の理解の助けになる工夫を学生に求め たところ、所々にクイズを入れたり、各国・都市の人形劇 の動画を挿入したりする段階から、徐々に学生のアイディ アが続々とスライドに反映され始め、最後にはいいだ人形 劇フェスタのマスコット「ぽぉ」が世界各国の人形劇文化 を体験していくという統一感のあるスライドが完成した。 ステップ4: 英語プレゼンテーション (Speaking) 指導

最終段階として、プレゼンテーション指導を大学内で3日間・計12時間設けた。立候補により選出された発表者5名について、発音やアクセントの修正、発話スピードやポーズの入れ方などの指導を行った。台湾・韓国の人形劇に関する固有名詞の発音・アクセントについては、実際に台湾・韓国の芸術文化に携わっている専門家と学生を電話で繋ぎ、電話で直接の発音指導を仰いだ。

発音指導に加え、観客を意識した発表原稿の修正や演出も検討した。観客の立場になって聴いた(Listeningをした)時に分かりにくい表現は、教員だけでなく学生同士でも互いに確認し、スライド追加や原稿修正を行った。また観客を飽きさせない工夫として、各都市の名前をコールして、来場者に歓迎の拍手をする演出もこの段階で決定した。

#### 3. AVIAMA総会当日(8月10日~12日)

#### 3. 1 英語プレゼンテーション (8月10日夜)

8月10日午後に会場(飯田市美術博物館)に到着し、事前リハーサルを行った後、本番を迎えた。立食形式のレセプションパーティーにおいて、30分弱の英語プレゼンテーションを行うことは、観客の注意をどこまで引き付けていられるかという観点から少し不安もあったが、発表者の口調は練習時以上に観客に語りかけるものとなっていた。また、各都市の名前をコールした際、呼ばれた都市の参加者が"Here!"と応えてくれたこと、クイズを出す場面で観客から大きな声で反応があったことも、発表者のパフォーマンス維持・向上に寄与した一因と考えられる。

事後アンケートにおいて、周囲から何かコメント・感想などを頂いたか聞いたところ、「AVIAMAの会長さんにありがとうと言ってもらえた」、「Charleville-Mézières市長から"プレゼンを聞いたよ、良かったよ"とのお言葉を頂いた」、「Tolosa市、Sevilla市の人たちから御礼と"楽しかった"という言葉を頂けた」などの、好意的なフィードバックを得た由である。また、教員に対しても、AVIAMA関係者や国際人形劇連盟日本センター(日本UNIMA)など、人形劇を専門とする方々より「人形劇の関係者でない立場から、人形劇を語ってくれる機会がなかなか無いので貴重なプレゼンテーションだった」との感想が寄せられた。

#### 3. 2 通訳アテンド

上記3.1に記したプレゼンテーションの時間以外は、学生 は各担当都市に分かれ、AVIAMA総会参加者が飯田市街 観光や文化体験をする際の通訳アテンドを担った。

AVIAMA総会参加者には、必ずしも英語が堪能ではなく、母語(スペイン語、フランス語など)での会話を要した方もいたため、英語の活用を期待していた学生にとって

は、当初「予想していたよりも英語が使えない」という印象を持った者も居たようだった。しかし、そのような学生も日を追うごとに、「身振り手振りで必死に伝えることで、コミュニケーションが取れることに気づいた」とコメントしており、nonverbal communicationの価値を体感する貴重な経験となったことが分かる。

英語でコミュニケーションが取れた学生からは、「リサーチしていた都市だったから話すネタがあり、リサーチでは知りえなかったことを直接専門家から聞くことができた」という、プレゼンテーション準備を通して、人形劇やAVIAMA参加都市についての知識を得ていた(background knowledgeを醸成できていた)ことへの効果に言及した感想が寄せられた。

#### 4. おわりに

飯田市と津田塾大学の協定に基づく最初の取り組みである、「2018年世界人形劇フェスティバル」及び「AVIAMA総会」に関連した取組とその経緯について述べてきた。

人形劇についての事前知識を全く有していなかった学生にとって、決してハードルが低いタスクではなく、特にプレゼンテーション準備を間に合わせることに必死だった感はある。しかし、いざ終わってみると、「自分たちはもっと出来る。次はもっと工夫したい。」という前向きな自信を持つ結果になったようだ。

具体例として、学生からのコメントを以下に引用する。「リサーチした内容を専門家と会話の中で話して新しい発見をしたり、その国のことを知ったりすることがとても意義のあることだと感じた。引き続き、今後もこのような国際交流の会議の場に参加したい。準備の段階で一糸座にお話を伺えたのはとてもリアルだった。リサーチの仕方からプレゼンの仕方からもてなす方法から色々なことを学ばせてもらった。また現地では色々な方と親睦を深められたり、飯田の街を少し内側から観察できたりして、とても面白かった。AVIAMAでの活動で学んだことと経験は正直、色々なことに活かせると思う。」

今後は、プレゼンテーション内容を幅広い形で対外的に 発信し活用したい。また人形劇の魅力を学生の目線・立場 から伝えるとともに、日本の人形劇文化の推進者としての 飯田市の活動に積極的に参画したい。

#### 参考文献

Grabe, W. & Stoller, F. L. (2011). *Teaching and researching reading* (2nd ed.). London: Routledge.

Richards, J. C. & Burns, A. (2012). *Tips for teaching listening: A practical approach*. NY:Pearson Education.

津田塾大学. (2018).「飯田市との包括連携に関する協定締結」『TSUDA TODAY』第107号, p.4.

※参考文献省略(津田塾大学「総合政策研究所報」に収載 予定、ならびに執筆者からの提供可能)

## 1. オープニングクイズ

What puppet show is this? Some of you might have already heard this story and the music associated with this story. Exactly! This is "The Nutcracker." It is one of the most well-known stories with puppets. The music associated with Nutcracker is frequently broadcast on TV, and its ballet show has been popular in Japan for a long time. How about in your regions?

この人形劇は、何というタイトルでしょう?この物語や、この音楽を耳にしたことがある人もいるはずです。その通り!「くるみ割り人形」です!世界で最もよく知られている人形劇の一つですよね。日本では、この演目に関連する音楽は度々テレビでも放送されますし、バレエの作品としても長い間人気を誇っています。あなたの国や地域では、いかがですか?

#### 2. 津田塾大学の紹介

We are students of Tsuda University in Tokyo. It takes about 4 hours by bus from our school to get here, IIDA. Although we live a bit far away, we are the ones who are fascinated with this puppet festival, especially with such a lot of puppet performances coming from all over the world. On behalf of our university, we would like to welcome you here today.

私たちは東京の津田塾大学の学生です。私たちの学校から飯田市に来るには、バスで約4時間もかかります。いささか遠い距離ではありますが、私たちは人形劇フェスティバル、特にこのような世界中から様々な人形劇が集まる機会に強く関心を持っています。大学を代表して、私たちが皆さんを歓迎いたします。

#### 3. プレゼンテーションの目的

We are going to talk about the characteristics of a variety of puppets and their history in each of the participating region. Through this presentation, we hope that this interesting puppet culture can be passed on to future generations. Here, we are looking forward to finding some hints which are useful for more active collaboration between puppet cities. So, let's enjoy puppet journey with Poh, who is the mascot of Iida Puppet Festa. And let's find some seeds for further development in the puppet's future together!

私たちがこれから話すのは、各都市の人形劇の多様性とその歴史についてです。私たちはこのプレゼンテーションに、人形劇が次の世代につながっていくように、との願いを込めました。人形劇の都市同士がより活発に連携できるようなヒントが見つけられればと思っています。では、いいだ人形劇フェスタのキャラクター、ぽぉと一緒に、人形劇の旅に出かけましょう。そして一緒に、人形劇の未来の発展につながる種を見つけていきたいと思います。

#### 4. シャルルヴィル・メジェール市 (フランス)

Charleville-Mézières is located in the north of France. It is a commune which has made a great success by puppetry collaboration. You cannot talk about this commune without mentioning Ecole Nationale Supérieure des Arts de la Marionnette (ESNAM) founded by Jacques Félix. Students from all over the world come to ESNAM to pursue high quality puppet study. That is why ESNAM is a very competitive school. Do you know how difficult it is to get in? Let's have a guess on the acceptance rate from 3 choices!

A. 4 times/B. 7 times / C. 10 times The answer is···C. 10 times!

シャルルヴィル・メジェール市は、フランスの北部に位置しています。ここは人形劇の活動を通して大きな成功をおさめた地方自治体です。この都市のことを話すには、ジャック・フェリックス氏が設立した国立人形劇高等学校、ESNAMの話は外せません。世界中の学生がハイレベルな人形劇の勉強を求め、このESNAMにやってきます。それにより、非常に倍率が高い学校になっているのです。どれくらい難しいか知っていますか?三つの選択肢の中から、この学校の倍率を当ててみてください。

A 4倍 / B 7倍 / 10倍 答えは…なんとCの10倍です。

Why are so many students coming to this school even though it is hard to enter? This is because Charleville-Mézières welcomes various traditional puppetry techniques of the world. They have even learned from Japan! Now students in ESNAM can learn Bunraku techniques in a special lecture taught by Japanese puppeteers. In the 1990s, Japanese Bunraku technique was introduced to the West. Inspired from the technique,

Western puppeteers' interests moved from "how to perform by USING puppets" to "how to perform WITH puppets."

ここまで入学が難しいのに、なぜ多くの学生が目指すのでしょうか。それは、シャルルヴィル・メジェール市が、世界中の人形劇の様々な伝統技術を受け入れているからです。その中には日本の技術も含まれています。ESNAMの生徒は、日本の文楽の技術を特別講義の中で学ぶことができます。1990年代、日本の文楽の技術が西洋に広まっていきました。ここから、「人形をどう見せるか」ではなく「人形とどう演じるか」に関心が置かれるようになりました。

#### 5. プルゼニ市 (チェコ共和国)

Mr. Jakub, who is from the Czech Republic, is the manager of the ALFA Puppet Theater. Since 1970, the theater has undertaken over 100 foreign tours, mostly in the last ten years.

本日チェコからいらっしゃっているジャコブさんは、ALFA人形劇場の支配人です。1970年以降、特にここ十年の中で、海外公演を100回以上実施しています。

They are also proud of their traditional puppets. The Czech Republic was dominated by neighboring countries such as Germany and Austria in the past. From the 16th to19th century, the use of Czech language in public space was even banned. However, in puppetry, the use of Czech language was still allowed. Why? That is because the rulers did not think that puppetry had any political significance. Therefore, they disregarded the content of puppet shows. Since this era, political satire and social messages have been incorporated into Marionette, using Czech language-specific phrases that are unknown to people from Germany and Austria.

チェコの人たちは自分の人形劇に誇りを持っています。 チェコには、ドイツやオーストリアなどの近隣諸国から支配されていた過去があります。16世紀から19世紀まで、公共の場でチェコ語を話すことは禁じられていました。しかし、人形劇の中ではチェコ語を使うことが許されていたのです。なぜでしょうか。人形劇はたいして政治的な影響力が無いと支配者たちが思ったからです。そのため人形劇の中身を重要視しませんでした。この時代から、チェコ語を用いた政治の風刺・社会的メッセージが人形劇に組み込まれるようになりました。

"Kašpárek" has been very popular among people all over the city since that time! Clowns called Kasparek trick rivals with a sense of humor associated with honesty. It is indispensable for political satire. He may encourage everyone to overcome any difficulties in this movie. I want Kasparek to continue to perform in this era. He is still a very reliable hero!

カシュパレックは、その時からチェコ中で人気の人形です。カシュパレックと呼ばれる道化が、どこか正直さを感じさせながらも、ライバルをトリックに陥れていきます。 政治の風刺には不可欠な存在でした。彼はこの動画の中で、 どんな困難にも立ち向かえるように、みんなを応援しています。今の時代にもいてほしい、頼れるヒーローなのです。

#### 6. セビリア市 (スペイン)

This is a very interesting puppet figure in history. Seville was one of the most important cities for centuries. People could trade food and resources there. So, this city has appeared in many works. Here's the question. Which is the correct title of this opera?

A. The Barber of Seville/B. The Florist of Seville/C. The Tailor of Seville

The answer is A, "The Barber of Seville". The puppets of this picture were on air in 1994 and the show was broadcast by BBC. Seville has formed a special tie with the United Kingdom through puppets.

人形劇が歴史の一面を持っているのは、実に興味深いですね。セビリア市は何世紀にも渡って最も重要な都市の一つでした。人々はこの場所で食べ物や資源の交易を行っていました。そのため、この都市は多数の人形劇作品で物語の舞台となっています。ここで問題です。このオペラのタイトルはなんでしょう?

A セビリアの美容師/B セビリアの花屋/C セビリアの 仕立て屋

答えは Aの『セビリアの美容師』です。この画像は1994年にBBCで放送されました。セビリアは人形劇を通じてイギリスと特別な絆を結んだのです。

We can feel the power of puppets. Puppets can connect the city and the world. Another example in Seville is the puppet festival, like the one we have here, in IIDA. Similarly, Seville has also held feria internacional del Títere de Sevilla for 38 times, and this festival was joined by Argentina, Chile, Colombia, Italy, Portugal and Spain this year. These puppets were used in this festival, and this is the image of Teatro Alameda.

人形の力を感じることができます。人形は都市と世界を 結びつけることができるのです。今この飯田市で開催され ているような人形劇フェスティバルも例として挙げられま す。セビリアでも、セビリア国際人形劇祭という人形劇 フェスティバルがあります。この人形劇フェスティバルは すでに38回開催されており、今年はアルゼンチン、チリ、 コロンビア、イタリア、ポルトガルそしてスペインが参加 しています。これらの人形はこの人形劇フェスティバルで 実際に使われました。そしてこれがアラメダ劇場の写真で す。

#### 7. トローサ市 (スペイン)

Like Seville, Tolosa, another Spanish city also held a puppet festival last year. The festival was named "Titirijai" and was joined by Argentina, the Canary Islands, Brazil, Italy, Norway, Spain and Switzerland. This is the pamphlet. Look at these sentences. There are two languages, aren't there? From the special use of the Basque language in it, we can sense Basque people's deep love for their land.

セビリア市のように、トローサ市という別のスペインの都市にも人形劇フェスティバルがあります。その人形劇フェスティバルは「ティティリハイ」と呼ばれ、アルゼンチン、カナリア諸島、ブラジル、イタリア、ノルウェー、スペインそしてスイスが参加しました。これがその時のパンフレットです。文章をよく見てみてください。2つの言語が書かれていませんか?トローサが位置するバスク地方の言葉であるバスク語がこのように大切に使われているところからも、バスクの人々の郷土愛が伝わってきます。

Japanese participants have also taken active roles in puppet festivals. For example, at Titirijai of 2010, Hitomiza performed "Otome Bunraku," which is played only by women. At the UNIMA World Puppet Festival in Tolosa 2016, Kakashiza played "Hand Shadow ANIMARE" using only their bodies and shadows.

日本からの参加団体もこの人形劇フェスティバルで重要な役割を担っています。例えば、2010年のティティリハイでは、ひとみ座が女性のみが人形を操る「乙女文楽」を上演しました。2016年のトローサUNIMA国際人形劇フェスティバルでは、かかし座が自身の身体とその影のみを使った『ハンドシャドー・アニマーレ』を披露しました。

Why can they host such great international puppet festivals successfully? One of the reasons is the support from the Puppet Center. Tolosa Puppets International Center (TOPIC) is the only integrated center dedicated to puppetry in Europe. The international puppetry festival, Titirijai started about 30 years ago. Since then, a lot of knowledge of puppetry has been one of the assets of the city. This is a promotion video by TOPIC. TOPIC has an

important collection of puppets which are from different countries and handled by different techniques. Tolosa has taken a key role in preserving the materials and traditions of puppets.

なぜトローサ市はこのような素晴らしい人形劇フェスティバルを成功させることができたのでしょうか?その理由の一つは人形センターの支援にあります。トローサ人形国際センター(TOPIC)は、ヨーロッパの人形劇専門のセンターです。国際人形劇フェスティバルであるティティリハイがおよそ30年前に始まりましたが、その頃からトローサには人形劇の知識が蓄えられ始めました。現在では都市の資産の一つとも言えるこの知識を集約させて作られたのがTOPICです。TOPICのプロモーションビデオをお見せしましょう。TOPICには様々な国から寄贈された、様々な操作方法を要する人形の重要なコレクションが展示されています。トローサは人形の素材や伝統を継承していく上で重要な役割を果たしています。

#### 8. ビャウィストク市(ポーランド)

Białostocki Teatr Lalek, BTL, the oldest puppet theater in Poland, has sought innovation in making puppet shows. BTL started as an amateur puppet theater and has grown to one of the leading puppet theaters in Poland. In 1960s, BTL was managed by a producer named Joanna Piekarska. Her successor, Krzysztof Rau took over the job, and made efforts to expand the theater's repertoire not only for children but also for adults.

ポーランドで一番古い人形劇場Białostocki Teatr Lalek (BTL) は人形劇作りにおいて常に革新を追求してきました。BTLはアマチュア人形劇団として始まり、現在ではポーランドを代表する人形劇団となっています。1960年代には、ジョアンナ・ピカルスカがBTLを運営していましたが、その後、クリストフ・ロウが引き継ぎました。当時人形劇は子供のための娯楽でしたが、クリストフ・ロウは大人向けの人形劇を制作することで劇場のレパートリーを広げました。

In 1972, BTL organized the first nationwide competition of solo puppet performance in Poland. Thanks to the big success of the competition, it became the International Festival of Puppeteers.

BTL has continued its creative output. In addition, BTL has been very energetic to realize international collaboration and to hold workshops for artists.

1972年、BTLはポーランドで初めてソロの人形遣いによる大会を開きました。大成功に終わった大会は国際フェスティバルになりました。BTLは現在も創造的な作品作り

を続けています。さらに、国を越えた共同制作の実現や、 人形劇アーティストのためのワークショップ開催など、エ ネルギッシュな活動をしています。

#### 9. トゥルナイ市 (ベルギー)

Now, let's conclude the European area with Tournai from Belgium! Tournai is one of the oldest cities in Belgium. It is located near the border between Belgium and France. A traditional puppet called poriginelles has been developed since Savoy Jorio Family moved there in 1850. In the past, poriginelles was just a local attraction. But today, Center Marionnette Federation Wallpnie-Bruxelle was established to bring the puppet culture into the digital age and to pass the torch to the next generation among global audience.

それでは、ヨーロッパの最後はベルギーの都市、トゥルナイで締めくくりましょう!トゥルナイはベルギーの最も古い都市の一つで、ベルギーとフランスの国境付近に位置しています。1850年、サヴォイ・ジョリオ家がこの地に移住したことをきっかけに、ポリジネルと呼ばれるベルギーの伝統的な人形劇が発展してきました。ポリジネルは地元住民を観客の対象にした小規模な人形劇でした。しかし、現在ではウォルプニー・ブリュッセル人形劇センターが設立されたことで、最新の科学技術と融合した新たな人形劇文化づくりが行われており、ベルギーの人形劇はより世界の観客を対象にした文化へと変化を遂げています。

The center has more than 2,500 collections of puppets from all over the world. In addition, the center is the member of the Numeric's Art Puppetry Project which is co-funded by E.U. In this project, Tournai invites foreign puppet artists in order to create new style of puppets that combines puppet art with digital art.

このセンターは、全世界から集めた2500体もの人形コレクションを有しています。また、EUが共同出資する「ニューメリック・アート・パペットリー・プロジェクト」に参加する団体の一つでもあります。国外の人形芸術家を招へいし、伝統的な人形芸術と最新のデジタルアートが融合した、全く新しい人形劇を世に送り出しているのです。

Also, we want to introduce the cute Belgian puppet character called "Bla-bla." From 1994 to 2010, "Ici Bla-bla," Belgian TV program was broadcasted by RTBF, a public broadcasting service. Bla-bla is name of a cheerful puppet who lives in a computer. Bla-Bla responds to all, sometimes crazy requests from the various characters who come to ask for help. Tournai tries to attract new

audience in unique ways.

Now let's find out more about different approach in Asia!! ここでさらに、ベルギーの可愛いパペットキャラクター、「ブラブラ」を紹介したいと思います。1994年から2010年にかけて、ベルギーのテレビ番組、『ここにブラブラがいるよ』が公共放送RTBFで放送されました。ブラブラはコンピューターに住む陽気な人形です。ブラブラはどんな質問にも対応し、彼に助けを求めにきた多様なキャラクターの時におかしな要求にも答えます。このように、トゥルナイは独自の方法で新しいファンを惹きつけようとしています。それでは、アジアではどんな人形劇の取り組みがなされているのでしょうか?さらに見てみましょう!

#### |10. 「ぽぉ」の旅 ~ヨーロッパからアジアへの移動~|

Next area is Asia, a region where puppet culture collaborates with modern technologies like in Tournai and they are popular among the youth. Let's check it out!

次の地域はアジアです。ベルギーのトゥルナイ市のように、アジアでも人形劇文化が現代のテクノロジーと融合しています。また、アジアの人形劇文化は若者にも人気です。 詳しく見ていきましょう!

#### 11. 雲林縣と高雄市(台湾)

Yunlin county and Kaohsiung city are well known for their puppet culture in Taiwan. Their puppet shows are referred to as "布袋劇(Puutaishi)" and "皮影劇 (Piinshi)." Let's find out about their characteristics!

Puppets in Taiwan has a long history. It has started when the Chinese imperial examination, a selection scheme to become a civil servant, was still in practice.

雲林縣と高雄市は、台湾において人形劇文化で有名な都市です。「布袋劇」と「皮影劇」が代表的です。それぞれの特徴に迫りましょう!

台湾の人形劇には長い歴史があります。科挙が実施されていた頃から始まりました。

Puutaishi was started when students who failed the exam tried to put words in puppets' mouths in order to mock social conditions and politics with irony at that time. Puppeteers used to mainly have street performance. After World War II, since such open street style was forbidden by the government, puppeteers were forced to build theaters for their performance. After that the sales of puppet shows have increased remarkably, puppets theaters in Taiwan started to show on topics related to humanity, resentment, gratitude and revenge and so on. Such topics have successfully grabbed hearts of many

audience.

布袋劇は、科挙に落ちた学生が当時の社会的情勢や政治への不満を、人形の口を使って、皮肉を込めて述べるために始まりました。かつて人形遣いは路上でパフォーマンスをしていました。第二次世界大戦後、政府によって路上での上演は禁止され、彼らは人形劇を続けていくために劇場を建てざるを得なくなりました。以降、台湾での人形劇は人間性、恨み、感謝、復讐などを題材にした作品を上演するようになり、人形劇の収益は著しく上がりました。それらの人形劇は多くの観客の心をわしづかみにしたのです。

On the other hand, about 300 years ago, Piinshi was introduced to South of Taiwan from China. Puppets of Piinshi are shed lights from their back, and their shadows are displayed on a screen. In Kaohsiung, people have made effort into this technique. The cultural alliance between Kaohsiung and IIDA has been tight through the Piinshi puppets.

布袋劇に対して、約300年前に皮影劇が中国から台湾の 南方に伝わりました。皮影劇は、人形の後方から光を当て、 影をスクリーンに映して上演します。高雄市では、人々は この技術の習得に力を入れています。高雄市と飯田市との 文化的結びつきは、皮影劇を通して強くなってきました。

These days, the target audience of Taiwan's puppet shows has been focused on the youth, or the ages enjoying digital techniques. Now, even CG collaborates with puppets. So, let's have a look at this video clip.

How cool it is!! We can enjoy this culture not only in TV broadcasts, but also in movies and PC games. In broad range of Taiwanese media, we will encounter with these spectacular entertainment through puppet shows. We look forward to the evolution of Taiwan's puppet shows.

今日、台湾の人形劇の観客ターゲットは若者やデジタル 技術に興味のある人々です。今や人形劇はCGともコラボ を果たしています。一例として、次の動画をご覧ください。

かっこいいですよね!この台湾の人形劇文化をテレビ番組だけではなく、映画やパソコンゲームでも楽しむことができます。台湾の幅広いメディアで、人形劇を通して、これら大迫力のエンターテイメントに出会うことができます。台湾の人形劇のさらなる発展から目が離せません!

#### 12. 春川市(大韓民国)

Here is another country we cannot miss!

The origin of Korean puppetry has not been determined, but it can be dated back to the times of Goryeo, during the 10th century. Among string puppets, rod puppets and glove puppets, rod puppets are still in use in present times. This puppetry is a traditional Korean puppetry, Namsadang.

ここにも見逃せない国があります!

韓国の人形劇の起源ははっきりとは分かっていません。 しかし少なくとも10世紀から始まる高麗の時代までは遡る ことができます。糸繰り人形、棒人形、手人形のうち、棒 人形が現在に受け継がれています。今ご覧頂いている動画 は韓国の伝統的な人形劇、ナムサダンです。

The development of Korean puppetry was led by the establishment of UNIMA-Korea in 1979. Around 1990s, puppet performers and local organizers have started holding puppet festivals in every part of South Korea.

韓国の人形劇の発展は1979年、UNIMA韓国の設立によりもたらされました。1990年頃から、人形遣いや地元の主催者により韓国の至る所で人形劇フェスティバルが開催されるようになりました。

Chuncheon Puppet Festival is one of the three major puppet festivals in East Asia. This festival started in 1989. Since then, not only domestic but also international puppet teams have participated in this festival. Chuncheon Puppet Festival has maintained a strong connection with IIDA. For instance, Kumsol Puppetry Arts Institute and Maruhan Puppetry Company, from Korea, have just finished playing puppetry at this Iida Puppet Festa, and they are going to play in Chuncheon,

春川人形劇祭は東アジア三大人形劇祭の一つに数えられます。この人形劇祭は1989年に始まって以来、国内だけでなく国外の人形劇団も参加しています。また、春川人形劇祭は飯田と強い結びつきを築いてきました。例えば、今回いいだ人形劇フェスタで公演を行ったクムソル人形芸術研究所とマルハン人形劇団は、春川人形劇祭でも公演を行う予定です。

#### 13. 大阪市(日本)

Finally, we would like to introduce Japanese puppets. Let's start from Osaka. Actually, Japanese puppet was originated in Osaka. Gidayu, which was created by Gidayu Takemoto, is a chanted narration along with the sounds of Shamisen, a traditional Japanese musical instrument. There are three types of Shamisen, and Gidayu needs Hutozao which is bigger than others. The Hutozao shamisens are also used in famous puppet called Kuroda puppetry here, IIDA.

最後に、日本の人形劇について紹介します。まずは、日本の人形劇の起源である大阪から始めましょう。(人形浄瑠璃には)竹本義太夫により始まった義太夫が用いられます。この義太夫とは日本の伝統楽器である三味線の伴奏にセリフを載せるものです。三味線には三種類あり、義太夫では太棹という大きい三味線が用いられます。太棹三味線は、ここ飯田で有名な黒田人形劇でも使われています。

In the 18th century, there were several puppet companies in Osaka. Bunraku trope integrated the special music and techniques of others. Now, Bunraku trope has become the most famous and traditional puppet performances in Japan.

18世紀、大阪には複数の人形劇団がありましたが、「文楽 座」が他の劇団固有の音楽や技術を統合し、今では文楽座 が日本でもっとも有名かつ伝統的な人形劇となっています。

There is a puppet festival in Osaka which is similar to this Iida Puppet Festa every year. This festival is held in temples and parks around Tennoji-temple. The spirits of puppetry since 17th century are still fascinating local people.

大阪にも、今回のいいだ人形劇フェスタと同様の人形劇フェスティバルが毎年あります。天王寺周辺の寺や公園で開催されており、17世紀から続く人形劇の精神は、今なお、地元の人々を魅了しています。

#### 14. 瀬戸内市(日本)

In Setouchi City, in honor of the feat of Setouchi native doll maker, Kinosuke Takeda, "Kinosuke puppet festival" is held in every August. In this festival, some elementary school students and adults give performances to raise the cultural awareness. This year, Kinosuke Festival celebrated its 30th anniversary, becoming more and more well-known to people in Setouchi City. Kinosuke dolls are famous with their accurate handling techniques of strings. The detailed movements even visualize the emotion of each puppet.

瀬戸内市では、瀬戸内出身の糸操り人形師である竹田喜之助の偉業を讃えて、「喜之助人形劇フェスタ」を毎年8月に開催しています。このフェスティバルでは、大人はもちろん小学生たちも公演を行い、住民たち自身の文化意識を高めています。「喜之助人形劇フェスタ」は今年30周年を迎え、瀬戸内市に住む人々にますます知れ渡るようになっています。また、竹田喜之助氏が作った人形は、人形遣いが操る糸の正確かつ高度なテクニックで有名です。繊細な動きは、人形それぞれが持つ感情を具現化しているようです。

This movie is a story of a little orphan girl and a fairy of snow, named Yukinko. They once became close friends with each other, but suddenly, one unexpected accident separated them. It is such a sad story.

この映像は、小さな孤児の女の子と、「ゆきんこ」と名付けられた雪の妖精の物語です。二人は一度親友になりますが、突然予期せぬ出来事によって離れ離れになってしまうという悲しいお話です。

Speaking of a sad story, last month, a disaster caused by heavy rain occurred in western Japan. Setouchi City was also seriously damaged. Therefore, at the Kinosuke Festival next week, puppeteers hope to heal and cheer those who suffered from the disaster by pleasurable puppet shows and fund-raising.

悲しい話といえば、先月、豪雨が西日本を襲い大きな災害が起こりました。瀬戸内市もまた、深刻な被害を受けました。来週行われる「喜之助人形劇フェスタ」で、人形遣いの皆さんは楽しい人形劇と募金活動によって、災害で苦しんでいる人々を癒し、元気づけたいと願っています。

#### 15. 南あわじ市 (日本)

It's question time again! Where is said to have been born first in Japan? — A. Hokkaido/B. Sado Island/ C. Awaji Island/ D. Kyushu

The answer is ... C. Awaji Island!

またまたクイズの時間です。日本列島で最初に生まれた とされている島はどこでしょう?

A北海道、B佐渡島、C淡路島、D九州 正解は…Cの淡路島です!

According to Kojiki, the oldest historical record in Japan, Awaji Island was made first in Japan by the two pillars God, Izanagi and Izanami. The Puppet Show in Awaji Island began at a shrine dedicated to the god's son, Ebisu. Ebisu is fishing a snapper and dancing with a song in the video.

日本最古の歴史書である古事記によると、淡路島は二柱の神によって日本で一番初めに作られました。神の名前は、イザナギノミコト・イザナミノミコトです。淡路人形芝居はその神の息子である「恵比寿様」を称えた神事として始まりました。この映像の中で、踊り、歌を歌いながら鯛を釣っているのが恵比寿様です。

The Awaji Puppet Show showed the heyday in the 18th century but it was steadily declining because new diverse

entertainment won the hearts of people. However, local experts have tried not to let Awaji dolls fade away. Then the revival of traditional puppet elements has begun. The performances have been authorized as "an Important Intangible Folk Cultural Property" by the national government. Subsequently, successor organizations such as youth volunteers try to raise the momentum towards puppet revival. To see its great progress, do not miss the upcoming Awaji Puppet Show!

淡路人形芝居は18世紀に盛り上がりを見せましたが、その後、新興の多様な芸能が大衆の人気を奪いだし、静かに衰退していきました。しかし、地元淡路の専門家が淡路人形芝居を絶やさない活動を続け、伝統的な人形文化の復興が進んできました。淡路人形芝居は、「国の重要無形民俗文化財」に認定されるまでになりました。その後も、若者の有志による後継者団体などが復興を支える動きを進めています。これからの淡路人形の発展も、見逃せません!

#### 16. 現代社会と人形劇

There are a great variety of puppets gathered in this festival once a year. It is a precious opportunity for everyone to get to know more about puppet culture. Poh has also been able to enjoy this puppet journey with you.

多種多様な人形が1年に1度、世界中からこのいいだ人形 劇フェスタにやって来ます。全ての人にとって、人形劇文 化を知るとても貴重な機会です。ポーもこの多様な人形劇 を見聞する旅をあなたと一緒に楽しみました。

To make this presentation, we have done some research on puppet culture. We have gradually come up with a question in our mind: "What kind of puppet culture is needed to satisfy the demand of people in modern society?" As what we have introduced so far, puppet shows can be tourist attractions in many places. But it is not the only attractions of puppet and puppet shows.

私たちはこのプレゼンテーションを作るために、人形劇 文化について様々なリサーチを行いました。そのなかで 段々と、私たちの心の中に1つの疑問が浮かんだのです。 「現代社会を生きる人々を満足させるために、どのような 人形劇文化が求められているのか?」これまで紹介してき たように、人形劇は多くの地域で観光資源になり得ます。 しかしそれだけではありません。

For example, why do we adults enjoy puppet shows? We sometimes see some ironic messages from puppet shows. We, however, see them as entertainment in many cases, as some comical movements of puppets buffer criticism

and resentment.

例えば、なぜ大人が人形劇を楽しむのでしょうか?時に 人形劇には皮肉を込めたメッセージが含まれていることが あります。しかし多くの場合、人形の滑稽な動きが批判や 腹立たしさを和らげることにより、私たちは人形劇をエン ターテイメントとして楽しむことができます。

Indirectness is actually what we rely on in our daily lives. For example, it is very easy for us to write some text messages by using face stamps in SNS. These stamps, like puppets, represent what we feel indirectly.

実際、間接性は私たちの生活の中でとても重要なものです。

例えば、SNSでメッセージを送る際に絵文字やスタンプを使用することで、間接的に思いを相手に届けることができます。絵文字やスタンプのように、人形劇も私たちの伝えたいメッセージを間接的な方法で観客に届けます。

In addition, what can puppets work for children surrounded by digital appliances? How can we promote puppet culture among those children? We would like to make two suggestions. First way is to integrate puppet shows with the current technologies such as computer graphics or virtual reality. Second way is to raise children's awareness on puppet culture by giving them more opportunities to experience puppet shows in life.

では、デジタル製品に囲まれている子供たちに、人形劇は何ができるでしょう?どうすれば子供達たちに人形劇を広められるでしょう?私たちから2つの提案をしたいと思います。1つ目は、CGやVRのような最新技術と人形劇を融合させることです。2つ目は、子供達の人形劇に対する関心を高めるために、人形劇を体験する機会をより多く与えることです。

Mr. Yuki Isshi, who is one of professional string puppet performers of this festival, said, "In order to better adapt to the modern society, it is essential to revitalize puppet culture and to continue to produce new works by the integrated use of traditional techniques and new experiences."

このいいだ人形劇フェスタに参加している糸操り人形遣いの結城一糸さんはおっしゃっていました。「現代社会に適合するには、人形劇文化に新たな息を吹き込むこと、伝統的な技術と新たな経験を融合させた新たな作品を作り続けることが不可欠である」と。

Being part of the modern society, we believe puppet

shows can touch people's hearts as long as they can reflect the unique culture and social backgrounds of our times. Also, new puppet fans like us will continue to support the puppet shows. We hope that our presentation would be the seeds for further development in the puppet's future. Thank you for listening.

現代社会の中で、人形劇が独自の文化と現代の社会的背景を反映し続ける限り、私たちは人形劇が人々の心を打ち続けると強く信じています。そして私たちのような新たな人形劇のファンも人形劇文化をサポートし続けます!私たちのプレゼンテーションが少しでも、未来に向けた人形劇の発展の種になれば幸いです。ありがとうございました。

●プレゼンテーション作成: 津田塾大学学生(50音順) 井上わかほ・戸根木希・中川智恵・西岡瑞・羽田彩乃・福 本ゆり・増田珠美・増野晶子・松田夏美・山口もね

●英仏訳監修: 名古屋大学学生(アルファベット順) Amibang Awah Martin, On Ni Chan, Martin Dumas, Imbolason Augustin, Xiaoyan Lyu, Waruni Perera



# 牧野光朗編著

# 『円卓の地域主義一共創の場づくりから生まれる善い地域とは一』

(事業構想大学院大学出版部、2016年)

大月短期大学経済科 教授 慎平 龍宏

#### 1. はじめに―本書のねらいと概要―

本書の編著者である牧野光朗・長野県飯田市長が考える 「善い地域」とはどのようなものだろうか。それは、本書の 「はじめに」に明確に記されている。すなわち、「人が当事 者意識に目覚め他の人とつながり、地域社会を形成してい く。自分に与えられた役割(仕事)を見つけ、自分の能力 を発揮しそれが役に立つことを実感できる」地域社会のこ とであり、人々が相互に自立し、自律的な生活を形成しつ つも、地域の一員となり地域に参加・関与し、地域に必要 な役割を担い貢献する地域社会のことである。さらに、本 書の総括章である第4章において、「『善い地域』という考え 方は、(中略)人々の関係の底流に互酬・互恵・相互扶助 の世界があって、その上に人々の信頼関係が蜘蛛の巣状に 展開されており、その有機的連帯によって秩序が形成され、 そして価値観が共有されていると考えられる」(p.176) と 述べている。そして、そのような地域社会を実現できる自 治体の規模は10万人程度、まさに飯田市が擁する人口規模 ではないか、という仮説の下で議論を展開し、最終章(4章) において「善い地域」の創造とその最適規模について考察 を試みている。巻末には、牧野市長の司会の下、「10万人規 模の地方都市で生きるということ」と題して、内発的地域 経営に造詣の深い清成忠男氏 (事業構想大学院大学学長)、 飯伊地区屈指のグローバル・ニッチ・トップ企業を率いて こられた萩本範文氏 (多摩川精機株式会社前社長)、そして 本書の第3章を中心に執筆され、地域づくりに関心を持つ 稲葉美里氏(首都大学東京大学院生)による鼎談が掲載さ れている。

思えば、現代に生きる私たち日本人は、牧野市長がいう「善い地域」とは真逆な社会で生活していると言ってよいのではないだろうか。すなわち、個人が孤立して居場所がなく(社会的孤立)、他方で常に権威や権力に依存せざるを得ない生活を送り(依存・他律的生活様式)、さらに次世代を担う若者が「自己有用感」(自分は周りに対して働きかけ、より良く地域社会を変えていくことのできる価値ある存在

であるという自己肯定感)を持ちにくく、仲間内だけの交友関係に閉じこもらざるを得ない社会のことである。このような人間が疎外されている社会は、自然災害に代表される外的ショックに対して著しく脆く、また回復力にも乏しい。生活様式の各部面(健康・教育・家族・人間関係・経済・労働・福祉・環境等)においても多くの問題を内包している社会でもある。このような社会の閉塞状況は、京浜・京阪・名古屋エリアの三大都市圏に総人口の5割以上が集中する「都市型社会」の負の側面であり、ひいては大都市部での出生率の著しい低下に象徴されるような社会の持続性の危機へと進展しているのである。牧野氏の標榜する「善い地域社会」に対して憧憬の念を抱く読者は少なくないだろう。

とはいえ、「善い地域」という表現に、いささか押し付けがましさを感じる諸氏もおられるかもしれない。物事の「善悪」の判断は個人の価値観に基づく問題であり、一概に決められるものではない、という主張もありうるからである。しかし人類は、個人の生き方や政治、社会などの「善いあり方」を思索してきた歴史を持っている。それは言うまでもなく「哲学」の重要なテーマであり、現代社会を生きる我々にとっても引き続き検討されるべきことでもある。いやむしろ、このような閉塞感が漂う社会に生きる今だからこそ、「哲学する」ことが求められていると言えるだろう。

価値観の多様性が重視される昨今の社会状況において、 あえて目指すべき「善い地域」を一地方都市の実践から問 うことを主題とした本書は、まさに「生きた政治・公共哲 学の書」と言えるだろう。現実の市政を預かる現職の市長 による模索と提言の書という意味でも大変興味深い。

本書の総括章である第4章では、前章までの飯田市における実践的な取組を踏まえて、「善い地域」のあり方を、①「善いコミュニティ」、②「善い経済」、③「善い環境」に分解して捉え直している。いずれも、「善い地域」に住まう人々にとって欠くべからざる要素であることに間違いはない。評者は、飯田市が上記①~③の要素をいかにして実現しようとしているのか、すなわち「善い地域」を実現す

るための具体的方策である「善い統治 (ガバナンス)」の あり方にも着目しつつ、本書の豊富な内容を整理しようと 思う。

# 2. 「善いコミュニティ」―地域における価値観の共有の重要性―

我が国の「国づくり」の歴史は、哲学者の内山節氏が言うように、共同体解体の歴史であった(『共同体の基礎理論―自然と人間の基層から』農山漁村文化協会、2010年)。国家の統一、とりわけ明治期以降の中央集権化は、地域の共同体が自己統治し、アイデンティティを確立する分権社会を破壊することなしにはなし得なかった。また戦後のケインズ主義的な財政・金融政策、さらには国家一元的な社会福祉政策は、政府(公・public)と個人・民間企業(私・private)の義務―権利関係を強化するも、他方でその間(はざま)に存在してきた地域(共・community)を軽視・弱体化させることにつながった。自ら知恵を絞り、自分たちでできることを可能な限り追求し、それでもなお不可能なことを上位の政府が補うという「補完性の原理」(p.163)がそのような社会に根付くわけもなく、「お上(かみ)依存主義」が蔓延するに至った。

牧野市長は、ドイツに典型的に見られるような分権社会構造は、江戸期の幕藩体制に見られたように、我が国に根付いていなかったわけではなく、明治維新後の<近代化・富国強兵・殖産興業→軍国主義国家→戦後の中央集権的官僚体制>という時代変遷の中で次第に弱体化せしめられ、中央と地方の格差が拡大していったとする。そしてその格差是正のための諸施策がトップダウンの官僚システムによって行われ、地方の受け身・中央依存体質が定着していったと断じる(p.162)。その過程で、家族関係や地域社会の慣習的な生活意識、文化的伝統、生活環境等の解体・破壊が進んだことは既に見てきたとおりである。

それでは、「善いコミュニティ」において不可欠の要素は何か?「豊かな人間関係を構築して質の高いライフ・スタイルを実現できる地域」が一般的に「善い地域」と思われがちであるが、筆者はそれでは不十分であり、個人と地域共同体の双方の「当事者意識」を高めることが必要であると主張する。

「個人の当事者意識」については、現在の私たちの生活が 先人から受け継いだものの中にあることを自覚し、自分の 居場所となる地域を意識したライフ・スタイルの構築が重 要であることを指摘する (p.170)。

また「地域共同体の当事者意識」を高めることは、「コミュニティの質」、すなわちその集団における人間関係の質を高めることによる「質の高いコミュニティの形成」につながるとする。そしてそれを実現する上で、(1) 主体的参画、(2) 自治性、(3) 価値観の共有、の3つの実践が重

要と指摘する (p.172)。

飯田市においてこの3つの実践が行われ、地域共同体の当事者意識が育まれている場が「飯田型公民館」であることは言うまでもない。高度経済成長が一段落した1970年代に、地域自治の拠点として改めて公民館の位置づけを見直す中で確立された4原則(①地域中心、②並列配置、③住民参画、④機関自立)(p.103)は、変化する社会情勢の中で、住民の当事者意識を育む「学び、交流し、実践する場」としての公民館の役割を明快に示している。と同時に、若い市役所職員を公民館主事として地域に配置することにより、地域の課題を行政と住民が一体となって解決していく文字通りの「官民協働の場」とする取組も、本書の重要なキーワードの一つである「補完性の原理」の実践の場への落とし込みとして理解できよう。

この<当事者意識の醸成→質の高いコミュニティの形成 >というプロセスは、本書タイトルである「円卓の地域主 義」の核心部分を構成するものであると同時に、評者の「善い統治(ガバナンス)」の具体的方策として特筆されるべきものだろう。

#### 3. 「善い経済」─信用・信頼関係の構築と経済的自立-

原則的に自由な行動原理が重視される経済のあり方につ いても、筆者は極めて価値明示的である。一般的に「産業」 は、農業や製造業のように、地域内の資源を用いて財を生 産し、地域外の需要に応えて販売することにより「外貨」 を稼ぐ「基盤産業」と、サービス産業や流通・小売などの 非製造業といった域内住民の需要に応えて生活サービスを 提供し、生活利便性を高める「非基盤産業」の2つに概念上 区分することができる。筆者は、「善い地域」の経済のあり 方における「基盤産業」とは、域内に核となる拠点を形成 し、域内・域外・海外とも連携するような産業集積の形成 が重要とし、また「非基盤産業」は域内経済循環の高度化 と効率性の向上を目指し、互酬・信頼関係に根差した取引 が行われることが肝要である、と指摘する。地域を「共に 生き、価値を創造し共有する場 = 共創の場」と位置づけれ ば、個人や企業の自由な利益追求を尊重しつつも、その活 動の範囲や様式は、地域の持続性や発展とそれを通じた経 済的自立の実現によって得られる共同利益という「地域共 通の目的」に従属すべきである、との指摘は、過度に市場 原理を信奉する新自由主義やグローバリズムに欠如してい る「秩序自由主義」(p.175) に基づく経済運営という、「地 域社会に埋め込まれた経済 | (K.ポランニー) の重要性を示 唆している。

いうまでもなく、そのような地域経済運営の主役は、地域の資源を保全・継承・活用し、伝統や文化とも結びついた産業を時代に即して創造してきた数多の企業家や、技術

を継承し発展させてきた無数の働く者たちであろう。その 地道な営みこそが、各々の経済規模は小さいが、その集積 によって地域経済の自立度を高め、中央に依存しない産業 構造を創り上げる「小さな経済の積み上げ」の原動力とな る。鼎談に登場する清成氏が主張するところの、地域経済 の内発的発展の核心である産業の「歴史的経路依存性」は、 飯田市を中心とする下伊那地域ではっきりと確認すること ができる(図1参照)。衰退過程にあるかつての主要産業の 特色の一部が発展し、新しい基盤産業が形成されていくと いうこのプロセスは、やはり鼎談に登場する多摩川精機前 社長の萩本範文氏の「産業は廻り舞台」(p.142)という言 葉に集約されている。

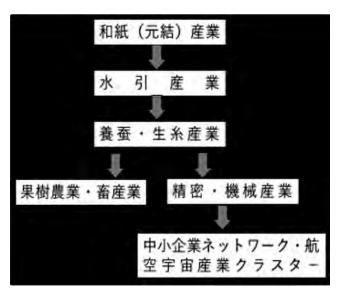


図1 飯伊地域における基盤産業の変遷過程 出典: 評者作成。

### 4. 「善い環境」―地球的視点から「分権型エネルギー自治」 を構想する―

飯田市のまちづくりにおいて「環境」は政策の柱の重要 な一つである。1996年に「環境文化都市」を第4次基本構想・ 基本計画に掲げ、2007年にはその理念を「環境文化都市宣 言」として市議会で決議した。「宣言」では、「環境」を 「自然環境」だけでなく、先人から受け継いた歴史や伝統、 文化の上に成り立っている「生活環境」まで広く捉え、「『持 続可能性』と『循環』を基本にして自分たちのライフ・ス タイルから社会の有り様に至るまでをあらためて見直し、 『環境に配慮』する日常の活動を『環境を優先』する段階 へと発展させながら、新たな価値観や文化の創造へと高め ていく必要」があり、「市民、事業者、行政など多様な主 体の積極的な参加と行動とによって人も自然も輝く個性あ る飯田市を築く」ことを誓っている。ここでも、「善い環境 とは何か?」という問いと価値観の明示、そして「既存の 価値観の変革」の必要性が強く意識されている。持続可能 な環境とは両立しえない、高度成長以降の日本人のライ

フ・スタイルを規定してきた大量生産・大量消費社会を、 基礎自治体の政策や地域での実践という労働と生活の範囲 から改革していく方針を鮮明にしていることに注目すべき だろう。

さらに特筆すべきは、「善い環境」を実現する上で変革が 不可欠でありつつも、我々の社会に深く浸透し、容易に払 拭することができない大量生産・大量消費生活様式と、上 記の「コミュニティの質」の劣化とが密接に関連しており、 しかも市内の一地区の実践である「上村プロジェクト」が、 変革の一つの方向性を指し示してくれていることである。

化石エネルギーを際限なく使用して必要以上の財を生産し、それを大量に消費させる生活様式は、決して自然発生的に生まれたものではなく、資本制経済システムが拡大していくために意図的に作り出されたものである。そのためには、従来の自然と共に生きる生活様式や、それを支える社会システム(家族関係と地域社会の慣習的な生活意識や文化的伝統、生活環境など)を解体・破壊し、アノミー化(無規範・無規則状態)や消費生活の個人主義化を進めることが必要不可欠であった。地域コミュニティの衰退は、決して生産様式の変化(一次産業から二次・三次産業へ)のみならず、消費・生活様式の変化(自然に配慮し、地域環境の持続性を優先した秩序的消費から、個人の欲望を満たすことを優先する私的大量消費へ)によっても促進されたのである。

そのような視点に立つならば、「地域環境権」(再生可能 エネルギーを地域住民共有の財産とみなし、地域住民が優 先的に活用する権利)を前提に、化石燃料エネルギー依存 の生活から脱却し、地域資源を活用した再生可能エネル ギーで得た売電収益をコミュニティ再生における最重要課 題の一つである「子育て支援策」に配分し、地域社会の自 律的存続のために積極的に投資する「上村プロジェクト」 の意義は非常に大きい。なぜならば、環境を優先する上で 不可欠な、化石燃料由来のエネルギー依存から脱却したラ イフ・スタイルを地域自らの手に取り戻すことを通じて、 劣化しつつあったコミュニティの質を高めていくことがで きる可能性を示しているからである。「分権型エネルギー 自治」の実践のさらなる豊富化は、「生活様式の変革を通じ た社会変革=足元からの静かな革命」の可能性を大いに拓 くことにつながる、と感じさせてくれる。

# 5. さいごに一飯田市の実践から「公共性とは何か」を考える—

本書を読み、また飯田市に通い調査等を通して改めて感じるものは、市長や市民の方々が「何が大切なこと(=正義)なのか?そのために誰が何をすべきか?この地域でどう生きていくのか?」という問いと、その答えを協働的な実践の中から見出そうとする、しなやかでしたたかな「自

前主義」の精神である。いうまでもなく、飯田のまちづくりの合言葉である「ムトスの精神」(p.88) に基づく地域づくりは、「大切なこと」と「なすべきこと」の両輪が地域で共有され、噛み合ってこそ前進するのであろう。

「何が正しいのか?大切なのか?」という問いに対して、「それは各個人によって異なるのだから、そのような問いは無意味だ」とうそぶくことは簡単だろう。しかし、私たちの社会はそのような個人主義的行動様式に席巻されており、個々人が社会的に孤立することによって多くの問題が生じていることは冒頭で述べたとおりである。しかも、この価値観から導き出される「正しいこと」とは、「個人の『選択の自由』の保障が重要」という、至ってありきたりの結論である(これ自身はもちろん大切ではあるが)。

しかし、「モラル(倫理観や道徳意識)なき個人主義の 蔓延」が様々な問題の根底にあることを想起するならば、 結局私たちは、「公共性」とは何か、すなわち「どのよう なモラル構築すべきか?それに従って生きるとはどういう ことか?」という「生きる目的」を問う哲学的命題、すな わち「『自己統治の自由を打ち立てる=アイデンティティを 確立する』ためには何が必要なのか?」という「真の自由」 を問う課題に行き当たらざるをえない。

この「地域に生きることの目的」を、地域に沈潜し探求することこそが、「地域で共有する価値観」の醸成につながるのだろう。飯田でも、小学生から高校生までを対象とした「地域人教育」や、全国の大学生を対象とした「学輸IIDA」で実践が積み重ねられ、学びのネットワークと人材還流の仕組みが構築されつつある。「地域で生きる目的」を学び合う風土や文化が希薄な地域に、人材が還流することは期待できないであろう。

このように、事物が何のために存在するか、行為が何のためになされるかを示す「目的」こそが、その事物の存在やその行為を理由づけるとする考え方は「目的論」と呼ばれているが、本書に即して言えば、その目的こそが「善い地域」において共有されるべき価値観=「共通善(common good)」(p.176)となるだろう。

目的論的思想は、アリストテレスに代表される古代ギリシャ哲学、カント、ヘーゲルのような西欧哲学のみならず、古代インド哲学にも見られる。また政治哲学ではマイケル・サンデルに代表されるコミュニタリアニズムや、心理学のアルフレッド・アドラーもその系譜に属する。そして興味深いことに、いずれの目的論的主張にも、<「個々の人間」と「コミュニティ(共同体)」との関係性>が重視されている点で共通している。さらに、「生きる目的」の重要な要素である「アイデンティティの確立」についても、コミュニティ(共同体)との関係性においてこそなしえるものである、とされる(サンデルらコミュニタリアンによる「負荷ありし自己」、アドラーの「共同体感覚」など)。

最後に、牧野市長は「善い地域」の最適規模に関する考察を行っており、社会的、政治的、経済的、文化的それぞれの局面において「価値観の共有」が必要であるが、その共有の範囲は自ずと限定的であることを強調している。それはそのとおりであり、「小規模自治体の消滅はやむを得ない」という昨今の諦観に対する強烈な一撃なのであるが、一方で現在の切迫した様々な社会問題を解決していくためには、この「最適規模」の同心円を外側に押し広げていかなければならない。無論、そこでは共有する価値観(共通善)の内容が問われるのであり、農山村や都市の地域レベル、さらには国家や世界レベルで、この社会の持続性と発展を目的とした共有されるべき価値観の構築が求められる。飯田に集う私たち研究者も、分野を超えて共有すべき価値意識の構築に努めつつ、一地方都市のかけがえのない実践を敷衍していく役割を担っていくことが求められるだろう。

## 大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

#### 【学輪IIDAの趣旨】

大学連携会議「学輪IIDA」は、飯田に価値や関心を有する大学研究者のネットワーク組織である。

飯田と大学との1対1の関係から、飯田を起点に様々な大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するため、平成23年1月に設立された。

学輪IIDAのコンセプトは、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」である。大学研究者同士が相互に知り合い親睦を深めながら、モデル的な研究や取組を地域とともに行っていこうとする試みである。大学研究者の有機的なネットワークの形成を通じて、大学の専門的な知見や人材を地域に呼び込み、これまで飯田が培ってきた経験や取組と融合することで、地域の課題解決や付加価値を高めていくような新しい形の大学的な機能の構築を追求していく挑戦でもある。

学輪IIDAは、役職や規約などの無い緩やかな(平らな)ネットワーク組織である。共通のキーワードは「飯田」であり、大学研究者による「ボトムアップ」で「ボランタリー」な活動を基本としている。設立以来、これまでの様々な活動を通じて、当初19大学43名だった大学研究者も、現在(平成30年12月)は55大学・機関、122名もの大学研究者が参画するまでに至り、ネットワークの輪が広がってきている。

学輸IIDAの知のネットワークを通じて、「地域(内部)の知」と「大学(外部)の知」が融合する「共創の場」を 創出し、持続可能性を追求する地域として、様々なモデル 的な取組を多様な主体の連携と協働のもと進めていく。

#### 【学輪IIDAのこれまでの主な取組】

#### 1 大学連携会議「学輪IIDA」の設立

(平成23年1月29日~30日)

飯田と関係の深い大学研究者が一堂に会し、今後の方 策等について検討するため「大学連携会議」を開催した。 会議の名称を「学輪IIDA」とし、様々な提案、課題等の 中から、現実的なもの、実施可能なものを抽出し、具体 的な行動を起こしていくため「プロジェクト会議」を設 置していくことを確認した。

#### 2 大学連携会議「学輪IIDA」全体会

学輪IIDA全体会は、年に一度学輪IIDAメンバーが飯田に会し、大学連携や学輪IIDAの取組に関する情報の共有、学輪IIDAの今後のあり方や具体的な取組に関する検討及び学輪IIDAの取組を市民など多くの方に知ってもらうことなどを目的に開催するもの。

例年、1月下旬の土日2日間で開催しており、土曜日は 誰でも参加可能な「公開セッション」を、日曜日は学輪 IIDAメンバーによる「内部討議」を開催している。

#### ○平成23年度学輪IIDA全体会

(平成24年1月28日~29日)

学輪IIDA全体会「公開セッション」を初めて開催した。 初回開催のため、参加研究者による自身の専門領域や飯田 との関わり、関心事項などに関するプレゼンテーションを 行った。

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議やウェブサイトの構築など、今後の取組に関する検討を行った。2日間で、17大学31名のメンバーが参加した。

#### ○平成24年度学輪IIDA全体会

(平成25年1月26~27日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪 IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び地域と大学との 連携による地域づくりの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

- ①豊橋技術科学大学シャレットワークショップ 豊橋技術科学大学:大貝 彰 教授
- ②デジタルプラネタリウム共同プロジェクト 和歌山大学:尾久土 正巳 教授
- ③参加型地域社会開発 (PLSD) 研修 日本福祉大学:大濱 裕 准教授

「学輪IIDAプロジェクト会議報告〕

- ①共通カリキュラム構築プロジェクト会議 立命館大学:平岡 和久 教授
- ②飯田工業高校後利用プロジェクト会議 追手門学院大学:小畑 力人 教授 [パネルディスカッション]

テーマ:地域と大学との連携による地域づくりの

可能性について

コーディネーター: 飯田市長 牧野 光朗パネリスト:

東京農工大学大学院農学研究院

朝岡 幸彦 教授

飯田女子短期大学 高松 和子 教授 南信州・飯田フィールドスタディ講師

桑原 利彦 氏

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議の今後の取組や、旧飯田工業高校後利用に関する将来展望や具体的な整備などについて意見交換した。2日間で、18大

学33名のメンバーが参加した。

#### ○平成25年度学輪IIDA全体会

(平成26年1月25~26日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輸 IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「学びの場 飯田」の魅力や可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①地域社会システム調査実習 東京農工大学:朝岡 幸彦 教授

②法政大学西澤ゼミフィールドワークの取組

法政大学:西澤 栄一郎 教授 [学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議 立命館大学:平岡 和久 教授

②飯田における伝統工芸の活性化に向けた調査報告 京都外国語大学:高島 知佐子 講師

③飯田工業高校後利用プロジェクト会議 追手門学院大学:小畑 力人 教授

④知のネットワークを活用した人材育成に向けた取組 法政大学:高栁 俊男 教授

[パネルディスカッション]

テーマ:「学びの場 飯田」の魅力や可能性について コーディネーター:飯田市長 牧野 光朗 パネリスト:

法政大学人間環境学部:石神 隆 教授 豊橋技術科学大学建築・都市システム学系:

大貝 彰 教授

東京大学大学院教育研究科:牧野 篤 教授

「内部討議」では、各研究者の感じる飯田の価値・魅力・可能性に関する意見交換、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組及び学輪IIDA紀要作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、17大学32名のメンバーが参加した。

#### ○平成26年度学輪IIDA全体会

(平成27年1月24~25日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学 輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び右肩下がり の時代における持続可能な地域の実現をテーマにしたパ ネルディスカッションを開催した。

#### [大学の実践事例報告会]

①法政大学国内スタディージャパン研修 法政大学:高柳 俊男 教授

②グローカルシティ・飯田のおける多文化共生

上智大学:蘭 信三 教授

宮崎産業経営大学:福本 拓 准教授

「学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

和歌山大学:藤田 武弘 教授立命館大学:平岡 和久 教授

[パネルディスカッション]

テーマ:地方消滅時代における飯田下伊那 -右肩下がりの時代における持続可能な

地域の実現のために-

コーディネーター:

しんきん南信州地域研究所 林 郁夫 所長 パネリスト:

首都大学東京教養学部:大杉 覚 教授立命館大学政策科学部:森 裕之 教授

京都大学大学院経済学研究科:諸富 徹 教授

「内部討議」では、旧飯田工業高校後利用に関する検討、 学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組、及び学輪 IIDA機関誌作成に向けた意見交換などを行った。2日間 で、21大学38名のメンバーが参加した。

#### ○平成27年度学輪IIDA全体会

(平成28年1月23~24日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について 法政大学:酒井理 准教授、ゼミ生

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

東洋大学:小林 正夫 教授

[パネルディスカッション]

テーマ:「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの

意義とこれからの可能性

コーディネーター:

法政大学人間環境学部:石神 隆教授 パネリスト:

立命館大学政策科学部:平岡 和久教授

東京大学大学院工学系研究科:瀬田 史彦准教授

一般財団法人日本経済研究所:

大西 達也 調査局長

コメンテーター:飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用構想案に関する説明、学輪IIDAの活動を支える知の拠点のあり方、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、20大学32名のメンバーが参加した。

#### ○平成28年度学輪IIDA全体会

(平成29年1月21~22日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学 輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、信州大学航空機 システム共同研究講座の開講についての報告及び「様々 な「知」や「人財」が共鳴して集う地域の実現に向けて」 をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会] 飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学: 酒井 理 准教授、ゼミ生

飯田OIDE長姫高校商業科

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学:平岡 和久 教授

[信州大学航空機システム共同研究講座報告]

信州大学航空機システム共同研究講座の開講について

信州大学:柳原 正明 特任教授

[パネルディスカッション]

テーマ:様々な「知」や「人財」が共鳴して集う

地域の実現に向けて

コーディネーター:

法政大学人間環境学部:石神 隆 教授 パネリスト:

名城大学副学長 都市情報学部:

福島 茂 教授

和歌山大学観光学部長 観光学部:

藤田 武弘 教授

京都外国語大学外国語学部:

堀口 朋亨 准教授

コメンテーター:飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用に関する説明、 意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換な どを行った。2日間で、24大学42名のメンバーが参加し た。

#### ○平成29年度学輪IIDA全体会

(平成30年1月20~21日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、高等学校による活動紹介及び「イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」をテーマにしたフリーディスカッションを開催した。

[基調報告 I 学輪IIDA実践事例]

①飯田市を基盤とした地域社会と教育の結びつき ~LBS JAPAN TREK 2017 IN IIDA CITYを

事例として~

京都外国語大学 堀口 朋亨 准教授、学生 ②学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの取組 静岡文化芸術大学 高島 知佐子 准教授

[基調報告Ⅱ 活動紹介]

地域人教育の取り組みについて

飯田OIDE長姫高等学校 Sturdyegg

[フリーディスカッション]

ファシリテーター:立命館大学 平岡 和久教授 議論提起:法政大学 石神 隆教授

フリーディスカッション (自由討議):会場参加者

「内部討議」では、「産業振興と人材育成の拠点」活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する情報共有などを行った。2日間で、26大学46名のメンバーが参加した。

#### 3 学輪IIDAプロジェクト会議の設立

(平成23年3月23日)

平成23年1月の大学連携会議において確認された提案、 課題、意見等を踏まえ、今後実現可能な取組等について議 論し、具体的な方向性を見出すことを目的に開催した。

学輪IIDAにプロジェクト会議を設置し、旧飯田工業高校の利活用、地域課題にテーマにした共同研究の実施、学輪IIDAウェブサイトの構築などに取り組んでいくことを確認した。

#### ○旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の設立

(平成23年9月12日)

旧飯田工業高校の「教育施設としての活用可能性」 について、様々な角度から検討することを目的に設置 された。南信州・飯田フィールドスタディなど現在の 大学連携の取組からの積み上げと、リニア時代を意識 した大学的な機能の2つの視点で検討していくことを 確認した。

プロジェクト会議の詳細については、学輸IIDA機関誌「学輸」創刊号における「飯田工業高校後利用プロジェクト報告」(追手門学院大学社会学部:小畑力人教授)を参照。

旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の主な取組 (歩み) は、以下のとおり。

#### (平成23年度)

プロジェクト会議を設立するとともに、大学院大学の設置可能性検討に向け、岐阜情報科学芸術大学院大学を視察した。また、プロジェクト会議の趣旨や検討状況について、学輪IIDA全体会公開セッションで報告するとともに、内部討議にて今後の取組について意見交換した。

#### (平成24年度)

旧飯田工業高校の教育的な施設の活用の可能性について検討した。旧飯田工業高校の後利用検討に向けては、「飯田で何を学ぶのか」といった理念やコンセプトの検討が重要であること、その理念やコンセ

プトを実現に向け教育目的の達成に必要なカリキュ ラムの構築が必要であること、及びその教育を実践 するために必要な施設の有効な活用について検討す ることが重要であることが確認された。

また、リニアを活かした大学的な機能の視点として、共同教育課程、連合大学院、大学院大学の設置 可能性などについて調査、研究していくこととした。

#### (平成25年度)

旧飯田工業高校施設が、目指すべき地域像の実現に向けた地域振興や人材育成の拠点となることが重要であるとの認識のもと、その役割を担うことができる教育・研究施設(機関)としての活用可能性について検討した。旧飯田工業高校を活用した教育・研究施設(機関)には、新しい価値を創発していく機能(価値創発機能)や新しい形の大学機能が必要であるとの認識のもと、様々な人材、知識、経験、情報等が交差する「ナレッジ・スクエア」構想と、その活動に必要とされる施設のあり方について整理した。また、ナレッジ・スクエアとしての活用や実践を経て、将来的には高等教育機関(大学院大学)やコンベンション施設の設置可能性について検討した。

#### (平成26年度)

旧飯田工業高校を活用したナレッジ・スクエア構想について引き続き検討した。また、飯田市が実施した「大学院大学設置可能性調査事業」の一環で開催した「南信州における高等教育機関のあり方について考える」シンポジウムにおいて、旧飯田工業高校を研究教育施設として活用する具体案としてナレッジ・スクエア構想と大学院大学の設置可能性について発信した。

#### (平成27年度)

旧学校施設を活用した類似施設の調査として、「三鷹ネットワーク大学」と「IID世田谷ものづくり学校」の視察を行い、地域との親和性、学校施設を使用することの意義、施設運営には多様な主体の積極的な関わりが重要であること等を確認した。

また、学輸IIDA全体会内部討議にて、南信州広域 連合を中心に検討してきた旧飯田工業高校利活用構 想案「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の知 の拠点整備構想案」の考え方と、プロジェクト会議 にて導き出した「ナレッジ・スクエア構想」の考え 方の親和性を確認するとともに、これまでのプロ ジェクト会議を引き継ぎ、知の拠点形成に向け検討 するプロジェクト会議を設置することを確認した。

#### ○知の拠点プロジェクト会議の設立

(第1回プロジェクト会議:平成28年3月5日

第2回プロジェクト会議:平成28年10月8日)

旧飯田工業高校施設を活用した知の拠点の形成に向け、 学輪IIDAに有志メンバーによる「知の拠点プロジェクト 会議」を設立した。

第1回プロジェクト会議では、知の拠点の全体像、知の拠点の機能を高める「共創の場」、地域振興の知の拠点や大学サテライト・研究室のあり方などを中心に意見交換した。またプロジェクト会議として、知の拠点の目指す姿やその実現に向け、引き続き情報等共有しながら検討を進めていくこと、リニア時代を見据えこの地域にどのような知の拠点が必要であり、そこで如何にして魅力を形成し人財を引き寄せる磁力を形成し発信していくかなど、本質的な議論を進めていくことを確認した。

第2回プロジェクト会議では、第1回プロジェクト会議 以降の旧飯田工業高校施設の利活用に関する検討経過や、 施設所有者である県の方針決定や南信州広域連合の方針 内容について説明するとともに、知の拠点の重要な機能 を担う共創の場のあり方等について意見交換した。

#### ○共通カリキュラム構築プロジェクト会議の設立

(平成23年10月4日)

飯田に関わってきた大学研究者が有する飯田の価値を 集約し、共有化した「モデルカリキュラム」の作成と実 践を通じて、飯田を起点とした複数大学による新たな連 携モデルを構築することを目的にプロジェクト会議を設 置し、共通カリキュラムの基本的な考え方や今後の取組 について検討、確認した。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「学輪IIDA 共通カリキュラム構築プロジェクトの到達点と課題」(立 命館大学 平岡和久教授)を参照。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の主な取組 (歩み) は以下のとおり。

#### (平成23年度)

### ●プロジェクトメンバーによるシラバス案の作成と学 習会

プロジェクトメンバーが有している飯田の価値、 関心事項を取り入れたシラバス案を作成。12月11日 ~12日にプロジェクト会議を開催し、各教員が作成 したシラバス案の確認や学習会を開催する。

今後、シラバス案を元にしたモデルカリキュラム の作成と実践を、複数大学が連携しながら取り組ん でいく方向性を確認した。

#### (平成24年度)

# ●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、しんきん南

信州地域研究所及び市が連携し、大学の専門性と飯田でのフィールドスタディを組み合わせたモデルカリキュラム作成と実践に向け取り組んだ。地域の持続可能性に関する要素、要因を明確化するため、飯田のソーシャルキャピタル(社会関係資本)を可視化し、持続可能な地域づくりとの関係について検証する「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を、総務省の「域学連携」地域づくり実証研究事業の受託事業として実施し、3大学29名の大学研究者や学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「ソーシャルキャピタルを南信州・飯田で学ぶ」(名 城大学 福島茂教授)を参照。

#### (平成25年度)

#### ●地域環境政策フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、立命館アジア太平洋大学 及び市の連携のもと、飯田における環境モデル都市 の取組や多様な主体の実施体制を学ぶカリキュラム として「地域環境政策フィールドスタディ」を実施 し、3大学28名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「環境をテーマにしたモデルカリキュラムの作成と 実践」(立命館アジア太平洋大学 銭学鵬准教授) を参照。

#### (平成26年度)

### ●南信州飯田ニューツーリズムフィールドスタディの 実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学及び市の連携のもと、農山村再生に資するツーリズムの新たな可能性を探るカリキュラムとして「ニューツーリズムフィールドスタディ」を実施し、4大学37名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第2号における「南信州・飯田ニューツーリズムフィールドスタディ(共通カリキュラム構築プロジェクト)の成果と課題」(和歌山大学 藤田武弘教授)を参照。

#### (平成27年度)

# ●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、飯田における社会関係資本の重層的蓄積を学ぶカリキュラムとして「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を実施し、4大学41名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第3号における「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ 2015」 (東洋大学 小林正夫教授)を参照。

#### (平成28年度)

#### ●地域経営論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、地域経営の概念、地域経営の現状、成果や課題、持続可能な地域の実現に向けた地域経営のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域経営論フィールドスタディ」を実施し、5大学50名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第4号における「『地域経営論フィールドスタディ』の実施報告」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

#### (平成29年度)

#### ●地域文化論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学・ 静岡文化芸術大学及び市の連携のもと、飯田の人々 の地域への愛着や帰属意識を地域文化の観点から明 らかにすることを通じて地域活性化を実現するため の地域アイデンティティの形成のあり方などを学ぶ カリキュラムとして、「地域文化論フィールドスタ ディ」を実施し、5大学46名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第5号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト地域 文化論フィールドスタディ 2017」(静岡文化芸術大 学 高島知佐子准教授)を参照。

### 4 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会の設立 (平成30年度)

実行委員会は、飯田の価値の発見・共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認し、学びの体系化・「見える化」により、飯田や学輪IIDAの磁力を高め、新たな域学連携、大学間連携を通じて、地域と大学が共に学び合う場づくりや、高校と大学の有機的な連携の在り方の検討や実践的な展開等により、学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」へ繋げることを目指す。

#### 取組の柱

「共通カリキュラムの本格的な展開」 「高校と大学の連携した取組の展開」

- ①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ 東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・ 下伊那農業高校・飯田女子高校・飯田風越高校 (大学生57名 高校生5名) (外 一部参加高校生18名)
- ②地域経済フィールドスタディ 2018 大月短期大学・静岡文化芸術大学・立命館大学 (大学生 44名)

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2018 京都外国語大学・東京農工大学大学院・ 松本大学・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校 大学生・院生11名 高校生8名 教員9名) ソーシャルキャピタルフィールドスタディ及び遠し

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ及び遠山 郷エコ・ジオパークフィールドスタディは、飯田の高 校生も参加し、地域の学びを通じて大学生の学びを体 感する機会となった。

#### 5 学輪IIDAウェブサイトの開設

(平成24年6月)

飯田市や学輪IIDAに参加している大学・研究者間の情報共有や、学輪IIDAの取組に関する情報発信を目的に、学輪IIDAウェブサイトを開設した。

ウェブサイトのURL http://gakurin-iida.jpn.org/

#### 6 学輪IIDA機関誌「学輪」の発刊

学輪IIDAの取組や、大学研究者などの飯田における 教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、より多くの 方に知ってもらうことを目的に、平成26年度より学輪 IIDAの機関誌「学輪」を毎年1回発刊する。

#### 7 大学等の受入状況について

南信州・飯田フィールドスタディなどを通じて、当市 に教育・研究・調査等で訪れた大学研究者や学生数

年度	大学数	参加者数
平成20年度	14	176
平成21年度	15	120
平成22年度	16	299
平成23年度	17	422
平成24年度	16	558
平成25年度	27	759
平成26年度	24	956
平成27年度	30	768
平成28年度	35	634
平成29年度	46	648
合 計	194	4,692

※参加者は延べ人数

## 大学連携会議「学輪IIDA」名簿

(敬称略 H30.12.25現在)

	工 夕	大学機関等名・学部
1	氏 名 新井野 洋一	大子機関寺石・子部
2	岩崎正弥	<u> </u>
3	型型	_ <u> </u>
4	テ田 敏行	愛知大学
5	小玉 敏也	麻布大学
6	黒岩 長造	飯田女子短期大学
7	堀田 浩之	飯田女子短期大学
8	武分 祥子	飯田女子短期大学
9	岩崎みすず	飯田女子短期大学
10	新海シズ	飯田女子短期大学
11	兼子純	愛媛大学
12	若生 謙二	大阪芸術大学
13	青木 伸一	大阪大学
14	土井健司	大阪大学
15	植平 龍宏	大月短期大学
16	小畑 力人	追手門学院大学
17	大串恵太	追手門学院大学
18	七田麻美子	オープンサイエンスギルド、埼玉大学
19	サイド 第世 新来丁 - 第世 - 第世 - 第中 - 第中 - 第一 - 第一 - 第一 - 第一 - 第一 - 第一	オープンサイエンスギルド、埼玉八子オープンサイエンスギルド、筑波技術大学
20	塚原 直樹	オープンサイエンスギルド、現成技術人子
21	竹内 宏彰	オーノンサイエンスキルド、子都呂入子     金沢工業大学
22	伊東理	_ 並バエ来ハチ 関西大学
23	野間 晴雄	関西大学
24	廣岡 裕一	京都外国語大学
25	堀口 朋亨	京都外国語大学
	中嶋 大輔	京都外国語大学
26 27	中川 克平	京都外国語大学
28	大河 克干 枝元 益祐	京都外国語大学
29	影浦 亮平	京都外国語大学 京都外国語大学
	京用 元十 宮木 いっぺい	
30	諸富徹	京都産業大学 京都大学
31	木村 暁	国立遺伝学研究所
33	大石雅寿	国立民文台
34	中村 聡志	山陽学園大学
35	渡邊信彦	事業構想大学院大学
36	下畑 浩二	四国大学
37	高島 知佐子	静岡文化芸術大学
38	増田 幸宏	芝浦工業大学
39	大杉 覚	
40	蘭 信三	上智大学
41	飯島 東里子	
41	_ 1 5	
43	田中 清 脇若 弘之	信州大学
44	柳原正明	信州大学
45	佐々木 邦博	信州大学
46	中嶋 聞多	信州大学
47	上野山 裕士	情州八子
48	河藤 佳彦	事修大学
49	佐々木 茂	高崎経済大学
50	片岡 美喜	高崎経済大学
51		
52	仲川直毅	本川八子   中京学院大学
53	林良嗣	中部大学
54	山下亜紀郎	<u> </u>
55	呉羽 正昭	筑波大学 筑波大学
56	伊藤 由希子	
57	ア際 田布丁 Franz Waldenberger	ドイツ日本研究所
58	Isaac Gagné	ドイツ日本研究所
59	Daniel KREMERS	ドイツ日本研究所
60	機間 敏彦	東海大学
	牧野篤	東京大学
61	7人4) 馬	<b>ホ</b> ル八ナ

		(
	氏 名	大学機関等名・学部
62	新藤 浩伸	東京大学
63	李 正連 (イ・ジョンヨン)	東京大学
64	松山鮎子	東京大学
65	瀬田・史彦	東京大学
66	友田 清彦	東京農業大学
67		東京農業大学
	千賀 裕太郎	東京農工大学
68	土屋 俊幸	東京農工大学
69		
70	朝岡幸彦	東京農工大学
71	榎本 弘行	東京農工大学
72	澤佳成	東京農工大学
73	竹本 太郎	東京農工大学
74	井口 貢	同志社大学
75	多田 実	同志社大学
76	有井 健	同志社大学
77	小林 正夫	東洋大学
78	大貝 彰	豊橋技術科学大学
79	井上隆信	豊橋技術科学大学
80	松島 史朗	豊橋技術科学大学
81	浅野 純一郎	豊橋技術科学大学
82	辛島一樹	豊橋技術科学大学
83	劉一辰	豊橋技術科学大学
84	禹 在勇	長野大学
85	加藤 博和	名古屋大学
	10111	
86	中村英樹	名古屋大学
87	エマニュエル・レレイト	名古屋大学
88	大濱裕	日本福祉大学
89	江原 隆宜	日本福祉大学
90	高柳 俊男	法政大学
91	曽 士才	法政大学
92	大西 亮	法政大学
93	小門 裕幸	法政大学
94	酒井 理	法政大学
95	石神 隆	法政大学
96	西澤 栄一郎	法政大学
97	白戸 洋	松本大学
98	田開 寛太郎	松本大学
99	福本拓	宮崎産業経営大学
100	竹本田持	明治大学
101	横井勝彦	明治大学
101		明治大学
	3711 88	***************************************
103	水野の勝之	明治大学
104	大友純	明治大学
105	佐々木 宏幸	明治大学
106	福島茂	名城大学
107	井内 尚樹	名城大学
108	阿部 治	立教大学
109	野田 健太郎	立教大学
110	井出 万秀	立教大学
111	銭 学鵬	立命館アジア太平洋大学
112	JONES Thomas Edward	立命館アジア太平洋大学
113	須藤 智徳	立命館アジア太平洋大学
114	森裕之	立命館大学
115	平岡和久	立命館大学
116	佐藤龍子	龍谷大学
117	藤田武弘	和歌山大学
118	尾久土 正己	和歌山大学
119	大浦・由美	和歌山大学
120	藤井至	和歌山大学
121	山本由美	和光大学
122	早田 宰	早稲田大学

※上記のほかオブザーバー参加の大学研究者もいらっしゃいます

# 学輪IIDA 機関誌「学輪」 一投稿規程一

制定 平成26年4月1日 改定 平成27年4月1日

#### 1. 掲載論文の原則

- (1) 掲載原稿は、依頼原稿と投稿原稿に分けられる。
- (2) 投稿原稿のカテゴリーは、原則として「論文」「論説」「研究ノート」「調査報告」「講演記録」「その他」とし、 依頼原稿においては、編集委員会において適当なカテゴ リー設定をできる。また、投稿原稿については、上記の カテゴリーでは適応できないと判断できるものについて は、執筆者と編集委員会において適切なカテゴリーの設 定をできる。
- (3) 掲載原稿は、日本語によるものとする。但し、事前に編集委員会が認めたものはこの限りではない。
- (4) 依頼原稿は、編集委員会における編集方針のもと編集 局より依頼する。
- (5) 投稿原稿「論文」については、査読に付す。「論文」 以外のカテゴリーの投稿原稿については、編集委員会が 採否を決定する。
- (6) 執筆要領については別途定める。
- (7) 原稿の掲載について判断は編集委員会で行う。
- (8) 依頼原稿については、掲載ページ1頁につき1,500円の 原稿料を支払う。
- (9) 査読については、1原稿5.000円の査読料を支払う。
- (10) 事務局が特約を締結した場合を除いて、掲載原稿の著作権は学輸IIDAに帰属する。但し、執筆者自身は、当該原稿について自由に利用できる。なお、その場合、利用箇所、掲載し、発行年月等を速やかに事務局に報告しなければならない。

#### 2. 投稿の条件

- (1) 学輪IIDAのコンセプトに合致した内容であること
- (2) 原稿は未発表のものに限る。但し、既掲載であっても編集委員会もそれを認め、現掲載箇所を示した場合はその限りではない。
- (3) 投稿原稿は、学輪IIDAの構成員又はその指導する大 学院生若しくは大学院修了者によるものとする。共著の 場合は、筆頭著者が当該要件を満たす必要がある。
- (4) 学輸IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学院修 了者が投稿する場合、学輸IIDAの構成員たる指導教員 の承認を得なければならない。当該指導教員は、その承 認を与えるに当たり、本紀要の掲載に耐えられる内容で

あることを確認しなければならない。

#### 3. 投稿原稿の内容

飯田市における取り組みに関する研究の成果及び特定の地域・資料等の調査結果に関する報告、又は上記以外で、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」という学輸IIDAコンセプトの推進に寄与するもの。

#### 4. 投稿原稿の採否

投稿原稿「論文」は、査読に付す。査読実施の要領については以下に示す通りである。

- (1) 査読は、2名で行う。査読者は編集委員会における協議の上、編集局より依頼する。なお、査読者のうち最低 1名は学輪IIDAの構成員とし、学輪IIDAの構成員以外のものに査読を依頼する場合は、編集委員会は学輪 IIDAの趣旨及び査読要領を了解できる者を選任することとし、編集局は査読者に対してその旨周知する。
- (2) 査読者は、次の点に留意して査読をする。
  - 1) 原稿条件に合致しているかどうか
  - 2) 誤字、脱字がないかどうか
  - 3)他の文献等からの無断引用、剽窃、出典の不記載 など著作権をしていないかどうか
  - 4) 執筆要領に反していないかどうか
  - 5) 著しく論理性を欠くなど掲載に耐えられないものでないかどうか
  - 6) 査読者との見解の相違や新規性のある着眼点であったり、提言、発想等であることにより成熟性が欠けることを理由に、当該原稿を否定したり、新たな展開の可能性の芽を摘んでいないかどうか
- (3) 査読者は、投稿原稿につき、「掲載」、「修正後掲載」、「改稿後掲載」、「不掲載」の判断を編集局に通知する。また、査読者は「修正後掲載」の場合その箇所を、「改稿後掲載」の場合はその理由及び改稿のための指針、「不掲載」の場合はその理由を付して通知しなければならない。編集局はその結果を執筆者に通知する。なお、「掲載」はそのまま掲載を可能し、「修正後掲載」は、修正個所が修正されているかを編集局で確認の上掲載する。この場合この時点で「掲載」と判断されてものとする。また、「改稿後掲載」については再度査読に付す。
- (4) 2名の査読者のうち1名が「掲載」と判断した場合は、 掲載を認めるものとする。但し、執筆者においては、他 の判断の理由を考慮してその範囲において一部改変する ことを可能とする。
- (5)上記にかかわらず「掲載」が認められない場合は、執 筆者は編集委員会に異議申し立てをすることができる。 但し、学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学

院修了者が異議申し立てをする場合、学輪IIDAの構成 員たる指導教員の承認を得なければならない。

- (6) 前項の場合、編集委員会は、査読者及び執筆者の主張 を考慮して、掲載についての判断を行う。なお、必要な 場合は、対質の場を設定することができる。
- (7) 査読者は匿名とするが、前項の対質を行う場合は、この限りではない。

#### 5. 投稿手続き

投稿者は、正本1部、副本2部、および電子データを本 学会編集委員会宛に提出する。

#### 6. 経費負担

投稿料は徴収しない。ただし、刷り上がり頁数が執筆要領に記した上限頁数を超えた場合には、1頁あたり3,000円の超過料金を請求することがある。また、図版の作成し直しや特殊な印刷を必要とする場合、著者に実費を請求する。

#### 7. 校正

著者校正を原則とする。必要に応じて編集委員会が校正 を行う場合がある。

#### 8. 抜刷

50部は無償配布する。それ以上必要な場合は、実費請求する。

# 学輪IIDA 機関誌「学輪」 一執筆要領一

制定 平成26年4月1日

#### 1. 原稿の構成と書式

投稿する原稿の執筆に当たっては、原則としてワープロ またはパソコンを用いて作成すること。

また、原稿はA4用紙を用い、表紙・本文・注・参考文献・図表・要旨で構成する。各構成要素の書式は以下のとおりである。

- (1)表紙:表題・著者名・所属(原則1つ。ただし編集委員会が認めた場合はこの限りでない)・キーワード(5つ以内)を日本語と英語で記載する。書評については、キーワードのかわりに対象論文、書籍の書誌情報を原著の言語で記載すること。また、投稿原稿の種別についても明記すること。
- (2) 本文:日本語の場合、横書きで1頁あたり40行×40字で印刷する。外国語の場合はこれに準じた分量で印刷すること。
- (3) 注:番号順に掲載し、本文中の該当箇所に番号を付すこと。使用しない場合は省略することができる。
- (4) 参考文献:書籍の場合は「著者名・署名・出版社名・発行年」、論文の場合は「著者名・論文名・雑誌名・巻号・頁・発行年」に関する情報を必ず記載し、アルファベット順に並べて掲載すること。ただし、文献の挙示は著者の採用する方式に準拠するものとする。使用しない場合は省略することができる。
- (5) 図表:本文中に出てくる順に、注とは別に番号を付与 し、本文中の該当箇所にあらかじめ表示するか、該当箇 所を指示すること。ただし、図と表の両方を使用する場 合は、それぞれで番号を別に付与すること。使用しない 場合は省略することができる。
- (6) 要旨:日本語の場合は400字以内、外国語の場合はこれに準じた分量とする。

#### 2. 原稿の分量

刷り上がり頁数で、10頁を上限頁とする。1頁の刷り上がりは26字×47行×2段(2,444字)である。この長さを超えるものでも、編集委員会が必要と認めた場合は、掲載することがある。ただし、上限頁を超えた場合には、投稿規程に従った超過料金を請求することがある。

#### 「執筆者一覧」 (掲載順)

高島知佐子 (静岡文化芸術大学文化政策学部准教授)

壹貫田陽香 (京都外国語大学外国語学部国際教養学科)

恵島 尚子 (京都外国語大学外国語学部国際教養学科)

竹内 宏彰 (金沢工業大学客員教授)

堀口 朋亨 (京都外国語大学外国語学部准教授)

道祖 英一 (神奈川県相模原市役所)

瀬田 史彦 (東京大学大学院

工学系研究科都市工学専攻准教授)

学輪IIDA機関誌「学輪」は、2014年度の創刊以後、学輪

IIDAの取組や大学研究者等による飯田に関する教育・研究

活動の実績を蓄積するとともに、その内容を広くお知らせ

第5号の発刊にあたりましては、多くの大学研究者の皆

新たな編集体制のもと、より親しみやすい機関誌をめざ

し、更なる掲載内容の充実に努めてまいる所存ですので、 今後も多くの皆様からの積極的な投稿をいただきますよう

様から飯田に関する論文や様々な活動成果のご報告等を投

することを目的に、発刊を重ねてまいりました。

稿していただき、深く感謝申し上げます。

心よりお願い申し上げます。

## [編集委員]

大島

平岡 和久 (立命館大学政策科学部)

福島 茂 (名城大学都市情報学部)

小林 正夫 (東洋大学社会学部)

吉住千亜紀 (飯田市美術博物館、

四方圭一郎 (飯田市美術博物館)

槇村 洋介 (飯田市美術博物館)

尾久土正己 (和歌山大学観光学部教授)

伊藤由希子 (津田塾大学総合政策学部教授)

槇平 龍宏 (大月短期大学経済科教授)

廣岡 裕一 (京都外国語大学国際貢献学部)

上野山裕士 (摂南大学教育イノベーションセンター)

和歌山大学国際観光学研究センター)

幸 (津田塾大学総合政策研究所客員研究員)

藤田 武弘 (和歌山大学観光学部) 藤井 至 (和歌山大学観光学部)

## [編集局]

和歌山大学観光学部

編集局長 藤田 武弘 編集局 藤井 至

#### [事務局]

飯田市 総合政策部 企画課 大学・三遠南信連携係

大学連携会議「学輪IIDA」

# 機関誌「学輪」

第5号 2018

(年1回発行) 2019年1月発行

発行

飯田市

395-8501 飯田市大久保町2534番地

0265-22-4511

http://www.city.iida.nagano.jp 

印刷所

龍共印刷株式会社

[通信欄]

78